

良青年的な精悍さがなくなつて、昔のむらくを藻脱けの殻にしたものが圓馬になつてゐるのである。さう云ふところにしん打ちらしい貫祿が加はつてゐるやうなもの、しかし私は何とも云へぬ淋しい氣がした。その、藻脱けの殻の圓馬を見てゐると、外形的にはさう變らない一人の男を、そつくりそのまゝ老人に變へてしまつた年月の作用が考へられて、悽愴の感にさへ撲たれた。むらく、いや、圓馬自身は恐らく自分のさう云ふ變化を意識してゐないであらうと思ふと、ひとしほ哀れさが募るのであつたが、ふと氣がつけば、私自身、今では彼との共通點を同じやうに失つてゐるのではないか。而も私は、圓馬と違つて外形的にも最早争へない老人になつてゐるのである。だがそれにしても、關西へ流れて來たのは私ばかりでなかつたのを知つては、此の老藝人との因縁の淺くないことを感ずるのである。

○

圓馬についてももう一つ氣の毒に思ふのは、彼の話が此方の人にさう受けてゐないらしいことである。これは私の觀察であるから間違つてゐることを望むけれども、いつぞや、此のしん打ちの話が始まると一割か二割程の客が心なくもばた／＼と立つてしまつた。そんなことから、さうではないかと思ふのであるが、ほんたうを云ふと私が聞いても、大阪の土地ではあの話ぶりはあまりサラ／＼し過ぎてゐる。さすがに今では「鎗さび」の踊りでお

茶を濁すやうなことをしないで、短かくともちやんと纏まりをつけて引き退るのであるが、此の間死んだ春團治などのアクどさに比べると、あれでは如何にも油ッ氣が足りない。それに、話題が今の東京ならまだしも、昔の江戸の世界とあつては、いよ／＼以て此方の人の興味を惹きにくい。さう云へば、圓馬に限らず、東京から此方へ移つて來た藝人には皆幾分かその嫌ひがあるのではないか。たとへば古靱太夫なども、私は前にも云ふ通り淨瑠璃の巧拙は分らないながら少し齒切れがよすぎるのではあるまいか。それともそんなことを思ふのは、東京生れと云ふことを人から聞いたせゐであらうか。たゞ、さう云ふ移住藝人の中で、かの市川箱登羅が今もキビ／＼した江戸辯を使つてをり、羽左衛門の助六の芝居に唯一の大阪方として馳せ參じてゐたのには、何と云ふ譯もなく、微笑を禁じ得なかつたのである。

東京をおもふ

一九二

想ひ起す、大正十二年九月一日のことであつた、私は同日の朝箱根の蘆の湖畔のホテルからバスで小涌谷に向ふ送中、蘆の湯を過ぎて程なくあの地震に遭つたのであるが、そこから徒歩で崖崩れのした山路を小涌谷の方へ降りながら、先づ第一に考へたのは横濱にある妻子共の安否であつた。私は家族と八月の初旬から小涌谷ホテルに暑を避けてゐたが、一日から娘の學校が始まるので、二十九日の晩に妻と娘とを送つて一旦横濱へ歸り、自分だけ又戻つて来て三十一日の夜から蘆の湖畔へ遊びに行つてゐたのである。私は大の地震嫌ひで、天明や安政の大地震の話や地震學者の説などをかね／＼注意して聞きも讀みもしてゐたので、今、自分がかうして山路を辿りつゝある最中、横濱では大火災が起つてゐるに違ひないと思つた。自分の家は決して潰れないと云ふ信念があつたが、しかし渦まく焰の中をかよわい者共はどうして逃げ終せることが出来よう。いや、それよりも、瞬時の猶豫なく立ち退いて市中を突破しなければ、忽ち八方から火に包まれることを彼等は知つてゐる

だらうか。なまじ家が潰れないで、まあ助かつたとほつとしてゐるのではないであらうか。自分がゐたらそんな油断はさせないが、恐らくそこまでの分別はあるまい。私の眼には右往左往に逃げまどふ群集に交つて、火に追はれつゝ彼方へ走り此方へ走りする彼等が見えた。やう／＼一方の活路を見出して行くと、其方にも火の手が揚がつてゐる、又引き返して外の路を行くと、其方にも火の手が揚がつてゐる、次第に絶望し、氣力を失ひ、折角助かつたと思つた喜びがあきらめに變つて、父の名を呼び夫の名を呼びつゝ行き倒れる。私の頭には、想像し得られる最も傷ましい可憐な彼等の姿が浮んだ。今、私を呼び續けつゝだん／＼細くなつて行く哀しい聲が聞える氣がした。私は幾たびか横濱の方と思はれる空を望んだ。が、それでも萬一と云ふ希望が持てたのは、東京よりも横濱の方が町が小さいだけに、市中を抜け出ることゝ容易である、私の家は樹木の多い山手の居留地にあつて、市の中心から離れてゐるので、海の方へ逃げれば駄目だが、もしひよつとして、運よく反對の方へ逃げ出したら或ひは早く郊外の廣い所へ出られるかも知れぬ。それも、現に今その方へ走りつゝあるものでなければ遅い。私は彼等の脚の速力と郊外までの距離とを測つた。最短距離、最長距離、最も火災を起し易い途中の建物、崖崩れのありさうな路、「あ、そつちへ行つてはいけない、此方だ此方だ」と、私は心の中で叫んだ。私は又、首尾よく彼等が助かつたとして、再び彼等に遇へるのは幾日後であらうかと思ひ、「早くて一箇月の後」でなければなるまいと算定した。なせなら私は災害の程度を非常に大きく考へ

て、東京横濱は殆んど灰燼に歸してしまひ、二つの大都會の人口の過半は失はれて、あらゆる社會機構、交通も秩序も滅茶々々になつてしまふであらうと考へたのである。後になつてみると此の想像は少し大袈裟過ぎたけれども、私には今の地震が、古來六七十年目毎に關東を襲ふ週期的大地震の一つであつて、それが内々恐れられてゐた通り、ちやうど廻つて來たものであると思へた。さうだとすれば、今の東京の人家と人口の稠密さは、安政度の江戸の比ではない。建物も洋風の建築が殖えて、而もそれらが外觀は立派だけれども、古いものは地震に何よりも脆いと云はれる煉瓦造り、新しいものは木ずりの上へ壁を塗つた、博覽會の建物のやうな、火事には恰好な燃料である張りぼてが多い。その上に昔はなかつた瓦斯だの電氣だの石油だのその他いろ／＼の爆發物があり、それらを大量に使用し又は貯藏する工場や倉庫がある。とすると、人命の損失と、家屋の倒壊焼亡の數は想像に絶するものがあらう。安政の災害は本所深川が最も激しく、他はそれ程でなかつたと云ふが、今度は恐らく下町全體がやられるであらう。倒壊を免れた家屋はあつても、火が諸方から起り、且火の廻りが早いとしたら、山の手とても無事ではあるまいし、日本橋、京橋、下谷、淺草、神田邊の住民は、悉く逃げ場を失つて焼け死ぬであらう。東京がさうだとすれば、よし助かつたとしても家族共は何處へ頼つて行くか。妻と、娘と、妻の老母と、兄弟たちが、逃げる間に散り散りにならないものでもないし、彼等が互ひにめぐり會つて一個所へ集まるのは果たして幾日先のことか。私は自分の親戚を見渡して、たつた

一軒、上州の前橋にゐる妻の兄だけが息災であらうと考へられたので、そこから焼け野原の東京や横濱へ人を出してくれ、雲を掴むやうな搜索をすることになるのではないかと思つたりしたが、一箇月後と云ふ算定はさう云ふ想像に基いたのであつた。

私が遭難した場所は小涌谷の半里程手前であつて、そこから小涌谷へ歩いて行く途々、私の腦裡には以上のやうな憂慮とも妄想ともつかぬものが、しきりなしに去來したのである。しかし私は、さういふ悲しいことばかりを思ひ詰めてゐた譯ではない。時間にしたら三十分か一時間ほどの間だけれども、その間には妻子共の傷ましい姿に交つて、それとは全く違つた種類の幻影が、とき／＼眼の前を掠めたのであつた。斷つておくが、大正十二年と云ふと私は三十八歳である。そして横濱に住んでゐたと云ふのは、大正活映のプロダクションに關係してゐたためでもあるが、實は東京と云ふ所が嫌ひになつてゐたからでもあつた。私はファイルムの仕事に携はる前、大正六年頃から始終伊香保や鶴沼へ轉地して、東京の家に居着かなくなつたのであるが、大正八年の十二月に本郷曙町の家を疊んで小田原の十字町へ移り、十年に横濱へ越して來たのである。だが、いかに東京最良の人でも、あの時分、世界大戰當時から直後に及ぶ好景氣時代の帝都を、立派な「大都會」だと思つた者はないであらう。その頃の新聞紙は筆を揃へて「我が東京市」の交通の亂脈と道路の

不完全とを攻撃したものであつた。たしかアドヴァタイザー紙であつたか、社説で東京市の不體裁を散々にコキおろして、日本の政治家は社會政策だの勞働問題だのと大きなことばかり云つてゐるが、政治と云ふのはそんなものではない、先づ此の首府の泥濘を始末して、雨が降つても無事に自動車を通せる道路を作ることだと云つてゐたのは、しみじみと同感したゞけに今も覺えてゐるのである。「東京は都會ではない、大きな村だ、或ひは村の集合だ」と云ふ惡罵は、日本人も外人も口にした。當時二重橋外の廣場は夜更けてから自動車の往來が頻繁なために道路の破損することが最も甚しく、乗客は凄じい動搖を感じたので、彼處は玄海灘だと云はれた。私は淺草橋から雷門へ行く間で、クツシヨンから激しく跳ね上げられ、箱の天井でいやと云ふ程鼻柱を打つた覺えが二度ばかりある。氣がついてみると、自動車の箱の天井は柔かい布が張つてあるが、ちやうど眞ん中あたりのところに固い棒が這入つてゐて、跳ね上げられると、そいつが鼻へ打つかるやうな位置にある。こいつは危険だ、たび／＼こんな目に遭ふと今に鼻血を出すやうなことになると思つたが、鼻血どころではない、とう／＼そのために死んだ人があると云ふ噂さへ聞いた。それなら電車はどうかと云ふのに、これが又死に物狂ひであつた。今から考へると、かう云ふ亂脈にも一面無理のない事情があるので、何しろ財界の活況につれて諸種の事業が俄かに勃興し、地方の人間が皆都會へ集まつて来る。東京市は此の慌しい人口の増加と郊外地帯の膨脹に對して、急に應ずる暇がない。道路を舗裝するとか、アパートを建てるとか、そんな

施設をする間もなく、どん／＼自動車が輸入され、場末の方には木ツ葉のやうな安普請の借家が殖える。そのくせ高い家賃を出しても、中々家が見つからない。庶民階級の交通機關は路面電車だけしかないので、来る電車も来る電車も満員で、長い間停留場に立ちん坊をさせられる。ラッシュアワーには全く殺人的な騒ぎで、夕方、腹を減らしてイライ／＼しながら、歸路を急ぐ會社員や勞働者などが、車掌の制するのも聽かばこそ、もう鈴なりになつてゐる車臺へ我れ勝ちに割り込まうとする。その争ひのために尙混雜して、中の者は出ることが出来ず、外の者は乗ることが出来ない。そして乗り損なつた者は蒼白な顔で恨めしさうに電車の影を見送つてゐる。さう云ふ人々の物凄しい眼を見ると、私はしば／＼慄然とした。いつも乗れるのは一人か二人で、大部分は置いてき堀を食ふのであるから、市電に對する怨嗟の聲は巷に充ち充ちてゐた。留まつた電車の昇降口に群集が黒山のやうにたかつて、押し合ひ、へし合ひ、罵り合ふ騷擾が、いかに人心を險惡にさせてゐるかは、誰しも私かに憂へたところで、それを放置してゐる爲政者の氣が知れなかつた。彼等の狼のやうに尖つた、怒りに燃えた顔つきを見ては、怨嗟の聲がいつ何時もつと上層の階級へ向けられるかも知れない、日本人だから辛抱してゐるが、歐米の都會で市民を斯かる状態に置いたら一日で暴動が爆發すると説く人もあつた。その外電話なども電車と同じやうな有様で、これが又店員や事務員の神經を苛立たせた。亞米利加あたりでは電話會社へ申し込むと五分も経てば取り附けに來ると云ふのに、日本では埒が開かないから高い金を出して

電話屋から買ふのだが、それも好景氣で途方もない値を呼んでゐる。そしてやう／＼取り附けた迄はいゝが、電話の數に比例して交換手の手が足りないのか、交換局を呼び出すさへが容易でない。出ても直ぐに引つ込んだり、番號を聞き違へたり、混線などが始終である。やつと繋いでくれたかと思ふと、話中をボン／＼切られる。腹が立つて又交換手を呼び出すと今度はあべこべに「お話中」を食はされる。毎日電話口で交換手と喧嘩したり、ベルをガリ／＼と焼け糞に鳴らしたりすることが珍しくない。怒鳴られる交換手の役も大抵ではないであらうが、急用を控へた店員たちのイキリ立つのも尤もで、私が未だに電話嫌ひであるのも、電話は人を神経衰弱にさせるものと云ふあの時以來の觀念が抜けないからである。市内でもそんなであるから、横濱から東京を呼び出すのは半日もかゝり、往つて復つて來た方が早いから、いや、ほんたうに早かつたのであつた。それから瓦斯もいけなかつた。私の本郷の家では、壓力が足りなかつたり、空氣が交つて消えてしまつたりして、臺所の者がぶつ／＼云つた。今日でこそ日本の雜貨は世界を席捲してゐるが、あの時分は我が國の工業が先進國の幼稚な模倣ばかりをしてゐる試練時代にあつたのであらう、凡そ國産品と名のつくものに碌なものはないやうな氣がした。私はたび／＼マツチで腹を立てたことがあつた。と云ふのは、大概なマツチは擦るとシユツと燃えたり、棒の先で消えてしまふ。一本の煙草に火をつけるのに四本も五本も擦らなければならぬ。懐中電燈などもさうであつた。電池と電球との接觸が不親切に出來てゐるので、買ふともう

その歸り路でスキッチが利かなくなる。當時日本の活動寫眞では尾上松之助が大持てゝあつたが、あれが我が國の文化の程度を象徴してゐたと云つていゝ。舊き日本が捨てられて、まだ新しき日本が來たらず、その執方よりも悪いケーオスの状態にある、さうしてそれが、亂脈を極めた東京市のあらゆる方面に歴然と現はれてゐたのであつた。

さう云ふ感を催したのは私ばかりではなかつたであらう。全く、あの松之助の寫眞を見ては、日本人の劇、日本人の顔が悉く醜惡なものに思はれ、あれを面白がつて見物する日本人の頭腦や趣味が疑はれて、日本人でありながら日本と云ふ國がイヤになつた。あの頃の私は、帝國館やオデオン座あたりへ行つて西洋映畫を見るより外に楽しみはなかつたものであるが、松之助の映畫と西洋のそれとの相違は、即ち日本と歐米との相違であると思へなかつた。私は西洋映畫に現はれる完備した都市の有様を見ると、ます／＼東京が嫌ひになり、東洋の邊陲に生を享けた自分の不幸を悲しみもした。もしあの時分に金があり、妻子の束縛がなかつたならば、多分私は西洋へ飛んで行つて、西洋人の生活に同化し、彼等を題材に小説を書いて、一年でも多く向うに留まつてゐたであらう。大正七年に私が支那に遊んだのは此の満たされぬ異國趣味を纔かに慰めるためであつたが、旅行の結果は私を一層東京嫌ひにし、日本嫌ひにした。なせなら、支那には前清時代の倅を傳へ

た、平和な、閑静な都會や田園と、映畫で見る西洋のそれに劣らない上海や天津のやうな近代都市と、新舊兩様の文明が肩を並べて存在してゐた。過渡期の日本はその一つを失つて、他の一つを得ようともがいてゐる時代であつたが、自分の國の中に租借地と云ふ「外國」を有する支那に於いては、此の二つが相犯すことなく兩立してゐた。私は北京や南京の古い物寂びた町々を見、江蘇、浙江、江西あたりの、秋とは云ひながら春のやうに麗らかな、のんびりした田舎を歩いて、多分に浪漫的空想を刺戟され、地上に斯くの如きお伽噺の國もあつたのかと云ふ感を抱いたが、天津や上海の整然たる街衢、清潔なペーヴメント、美しい洋館の家並みを眼にしては、歐羅巴の地を踏んでゐるやうな嬉しさを味はつた。就中上海は當時の東京や大阪よりもいろ／＼の施設が遙かに進んでゐて、もうその頃から四つ辻には交通巡査が立つてゐたし、近頃やう／＼京都に出來た無軌道電車なども走つてゐたし、新たに擴張されつゝ、あつた郊外の方には、コンクリートの自動車道に並んで、馬の蹄を損ねないやうに柔かい土を盛つた馬車道までが作られてゐた。で、旅行から歸つて來た私は、日本を厭はしく思ふと共に、熱心な支那好きになり、更に熱心な西洋好きになつた。従つて、私の取り扱ふ題材は西洋を慕ふ心持ちのものが多く、私の生活様式は、衣も、食も、住も、ひたすら西洋人の眞似をして、及ばざらんことを恐れるやうになつて行つたが、さう云ふ私に東京が面白い筈はない。その頃の東京には洋館の借家などはめつたになかつたし、たまにあつても貴族や高官の住むやうな大きな屋敷ばかりである。

よんどころなく貧弱な西洋家具を買つて來て、日本間に飾つてみる。衣服は裁縫の上手な洋服屋を捜して、これも西洋の映畫で仕込まれた智識に依つてモーニングからタキシードまで一通り揃へ、ネクタイの蒐集までして、先づ外見はハイカラな紳士が出來上るが、その恰好で何處へ押し出すと云ふアテもない。帝劇にバンドマンのオペラがかゝつたり、精養軒ホテルで結婚の披露があつたりする時の外は、タキシードを着る機會もなく、折角の服も持ち腐れになる始末であつたが、それでもモーニングや背廣を着込んで、ステッキを振り振り銀座や淺草をそゞろ歩く。さう云ふ時の私の腦裡には、カジノやキャバレやダンスホールなどが浮かぶのであるが、そんなものが此の都會にはないのだと思ふと、「あゝ、東京は詰らないなあ」と、常にも増して感ずるのである。私は上海のカルトンカフェーで夜會服を着た白人の男女が幾組も踊つてゐる花やかな光景を見て來たが、私が行つた時、そのカフェーに日本人のマネージャーがゐて、「將來これを東京へ持つて行かうと思ふんですかね」と、語つたことがあつた。しかし私は、その計畫には大賛成だけれども、此の日本人は日本と云ふ國の事情を知らない、かう云ふものを東京へ持つて行つて警察が許す筈がないと思つたので、「それはとても駄目でせうね」と答へておいたが、さう云ふ日本の國情を考へると、いよ／＼淋しくなるのであつた。私は既に藝者と云ふものに反感をさへ持つてゐたので、どんなに異性の友達に憧れても、茶屋や待合には足が向かない。私の求めるものは、生き生きした眼と、快活な表情と、明朗な音聲と、健康で均齊の取れた體格と、

さうして何よりも、眞つ直ぐな長い脚と、ハイヒールの沓がびつちりと笹まる爪先の尖つた可愛い足と、要するに、外國のスタアの肉體と服装とを備へたやうな婦人であつた。私はそれに似たものを見るためにしばしば、金龍館や日本館や観音劇場のオペラへ行つた。そしてあの頃の原信子や、岡村文子や、まだ十四五の小娘であつた可憐な石井小浪嬢の舞臺姿を眺めて、幾分か渴を癒やしてゐた。事實、大正八九年頃の日本ムスメたちは、女學生さへが海老茶の袴を穿いてゐたので、舞臺の上より外に洋装の女を見ることは稀であつた。私の記憶に誤まりがなければ、鶴見の花月園に横濱の外人を當て込んだダンスホールが許されたのは、たしかに大正十一年頃で、彼處へぼつ／＼西洋婦人に見紛ふやうな服装をした日本の女が来るやうになつたが、それも大概は横濱に住んで西洋人と付き合つてゐる人であつた。その後東京にも新築の帝國ホテルなどに時々ダンスの催しがあり、二三の小さなホールも出來たが、何分世間一般が社交ダンスと云ふものを白眼視してゐた時代なので、到底横濱のやうな譯には行かず、顔觸れも殆んど横濱の連中が押しかけて行くに過ぎなかつた。が、兎に角少しづつでもさう云ふ機運が向いて來たからには、やがて東京の空にも紐育にあるやうな摩天樓が聳え立ち、町を行く女は皆すつきりとした洋装をして、コンクリートの舗道を沓の踵で憂々と歩み、あらゆる西洋の娛樂機關が輸入されて、カルトンカフェーのマネエチャアの夢みたことが實現するやうになるであらう。何事も西洋を模範とする日本である以上、必ずその時代が來ずにはゐない。私はさう思ふと、その想像で胸

が高鳴るのであつたが、翻つて自分の年齢を考へ、現在のだらしない東京市を見ると、此の雜然たる首府の面目が一新するのはいつの日であらうかと云ふ歎聲が湧き、その間に自分の青春の去つてしまふのが口惜しかつた。自分は東京生れだけでも、今の東京には何の未練もない。いつそ大火事でもあつて、あの五味溜を引つくり覆へしたやうな町々が烏有に歸してしまつたらいい。さうしたら遅々として捗らない改良工事が、一舉にして成就するだらう。私は明け暮れそんなことばかり考へてゐた。

○
ラフカディオ・ハーンは、人は悲しみの絶頂にある時に見たり聞いたりしたことを生涯忘れないものだと言つた。だが私は又、人はどんなに悲しい時でもそれと全く反對に嬉しいことや、明るいことや、滑稽なことを考へるものであるやうに感じる。なぜなら私は、かの大震災の折、自分が助かつたと思つた刹那横濱にある妻子の安否を氣遣つたけれども、如殆んど同じ瞬間に「しめた、これで東京がよくなるぞ」と云ふ歡喜が湧いて來るのを、如何ともし難かつたのである。私は前にも云ふやうに、火に包まれて逃げまどふ妻子の身上を案じながら小涌谷まで歩いたのであつたが、しかしその間も、此の「しめた」と云ふ考へが一方に存在してゐて、時々それで頭の中が一杯になり、悲しい想像や心配を忘れさせてしまふ數分間、或ひは數秒間があつた。陰鬱な雲の間から急に日が洩れてあたりを明

るくするやうに、その考へは私の前途に希望を投げ、私を勇躍扑舞させた。私は此の未曾有の瞬間に妻子と相抱いて焼け死ぬことが出来なかつたのを悔い、彼等を置いてひとり箱根に来てゐたことを、責め、怨み、憤つたけれども、「東京がよくなる」ことを考へると、「助かつてよかつた、めつたには死なれぬ」と云ふ一念が直ぐその後から頭を擡げた。妻子のためには火の勢ひが少しでも遅く弱いやうにと祈りながら、一方では又「焼ける焼ける、みんな焼けちまへ」と思つた。あの亂脈な東京。泥濘と、悪道路と、不秩序と、險惡な人情の外何物もない東京。私はそれが今の恐ろしい震動で一とたまりもなく崩壊し、張りぼての洋風建築と附け木のやうな日本家屋の集團が痛快に焼けつゝあるさまを想ふと、サバ／＼して胸がすくのであつた。私の東京に對する反感はそれほど大きなものであつたが、でもその焼け野原に鬱然たる近代都市が勃興するであらうことには、何の疑ひも抱かなかつた。かゝる災厄に馴れてゐる日本人は、このくらゐなことではタバル筈はない。サンフランシスコは十年を経て前より立派な都市になつたと聞いてゐるが、東京も十年後には大丈夫復興する。そして、その時こそはあの海上ビルや丸ビルのやうな巍然たる大建築で全部が埋まつてしまふのである。私は宏莊な大都市の景觀を想像し、それに伴ふ風俗習慣の變革に思ひ及んで、種々な幻影を空に描いた。井然たる街路と、ピカ／＼した新装の舗道と、自動車の洪水と、幾何學的な美觀を以て層々累々とそ／＼立つブロックと、その間を縫ふ高架線、地下線、路面の電車と、一大不夜城の夜の賑はひと、巴里や紐育にある

やうな娛樂機關と。そして、その時こそは東京の市民は純歐米風の生活をするやうになり、男も女も、若い人たちは皆洋服を着るのである。それは必然の勢ひであつて、欲すると否とに拘はらずさうなる。爲政者達が我が國の淳風美俗を口にして西洋流の奢侈逸樂を禁じようとしても、舊式の劇場が亡び、寄席が亡び、花柳界が亡んでしまつた曉には、それを取つて代るものが出現せずにはゐない。さう考へた時、復興後の東京の諸断面が映畫のフラッシュの如く幾つも幾つも眼前を掠めた。夜會服と燕尾服やタキシードとが入り交つてシャンペングラスの數々が海月のやうに浮游する宴會の場面、黒く光る街路に幾筋ものヘッドライトが錯綜する劇場前の夜更けの混雜、羅綾と襦子と脚線美と人工光線の氾濫であるボードヴィルの舞臺、銀座や淺草や丸の内や日比谷公園の灯影に出沒するストリートウォーカーの媚笑、土耳其風呂、マッサージ、美容室等の祕密な悅樂、獵奇的な犯罪。いつたい私は、さうでなくてもいろ／＼突飛な妄想を描いて白日の夢に耽る癖があるので、これらの幻が實に不思議にも、妻や娘の悲しい俤の間に交つて、執拗に纏綿するのであつた。而も私は平坦な路を無意識に歩いてゐたのではない。御承知の通り、彼處は左側が高い崖で右側が深い谷であり、その間を一本の山路がうねつてゐるのだが、路はその夏工事をしたばかりで、柔かい土がところどころ谷へ崩れ落ち、或る部分は木の根岩角に掴まらなければ、ず／＼と足の下が滑つて行つた。路が残つてゐる所でも、あの箱根山の頂邊には大きな焼け石のやうな岩がごろ／＼してゐたのが一度に振り落されたので、それ

らが場所を塞いでゐた。のみならず、いつ揺り返しが来るかも知れない危険もあつた。だから私は歩くと云ふことに可なり注意を集めなければならなかつた。さう云ふ最中に私の空想は家族の運命と未來の東京の花やかな繪巻とを交互に趁つてゐたのである。私の悲しみは大きかつたが、喜びもそれに釣り合つてゐた。東京の面目一新、あらゆる近代的蠱惑の増場の出現、恐らく自分の生きてゐるうちに際會することは出來ないであらうとあきらめてゐたものを、地震が持ち來たしてくれたのだ。四五十年を要する推移が、十年に縮められたのだ。自分の妄想は最早や空中樓閣ではなくなつた。私は、これから生れて來る者の幸福を思ひ、今年七八歳になる少女の十年先を考へては、期待に胸が躍るのであつた。もう彼女たちは疊の上に坐つたり、帯で胴體を締め付けたり、重い平べつたい木の穿き物を引き摺るやうなことはないであらう。そして彼女たちの肉體が健やかな發育を遂げた頃には、家庭に、街頭に、競技場に、海水浴場に、温泉地に、舊時代の日本が夢想だもしたかつた女性美が見られるであらう。それは殆んど人種が違つてしまつたやうな變化であり、姿も、皮膚の色も、眼の色も、西洋人臭いものになり、彼女たちの話す日本語さへが歐洲語のひびきを持つてもあらう。私は自分の歳を考へると、十年と云ふ歳月が待ち遠しかつた。十年たてば自分は四十八歳になる。あゝ、せめてもう十年若かつたら、今の喜びはもつともつと大きいであらうに。それを思へば一年でも早くさう云ふ時が來てくれるといふ、願はくは四十五歳になる迄の間に。そして願はくは新東京の娘たちが自分を相手に

してくれる間に。私は斯く考へつゝ山路を下つて行つたのであつた。

○

小涌谷へ着くと、一と夏を一緒に暮らした顔馴染みの連中がホテルの前の遊園地に避難してゐたが、私は其處で悔恨の情を新たにさせられたのであつた。なせかと云ふのに、そこに居合はせた人々は、日本人も外國人も、大概は家族連れで、私のやうに妻子と離れてゐる者はなかつた。彼等は互ひに、親子、夫婦、兄弟が手を執り合つて危難を逃れたことを喜び、かう云ふ際に一緒にゐることが出來た幸運を、心から感謝してゐる風であつたが、その光景は私に取つて何よりも辛い見物であつた。奥さんやお嬢さんはどうなさいましたでせうねえ」と案じてくれる彼等の言葉の半面には、私の不幸に引き換へて自分たちはいいことをしたと思ふ様子が見え、なせ此の人は妻子を置いて來たんだらうと非難するかの如くであつた。たゞ、今となつて私の願ふところは、震災の範圍と程度が少しでも小さく、横濱や東京が無事であつてくれ、ばいと云ふ一事であつたが、ホテルのマネエチャ一のH君は、別な理由から出來るだけ災害の地域の大きいことを望んでゐた。尤もこれはH君ばかりではない。地元の人々は皆さう望んだと云ふのは、從來箱根はしばしば火性の地震があり、それが大袈裟に傳はつたために客足が減じる傾向があつたので、もし斯くの如き大地震が箱根だけのものであつたら、此の土地の再起は覺束ないと云ふ憂ひを持つて

ゐたのである。そしてH君を始め土地の人々は、箱根の爲めには不幸だけれども東京や横濱までがこんな地震に見舞はれたとは信じられない、どうしても此れは箱根だけの局部地震であらうと云つて、甚しく悲觀するに反し、私は又、彼等の悲觀が當つてくれればい、けれども、去年の暮れと、今年の春と、二回までも横濱に稀な強震のあつたことを考へ、かね／＼聞いてゐた専門家の豫想を思ひ合せて、必ず關東一圓の大震であらうと斷定せずにはゐられなかつた。やがて、午後一時頃に宮の下が火災を起したらしく黄色い煙が天に冲するのが見え、夕刻、小田原の町の方角がぼうつと赤く染まつてゐるのを遙かな山の麓の空に望んだ時には、私はいよ／＼自分の斷定が的中したと云ふ念を強めた。夜に入つてから人々は遊園地の芝生にテントを張つたが、眠られないまゝに再び地震の範圍について議論し合つた。土地の人は矢張り箱根地震説を唱へて、世界的に有名な此の温泉地ももう駄目になるのではないかと云ふ悲觀論を繰り返す。それに對して、私は有るだけの地震學の智識を傾けて、そんなことは無用な心配だ、さつきの地震はそんな局部的なものでは有り得ない、箱根の災害などは大都會のそれに比べればでんで問題ではないであらう、既に諸君は宮の下が焼けたのを見、小田原が焼けたのを見たではないか、此の遊園地からは小田原より先は見えないけれども、大磯も、平塚も、鎌倉も、そして、私には最も苦痛な想像であるが、私の妻子の住んでゐる横濱も、現に斯く語つてゐる此の時刻に、盛んに燃えつゝあるであらう、横濱にして然りとすれば、東京も安全な筈はない、いや恐らくは、東

京こそ此の地震の中心であつて、あれから房總半島へかけての災害が一番激甚であらうと云つた。だが人々は私の所説があまり彼等の推定とかけ離れてゐるので、容易に首肯する者はなかつた。誰も彼も東京や横濱がさう云ふ慘狀を呈してゐようとは信じなかつたし、又信じたくないたのであつた。私は彼等に、私の言を疑ふならば誰か此の後ろの山の頂邊へ登つて東の方を望んでみ給へ、必ず東京や横濱の燃えてゐるのが見えるであらう、普通の火事なら見えないかも知れないが、何十萬何百萬と云ふ人口を持つ大市街が燃えてゐるのである、東京灣の津々浦々が炎を揚げてゐるのである、さうだとすれば、天を焦がす偉きな火光が見えない筈はないと云つたが、進んで登つてみようかと云ふ醉興者もゐなかつた。彼等は不安な微笑を浮べて眼を見合はせるばかりであつた。私は一人も自分の説を信じてくれないのが不平であつたし、よく考へれば、それは妻子の悲慘な最期を祈るやうなものでもあつたし、變に矛盾した心持ちでテントの蔭に身を横たへたが、夜が更けるにつれて私の腦裡には傷ましい幻影ばかりが浮んだ。私は再び、夫を呼び父を呼ぶ細々とした聲を聞いて、ひとり枕を濡らしたが、さうするうちに静かな雨が降り出したので、そのさめ／＼とした雫の音が間もなく新たな哀愁を誘つた。もし此の雨が横濱にも降つてゐるとすれば、火の勢ひを幾らかでも殺いでくれるであらう、とすると可憐な者共は焼死を免れたであらうか、それとも此の雨は、何處かの路端にころがつてゐる妻や娘の亡き骸の上に、無残に降りそ／＼いであるであらうか。私は毛布にくるまりながらさう云ふ悲しい夢を抱いて一と

夜を悶え通したのであつた。

○

さて、それから十有一年の歳月が過ぎた。待ち遠に思つた震災後の十年は、去年（昭和八年）の九月一日を以て完了し、私は最早や四十九歳に達してゐる。だが、現在の私、さうして現在の東京は如何。此の世は一寸先が闇で、何事も豫期の通りには行かないと云ふが、私は嘗て小涌谷の山路を辿りながらさまよつた妄想に耽つた當時を追懐して、今日のやうな皮肉な結果を見たことを喜んでいゝか悲しんでいゝか、不思議な氣持ちがするのである。先づ何よりも、私があの時想像した震災の範圍、東京が蒙つた慘禍の程度、並びにその復興の速度と様式とは、半ばは的中し、半ばは的中しなかつたと云へる。私はあの時箱根の人々の短見を嗤つたのであつたが、私の推定も大袈裟過ぎてゐた。關東一圓の地震と云ふ觀測に誤まりはなかつたけれども、被害は東京府下よりも神奈川縣下の方がひどく、就中小田原鎌倉片瀬近傍が第一であつて、東京は横濱に比べると、犠牲が思ひの外少い。横濱にゐた私の一家眷屬でさへ一人残らず助かつたのであるから、東京で死んだ人はよく／＼運が悪いのである。被服廠や吉原の死傷は大變な數であるけれども、私は實はあの何倍かの慘事を考へ、全東京市が被服廠のやうになるであらうと豫想してゐた。然るに東京に於いては大概な家屋が倒壊を免れ、火が比較的長い時間にのろ／＼と燃え擴がつ

たために、下町の住民も大部分は無事に逃げ延び、山の手の市街は殆んど舊態を保つことが出来た。従つて東京市の復興は、十年の間に見事成し遂げられたとは云へ、私が思つたやうな根本的な變革とまでは行かなかつた。私は當時の後藤（新平）内相が三十億の資金を以て一旦焼け野原を政府に買ひ上げ、規矩整然たる新市街を建設すると云ふ大規模な案を聞いた時、心私かに快哉を叫んだ一人であつたが、その後内相の案は實行されずじまつたので、舊東京の不規則な街路の俤はなほ充分に跡を絶つたとは云ひにくい。成る程、隅田川を始め諸所の河川には輕快な弧線を描いた大小無數の橋梁が懸つた。丸の内から、銀座、京橋、日本橋に至る界限は、文字通り面目を一新した。されば私は、汽車で品川から新橋を過ぎ、中央ステーションへ這入る時、沿道の景觀を俯瞰して、これが幼年の頃しばしば半日を遊び暮らした淋しい草原のあつた所かと、常に訝しむ驚くのである。外國から歸つて來た人々は、今の東京の立派さは、おさ／＼歐米の一流の都市に劣らないと云ふ。いかにも、若き日の私が西洋のフィルムを見て夢想した市街も、これほど壯麗なものではなかつた。いや／＼、大正十二年の九月一日、あの山路を歩いてゐた私に妻子の不幸をさへ忘れさせた白日の幻も、此の眼前の輪換の美には及ぶべくもない。が、さう云ふ外觀上の變化は、市民の嗜好や、風俗や、習慣や、言語や、動作に、どれほどの影響を齎したと云ふのか。正直のところ、これも私の想像があまり先走りし過ぎてゐたので、彼等は私があの時豫測したやうには歐米化してゐないのである。近頃ステッキガールと云ふやうなも

のが巷に現はれ、カフェーやバアの繁昌は花柳界を壓倒し、映畫やレヴュウの流行は歌舞伎の客を奪ひつゝあるとは云ふものゝ、キャバレやカジノは愚かなこと、上海のカルトンカフェーに匹敵するものさへ猶存在を許されてはゐず、ダンスホールは昔のやうに兎角の非難を招いてゐる。そして銀座通りを歩けば、堂々たる大ビルディングの間に伍して大阪式の甘いもの屋が行人の食欲をそゝり、市民は今も灘の生一本に酔ひを求め、鮫の立ち喰ひや小皿物に舌鼓を打ち、支那料理や西洋料理が歓迎される一方に、日本料理の盛んなことも往時を凌ぐものがあつて、未だに彼等の殆んど全部が米の飯を常食とし、刺身や豆腐や澤庵や味噌汁を食つてゐるのである。女子の洋装が殖えたとは云ふものゝ、女學生や女車掌の制服と女中たちのアツパツバを除いたら、洋服らしい洋服を着た夫人や令嬢たちの數は、果たして何割あるであらうか。夏は幾らか多いけれども、冬の街頭や百貨店內を見渡したら、十人に一人もゐないかも知れない。オフイスガールまでが、半數は和服を着てゐると見ていゝ。まことに東京の近代化、もしくは西洋化は、女子の服装と一般の食味に於いて最も遅れてゐるやうに思へる。

蓋し東京の市民生活の西洋化が、震災と云ふ絶好の機會を得たにも拘はらず、十年前に私が期待したやうな過激な進展を示すことがなく、今もなほ遅々たる歩みをつゞけてゐるの

には、いろ／＼の理由があるのであらう。たとへば災害の範圍が大體下町に限られて山の手の方がなまじ其の儘に残つたために、新東京の建設にも多少の手心が加はつたであらうし、引いてはそれが市民に二重生活を餘儀なくせしめてもゐるのであらう。が、實はさう云ふ物質的な事情よりも、より深い所に重大な原因があるのかも知れない。よし東京市が寸土を餘さず焼けてしまひ、完全に新たな市街がその跡に打ち建てられたとしても、苟くも二千數百年の傳統を持つ國民の氣質や習慣は、なか／＼そのくらゐな外的條件では亡びないのかも知れない。私はさつき、東京の市民は未だに米の飯を食つてゐると書いたが、これは「未だに」ではなく、ひよつとすると「永久に」なのであらう。今日米價の調節が政治上の樞要な問題として扱はれてゐるのを見ても、東京市民、従つて日本國民が、パンを常食とするやうな時代が近い將來に實現されようとは思ひも及ばない。十年前の私がさう云ふ無茶な豫想をしたのは何とも滑稽千萬であるが、しかし若い時分には誰しも「西洋」に魅惑されて、斯かる改革が容易に行はれ得るやうに考へるのである。昔、ほんたうかどうか分らないが、文部大臣の森有禮氏は日本語や日本文字を廢して國民に英語をしやべらせ、英文字を學ばせようと云ふ案を立てたが、却つて外人の識者にそのこと行はれ難い所以を教へられて、悟るところがあつたと云ふ。當時の森文相は何歳であつたか知らぬが、あゝ云ふ有爲な政治家にして尙且そんな謬想を抱くのだとすると、日本の青年が一度は私と同じやうな夢を描くのも尤もである。つい四五年前、左傾思想が横行した頃には日

本の國家や社會組織の變動が數年内に起らなければならぬものゝやうに考へ、それを必至の勢ひであると思ひ込んで居た青年が、いかに多かつたことであらうか。私は元來政治の方には關心を持つてゐないので、衣食住の様式、女性美の標準、娛樂機關の發達等のことばかりしか考へてゐなかつたのであるが、それにしても現在の東京を見て如何の感があるかと云ふのに、十年前の私としては幻滅の苦杯を喫した譯であるが、豈圖らんや、東京以上で自分自身が變化したのを發見してそゞろに浩歎するのである。永井先生の「つゆのあとさき」にある松崎と云ふ法學博士は尾張町の四つ辻にゐんで銀座街頭の夜景を眺めながら、

松崎は法學博士の學位を持ち、もと木挽町邊に在つた某省の高等官吏であつたが、……麴町の屋敷から抱車で通勤した其の當時、毎日目にした銀座通りと、震災後も日々に變つて行く今日の光景とを比較すると、唯夢のやうだと云ふより外はない。夢のやうだといふのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思ふやうな深刻な心持をいふのではない。寄席の見物人が手品師の技術を見るのと同じやうな軽い讚稱の意を寓するに過ぎない。西洋文明を模倣した都市の光景もこゝに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。

と云ふやうな感慨を洩らし、又その先の方で、

君江は同じ賣笑婦でも従來の藝娼妓とは全く性質を異にしたもので、西洋の都會に蔓延

してゐる私娼と同型のものである。あゝ云ふ女が東京の市街に現れて來たのも、之を要するに時代の空氣からだと思へば時勢の變遷ほど驚くべきものはない。

と云つてゐて、此の一節があ物の物語中で最も強く私の心を打つのであるが、私は「驚異の極」である西洋文明の模倣を目撃して、格別の喜びを感じるのでもなければ、その模倣の度が足りないことを不満に思つてゐるのでもない。ありていに云ふと、まあ此の程度に止まつてよかつたと云ふやうな、期待が裏切られたことに却つて幾らかの慰めを感じ、斯く感ずる現在の自分を省みて、松崎博士と同じやうな悲哀にとざされるのである。まことに世間のことは何一つとして意の如くにならないものだが、分けても自分自身のことほど測り難いものはない。十年後の東京を見透し得たと信じた私は、その見透しに於いて誤まつてゐたのみならず、明日の我が身がどう變るかも知れないことを、勘定に入れなかつたのである。今日、こんな風に變り果てた帝都の有様を見て、喜んでいゝか悲しんでいゝか迷つてゐる私。東京が西洋化した頃には、いつか自分が西洋嫌ひになつてゐる私。そして未來の東京に望みを抱くよりは、幼年時代の東京をなつかしむ私。あゝ、人間萬事塞翁が馬とは斯くの如きことを云ふのであらうか。

尤もあの當時、私は十年後を考へて既に早く遲暮の感を催したことは事實だけれども、そ

れは自分の肉體の衰へを憂へたのであつて、心境までがかう云ふ風に變るであらうとは思つてゐなかつたのである。だが、斯く心境の變つたことも、やはり肉體の衰へが齎した結果で、他に原因はないのであらうか。自分自身のことを語る資格のない私は、それについても自分では判断の下しやうがない。たゞ震災後、ほんの一時の避難のつもりで關西へ逃げて來たことが、私を今日あらしめた第一歩であつたやうに思はれる。では何故に關西へ走つたかと云ふのに、私は大正十年の春、大正活映の「蛇性の姪」のロケーションで久方ぶりに京都や大和地方を訪れてから、上方が好きになつてゐたのであつた。これは西洋かぶれのしてゐた當時としては一寸矛盾のやうだけれども、自分は外人が廣重の繪を珍重するやうな意味で、舊き日本をエキゾテイズムとして愛するのだと、さうまあ自分では解釋してゐた。それと云ふのが、その頃の私は山手の外人街に住み、アマの部屋以外には疊の部屋が一つもない家屋に起居して、西洋料理のゴックを置き、朝夕靴を脱いだことのない生活をしてゐたので、外人の遊覽客と同じやうな氣分を以て奈良や京都に遊ぶことが出來た。私にはそれが愉快であつた。のみならず、私は明治の末年以來長らく關西の土を踏んだことがなかつたが、十年振りで行つてみると、北京や南京や江蘇浙江あたりにある古い東洋のよいところが、日本の舊都附近にも残つてゐることを知つたのである。私はそれらの土地や風俗に同化したいとは思はなかつたが、それらを一幅の繪として眺める時、少くとも亂雑な東京より遙かに魅力のあるものとして愛着を持つた。で、まあ最初は、新しき

東京が出來上るのを待つ間、腰かけのつもりで阪神の沿線に居を構へ、古風な京都とハイカラな神戸とに生活の變化を求めながら暮らして行かうとしたのであつたが、あの當座は私以外にも随分多くの罹災民が流れ込んで來たものであつた。私の最も親しい人では第一に小山内君がゐた。氏は大阪の谷町にあつたプラトンの社の顧問をしてをられたので、地震の少し前から六甲苦樂園に別莊を借りてをられたが、地震を機會に東京を引き拂つて大阪の天王寺に移られ、今の直木君や川口松太郎君と共に「女性」の編輯に従事してをられた。映畫關係ではキネマ旬報社が、今では西の宮の市内に這入つたが、當時はまだ淋しかつた夙川の土手の松並木の下にあつたので、田中三郎、田村幸彦、鈴木俊夫の諸君がそこを梁山伯にしてをられ、古川綠波君などもとき／＼東京から賑やかに來られた。その外、横濱で顔馴染の外人は殆んど全部神戸へ移つて來たと云つてもよく、ダンス友達の方へわざ／＼踊りにやつて來る者も少くなかつた。さう云へばあの頃の阪神間に於ける罹災民氣分も、今となつてはなつかしい思ひ出の一つである。花月園やグランドホテルの恰好な踊り場を失つた我等は、たゞもう踊りたいためにでも神戸の近所に住まふことを欲し、震災の年のクリスマスやニューイヤースイヴには早くもファンシーボールの興を盡したのである。焼け出された我等は、日本人も西洋人も、見知らぬ土地で最初の新年を迎ふべく相擁して踊りながら、ありし日の横濱の繁榮を語り、再び復るすべもないあの港での楽しい生活に懷舊の情を寄せたのであつた。あのリッチ事件で問題を起したF嬢なども

二一八
當時は神戸に見えてゐたが、あゝ云ふ顔觸れが如何に震災前の横濱の記憶を我等に強く呼び起した事か。いつたいあの頃、關西では神戸のホテルに折々催しがあるだけで、大阪のカレーヂや、カフェーユニオンや、京都京極のカフェーローヤルなどは至つて殺風景なものだつたので、我等罹災民は寄ると觸ると横濱の昔を戀ひしが、花月園やグラランドやオリエンタルの豪華を偲んだものであつた。が、さう云ふ罹災民時代もほんの二三年だつたであらうか。震災地の焼け跡にぼつ／＼バラックが建つやうになると、我等の仲間は一入減り二人減りして次第に關東へ引き揚げてしまつた。小山内君などは眞つ先に歸つて、土方與志君と築地小劇場を起した。横濱から來た外人でさへが、神戸の外人とはどうも反りが合はぬと云つて戻つて行つた。それなのに私だけは、とう／＼此方に居着いてしまつたのである。それはその後もしも引き續いて頻々と起る關東の地震が、地震嫌ひの私を一層臆病にしたせゐるでもあり、時々様子を見に行つても復興の事業の捗らないのに業を煮やしたからでもあり、それよりも何よりも、關西の地そのものが、と云ふのは、神戸ではなく、大阪や京都や奈良の古い日本が、知らぬ間に私を征服してしまつた故であるが、さう云ふ私の内部に於ける變遷を語るのは此の稿の目的以外であるから、一應の順序としてこれだけを述べるに止めよう。兎に角私は、大正十五年の正月、二度目の上海見物から歸つて來て以後二三年の間に、だん／＼洋風生活に「おさらば」を告げるやうになつたのである。

○
さう云ふ次第で、私は現在では自分を東京人であるとは思つてゐない。中年に及んで移住したので、全く關西に同化しきれようとは信じられないが、でも出来るだけ同化したいと願つてゐることは事實であつて、東京には何の未練もない。考へてみると、過ぎ來し四十九年のうち、東京に住んでゐたのが約三十五年、湘南地方や横濱に轉々と居を移したのが約三四年、それから地震で阪神の蘆屋に逃げて來てからが十一年、とすると、今のところでは東京在住の期間が一番長かつた譯だけれども、關西生活の十一年も私の過去の生涯に於いて最早や相當の分量を占めてゐる。且や自分の熟知してゐた東京の下町は悉く灰燼に歸してしまひ、町の條理さへも變つてしまつた今日となつては、そこが自分の生れた土地であつたと云ふ以外に、何の因縁も感じられない。自分が七歳から十二三歳の頃まで暮らした南茅場町の家跡などは、千代田橋から永代へ通ふ大道の眞ん中になつてゐると云ふ有様、親戚故舊など多くは散り散りに、そして大概は微祿して場末の方へ引つ込んでしまつたり、朝鮮の果てへまで流れて行つたりする始末で、もう東京の日本橋區と云ふ所は自分の故郷ではなくなつてゐる。それでも私は、此方へ來てから二三年の間は折々上京する毎に「歸つて來た」と云ふ氣がしたけれども、いつからともなくその關係が逆になつて、一週間も東京にゐると早々に上方へ「歸り」たくなり、汽車で逢阪山のトンネルを越

え、山崎あたりを通り過ぎるとホツと息をつくのである。そんな譯だから、私は復興後の東京に對しては一個のエトランゼであつて、何事も語る資格はない。たとへば自動車に乗つて街を走るとして、ふと窓外に眼を轉じた時、大阪や京都なら「今どの邊を走つてゐる」と云ふ感覺があるけれども、近來の東京では見當のつかない場合が多い。昔なら乗物の中で急にぱつと眼を開いても、此處は赤坂らしいとか神田らしいとか、一見して直覺出來たものだが、今では東京の町の匂ひが分らなくなり、時に依つては方角さへも見失ふ。現に去年の秋、辰野隆君と夕方の五時に星ヶ岡茶寮で遇ふ約束をして、四時半まで上野の院展を見物し、山下からタクシーを走らせたのはいゝが、その運轉手が星ヶ岡を知らない。麴町の山王様と云つても日枝神社と云つても矢張り知らない。私はそれは知つてゐるが、そこへ行くまでの近道が分らない。そんなことで大分遅刻をしてしまつたが、土地に對するさう云ふ感覺を失つたことは、自分が最早やその土地での只の旅人に過ぎないと云ふ何よりの證據である。いつたい道を覺えるのには、徒歩か、電車ででも往復しなければ中々呑み込めないものなのに、たまに出て來ては三四日自動車を乗り廻して直ぐ又歸つてしまふのであるから、物覚えが悪くなつてゐる老年の私には、もう永久に東京の町筋を覚え込む機會はないであらう。而も私は、さう云ふたまの上京に際しても古い友達を訪ねることなどは殆んどない。打ち明けて云ふと、懇意な雑誌社との取引上の用務か、據ん所ない關係の祝儀不祝儀に出席するため、毎年二三回は出て來るけれども、用が濟めばいつも

コソ／＼と、何處へも顔を出さないやうにして逃げるやうに引き揚げる。自分の上京中のことが新聞の消息欄に出て、方々から電話がかゝつて來ても、大概體よく斷つてしまひ、出發の時間なども祕し隠しにして、誰にも見付からずに下りの夜汽車に乗り込んでから、まあよかつたと始めて安心するのである。

然らば震災後の東京の何處がそんなに厭なのかと云はれると、實は自分でもその心持ちをはずき探り當てるのに一寸困難を覺えるのである。それは自分が西洋厭ひになつたがために、今の歐米化した街衢が氣に入らないと云ふのでもない。兎にも角にも復興後の帝都の壯麗さには私と雖も時に讚嘆の情を禁じ得ないものがあるが、さう云ふ新しい方面よりも、寧ろその新しいものゝ中に殘存してゐる舊い東京の佛、たとへば市民の顔つきだとか、話振りだとか、物腰恰好だとか、食ひ物だとか、着物だとか、一と口に云へば、東京人の趣味とか氣風とか云ふものが、どうも昨今の私には溜らなく鼻につくのである。多分東京に住んでゐる中流階級以上の男女は日本人中で自分達が一番氣の利いた人種のやうに己惚れてゐることであらうが、正直のところ、どうも私にはあゝ云ふ連中が何となく薄ッぺらで、氣障で、纖弱で、何處かに淋しい影が纏はつてゐるやうに思はれてならない。尤も斯くいふ私自身も、生れは争はれないものであるから、關西人の眼から見たら定めし御

他聞に洩れないであらう。それで東京に住んでゐた頃は、他人のことにも自分のことにも一向氣が付かなかつたのであるが、此方へ來てから遙かに東京の生活を想ひ、又はときどき上京してみると、それが切實に分るやうな氣がする。私はさう云ふ東京人の臭味を一概に嫌ふと云ふのではない。何と云つても自分の兩親や伯父伯母や竹馬の友の間などに共通した特長であるから、そこには云ふに云はれない懐しみもあるのだけれども、それだけに又それがたまらなく不愉快でもある。思ふにこれは東京人にも大阪人にも容易に理解されない氣持ち、私のやうに生れ故郷の東京を見捨て、而も尙東京と縁を切ることが出來ずにある者のみが知る感情であらうが、私はこれを如何に説明してよいか表現の言葉に迷ふのである。が、まあ例を擧げて云ふと、數年前、或る時辻潤がぶらりと岡本へやつて來て、鰯の雀焼を土産にくれたことがある。辻はその時、「君、これは千住の鰯の雀焼だぜ、此方にあるとめつたに食へやしないだらう」と、さう云ひながらその雀焼の小さな折を私の前に出したのであつた。いつでも何の前觸れもなしに飛び込んで來る風來坊の辻潤が土産を提げて來たのさへ珍しいのに、あのなつかしい千住名物の雀焼と聞いては、私も何がなしに少年時代が想ひ出されて、「あゝ、それは有り難いね」と心の底から喜んで云つた。關西の人は雀焼と云つたつて恐らく知らないに違ひない。鰯の身を開いて、甘辛い下地したぢをつけて焼いて串に刺した、佃煮のやうに眞つ黒な色をしたもので、その恰好がふくら雀のやうな圓い形をしてゐるところから雀焼とでも云ふのであらうか、さう特別においしい物でも何でもないので、でもそれを名物にしてゐた家が千住と兩國邊にあつたので、震災後の現在もさう云ふ店が残つてゐることが分つてみると、それが珍味であると云ふ以外に、いろいろとそれに關聯した思ひ出が湧くのである。昔の江戸つ兒、分けても下町のお店者などは、長火鉢の前にすわりながらこんな物を肴にして一杯やつたものであるが、私の父なども實にその一人であつて、圖らずも今黒いカサ／＼したその鰯の色を眺めると、ありし日の兩親の姿や、私の十臺頃の我が家の食膳の光景がまざ／＼と浮かんで來るのであつた。全く私は、東京にこんな食ひ物があつたことを長い間忘れてゐた。それにしてもまあ雀焼とはよくも思ひついたものだけれども、それがまた辻と云ふ人柄にいかにもしつくり箆まつてゐるので、なるほど辻が土産にしさうなものだわいと、改めて感心したのであつた。と云つたゞけでは分るまいが、それは見るから佗びしい、ヒネクレた、哀れな食ひ物なのである。今の大東京市と云ふものと此の鰯の雀焼とはどう考へても兩立しようとは思はれない程、貧弱な、情ない「名物」なのである。事のついでに私はさまざまな東京の食ひ物、關東の方が本場となつてゐる名物について考へてみたが、先づ想ひ出されたのは淺草海苔である。それから鹽鮭、鹽鱈、鹽煎餅、納豆、佃煮、タ、ミイワシ、クサヤの乾物等等である。これらの中には事實は東京産でないものもあらう。たとへば海苔などは東京灣で採れるものは年々少くなり、大部分は和歌の浦や伊勢灣から集められて、再び淺草海苔と云ふ名前の下に此方へ逆輸入されるのだと聞いてゐる。それに東京名物と云つても、近頃

は關西で得られないものは殆んどない。上に列舉した品目のうちで、納豆は私が此方へ來てからポツ／＼見かけるやうになり、今もほんたうに得られないのは鹽鱈とタ、ミイワシだけであらう。關西の人は鱈と云へば干鱈かぼう鱈のこと、心得て、鹽鱈のあることを知らない。タ、ミイワシに至つては絶対に見られない。だが、これらの食ひ物を見渡したところ、うまいまづいは別として、なんと不思議に寒氣のするやうな、あぢきない物が多いことよ。私の友人の偕樂園主人はタ、ミイワシと鮫の煮つけが大好きで、あれさへあれば外のお数はいらないと云ふのだが、あの麩糊に似たタ、ミイワシを考へると、私は悲しくなるのである。もちろんあれを芳しく焼いて、上等の醬油をふりかけた風味は悪くはない。しかしそれにしても、あの薄つぺらな、名も知れぬ雜魚を寄せ集めたやうなものをバリバリと噛んで飯を搔つ込むと云ふのは、何としても佗びしい。食べる當人は満足でも、はたから見ると決して景氣のいゝものではなく、いかにも詰まらないものをお數にしてゐるやうに見える。で、此のタ、ミイワシと雀焼にある一脈の淋しさ、それを私は東京人の生活の有らゆる方面に感じるのである。

○
食ひ物の話になつたついでに、その方の例を引くのが早分りだと思ふから、尙もう少し云はせて貰はう。元來オツなものとは云はれるやうな、ヒネクレた名物は東京に限つたことで

はない。京や大阪にだつて、調べたら随分變つたものがあることであらう。だが一般に魚肉や野菜や鶏肉や牛肉が豊富で美味な上方にあつては、あゝでもないかうでもないが昂じた結果さう云ふものを摘まむのである。鯛の刺身やグジの鹽焼に飽き飽きした者が、酢莖で茶粥を搔つ込んだりコノコで一杯やると云ふなら分つてゐる。ところが東京では正式の料理に使ふ材料に何一つとしてうまいものがなく、仕方がなしにさう云ふ變なヒネクレたものを漁るのである。前に舉げた鮫の煮つけなどにしても、上方の人に聞いてみると、あんな物は此方では商店のお番菜にも使はぬと云ふ。私は子供の時分によくあれを食はされた覚えがあるが、あの切り身を東京流の黒い醬油で煮て皿の上へ載せたところは、ちやうど丸太を輪切りにしたやうに年輪に似た筋があつて、何のことはない、木で拵へた土瓶敷があるだらう、まあ色合ひも形もとんとあれにそっくりなのだ。そして骨もない代りには味もソツ氣もないものなのだ。それから鹽飛魚、鯖の味噌煮、私は十六七から二十歳頃まで書生奉公をした時代にあゝ云ふものを毎日お惣菜に食はされた経験があり、今思ひ出すと懐しいけれども、味はうまくも何ともない。蠟を噛むが如しとは全くあんなのを云ふのであらう。では生魚で何がうまいかと云へば、先づ秋刀魚に、小鰭に、鰯に、シヨと云つたやうな、ほんの僅かな下魚の類である。菓子にしてもその通りで、東京の人は今戸や草加の鹽煎餅を自慢にするが、上等な菓子や生菓子があつての上なら兎も角も、羊羹一つ碌なものがなくて、鹽煎餅が名物とはあんまり野蠻ではないか。尤もモナカや田舎饅頭に

はいくらかうまいものがあるが、孰れにしても粗野で、貧弱で、殺風景なものばかりである。煎餅にしたつて、今戸や草加と云ふ所は東京の場末や在方であるから、元來田舎の名物なのだ。東京人はさう云ふ變に佗しいものを「一寸オツだ」と云つて賞美するのだが、そして昔の江戸つ兒は知らず、今の彼等は決してそれを負け惜しみのつもりで云つてゐるのではないのだが、私は實はそのオツと云ふ言葉を聞くと、一種のうすら寒い身ぶるひを感じ、その蔭に隠されてゐる東京人の薄ッぺらさを考へて何とも云へず悲しくなる。

○

繰り返して云ふが、私はさう云ふ東京の名物に反感と愛着との矛盾した感情を抱いてゐるので、遠く離れてゐるときは、馬鹿貝の附け焼が戀ひしくなつたり柱の山葵醬油わさびが無上にあつてみたくなつたりする。さうして今度東京へ行つたら存分にたべて來ようと思ふのであるが、生憎季節外れであつたり、小料理屋を覗く暇がなかつたりして、いつも機會を逸してしまふ。何しろたべたい物と云ふのが、料理屋よりも小人數な家庭の小鍋立に適したやうなものばかりであるから、遠慮のいらぬ友達の家にも泊まつて主人夫婦と同じ長火鉢の前にすわり、同じ食卓を圍むのでなければ、中々望みが叶ひにくい。然るに去年の十一月末から十二月の下旬へかけ、私は雜誌社の仕事その他の用務を帯びて暫く滞京する必要が起り、前後二十五六日の間、鶴見の上山草人の宅に客となつた。震災後、私がこん

なにも長く東京附近に留まつてゐたことは今度が始めてであつて、原稿を書く都合上、靜かな草人の家の新築の二階を借りたのであつたが、日頃の私の食ひしん坊を呑み込んでゐる草人は、その長い滞在の期間中頗る氣の利いたもてなしをしてくれたのである。草人は第一に私に何が食ひたいかと云つた。私は鮫鱈鍋と答へた。次ぎには東北の納豆だと云つた。それから仙臺の辛味噌のオミオツケ、カンモのスヂ、馬鹿、柱、シヤコ等を所望した。すると草人の曰くに、それらは孰れも拙者自身の好物で、日夕我が家の食膳を缺かしたことの無い物ばかりである、鮫鱈は幸ひ向島の學校へ通ふ倅があるので、歸りに魚河岸へ廻らせて、毎日のやうに買はせてゐる、納豆は水戸の驛前から取り寄せて常に何十本となく貯へ、毎朝必ず食ふことにしてゐる、味噌は仙臺から送らせてゐたが、近頃此の近所に佐渡の味噌を賣る店があり、試してみると仙臺味噌と同じなので、昨今はそれを用ゐてゐるが、必ずお氣に召すことと思ふ、カンモのスヂも倅に買つて來て貰ふ、馬鹿や柱やシヤコに至つては、此處は名にし負ふ東京灣を前に控へた昔の深川のやうな町だ、餘りふんだんにあり過ぎて我が家の者は食傷してゐる程だけれども、御所望とあらば幾らでも差上げる、その外蟹でも章魚でも赤貝でも蛤でも淺蜆でも蜆でも、江戸つ兒の食ふ物なら何でもある、と云ふのである。蓋し主客が食物について共通の嗜好を有する時ほど、双方に幸福なことはない。私は全く久し振りでさう云ふ江戸前の食物を心行くかぎり賞美した。而も二十年來の舊友と膝をつき合はせてそれらのものを突ツついてゐると、思ひがけない連

想が次ぎ次ぎに浮かんで來るのであつた。今私の眼の前に、どてらを着て、朝鮮の骨董屋から漁つて來たと云ふ詩の文句の彫つてあるチャブ臺に向つて、スゞコや烏賊の鹽辛をセリながら五勺入りの爛徳利で朝酒をたしなんである草人の恰好は、私の親父などの様子によく似てゐる。親父もよくかう云ふ風にはんのちよつびり朝酒を飲んだ。そして草人がしてゐるやうにオミオツケの上へ中辛の七色唐辛を振りかけて啜つた。納豆も水戸から取り寄せるやうな面倒はしなかつたが、その時分毎朝市中を賣り歩くのを買つてたべた。草人が一二合の酒に陶然として、「古への新羅の國の博士等が星を指しけん石瓮かな」などと自作の和歌や俳句を吟詠するやうに、私の親父も直に酔つ拂つて好い心持ちさうに都々逸や義太夫のサワリを呻つた。但し草人は五十の坂を越えた今日も尙往年の氣魄を藏し、精悍な東北男兒の面目を存してゐるので、敗殘の江戸つ兒に過ぎなかつた私の親父と比較するのは氣の毒だけれども、さう云ふ風なチャブ臺の光景を前にしてどてらにくるまつてゐる姿を見ると、どうしても一個の好々爺である。これが嘗ては明治末期の新劇壇に風雲を捲き起し、又或る時は衣川孔雀との艷名を謳はれ、後には北米に雄飛して世界的の映畫俳優となり、ダグラスやジョンバリモアと共演しコンラドファイトを蹴落したりした男とは、思へないのである。さう云へば彼が十年振りで横濱の埠頭に上陸し、ニューグランドホテルの一室に落ち着いて、歡迎の友人達に日本で何が食ひたいかと聞かれた時、やつぱり私と同じやうに「鮫鱈鍋」と答へたものだつた。恐らく彼は十年の滯米期間中、毎年冬が來

る毎に鮫鱈の味を想ひつゞけてゐたのであらう。それでも歸つて來た當座、今後の日本人は疊の上の生活を廢すべしなどと云つてゐたが、間もなく鶴見の山の下にさゝやかな家を買ひ、それを建て増したり改築したりして斜楓莊と名付けてゐる今の草庵には、疊でない部屋は一間もない。竹の柱に茅の屋根ではないけれども、門の扉を船板にしてこれも朝鮮で仕入れた一對の聯を懸け、居間には爐を切つて床の間や棚にアテ丸太を使ふなど、とんと小料理屋か小待合の感じである。さうしてそこに、小さく畏まつて坐つて、丸々と着ぶくれて、自ら下地の加減をし、獨活の切り方がいゝの悪いのと云ひながら鮫鱈の骨を口から手掴みで引き抜いてゐる様子の、いかに似つかはしいことよ。だが又、これがあの時のモンゴールの王子かと思へば、いかにその姿の佻びしくもあることよ。なせかと云つて、御馳走になりながらそんなことを云つては濟まないけれども、さまざまの珍味が並べられてゐる膳の上の色どりが、久保田君の口眞似をすればさう云つても妙にうすら寒くつて悲しいのである。元來江戸の「オツな食ひ物」と云ふものが、獨逸語でフレツセンと云ふベチャペチャ音をさせてたべる動物の食ひ方、あれで食はなければうまくないものが多い。私の知つてゐる英吉利人の奥さんの日本婦人で、茶漬けを音をさせないで食ふ人があるが、あれでは當人も旨くなからうし、見てゐる方でもまづ／＼しい。いつたい日本の食ひ物にはさう云ふものが多いやうだが、東京には殊に澤山ある。第一に蕎麥がさうだ。鹽煎餅、タ、ミイワシ、澤庵、海苔もさうだ。いや、シヤコや蟹になると、音をさせるどころ

か、手を使はなければ追つ付かない。上方でも鯛の頭や蟹の身をむしるには手を使ふのが早道だけれども、東京ほど野蠻な真似をしないで済む。蟹なども、此方のは北國から来る大きい蟹だから始末がいゝが、東京の蟹は小さいので、手が餘計よごれる。就中東京だけの特産であるシヤコと來ては、全く箸を捨てゝかゝり、兩手を使ふ必要があるもので、手がビショビショに下地で濡れる。それを一々ふきんやハンケチで拭いてゐたのでは面倒であるから、チュツチュツと指の腹を舐めずつてはたべる。剥きシヤコは乙でないと言つて殻の着いたのを煮て食ふのだが、騒ぎの大きい割りにたべられるところは甚だ少い。胃の腑に這入る分量より屍骸の方が嵩張るので、あの百足ひかに似た恰好の殻が見る見る膳の上を山を築く。それが、季節が冬であるから、キタナラシイ上にぢゝむさくて寒さうに見える。實際に又、たべながら指の先が冷めたくなる。で、江戸つ兒が鼻をすゝりながら醬油に滲みた兩方の手を舐め舐めたべる光景は、當人が旨がつてゐればある程、何だかさもしくて哀れを誘ふ。私の親父なんかは始終そんな物ばかり食ひつけてゐたせゐか、何をたべてもチュツチュツと舌を鳴らす癖があつたが、草人がやつぱり、舌は鳴らさないけれども、カクン、カクンと、上頤と下頤とを打ちつけてたべる。口の中で、ちやうど獅子舞の獅子が口を閉ぢるやうな音を聞かせる。私は關西にゐて長い間戀ひこがれてゐたものを、今度と云ふ今度はウンザリするほど食はされて、さてどんな感想を持つたかと云へば、實に上に述べたやうな堪らなく淋しい、あぢきない気分である。あゝ、自分がこがれてゐた江戸

つ兒の食ひ物はあれだつたのか、四十年前、我が兩親の家の長火鉢の前に竝んでゐたものはあれだつたのかと、私は歸りの汽車の中でそゞろに身ぶるひしたのであつた。

○

ところで、此の東京人の衣食住に纏はる變な淋しさは何處から來るのかと思つてみるのに、結局それは、東北人の影響ではないのか。私はそれについて青森の男が話したことを思ひ出すのだが、東京の人は仙臺と云ふ所を東北の玄關のやうに考へてゐるけれども、青森からみると、彼處は東京の玄關としか考へられないと云ふのである。なるほど、東京と青森の間では仙臺の位置がさう云ふ風になるであらうが、もし青森と京都の間、或は下關の間では如何。東京の人は政治の中心に住んでゐるから、そこを地理的にも人文的にも日本を中心だと考へ易いが、しかしたまゝ、關西から出かけてみると、何となく東京が東北の玄關のやうに見え、此處から東北が始まるのだと云ふ感が深い。さうして事實、京阪地方に四國や中國の人間が多いやうに、東京には近い所で栃木、茨城、あれからすつと、會津、米澤、仙臺、南部、青森、秋田、あの邊の人間が非常に多い。草人なども仙臺から出て來て名を成した一人であるが、震災後は純粹の江戸つ兒が次第に何處かへ影を潜めて、東北人の入り込む數がますます殖えて行くらしい。その證據には、昔に比べて東北訛の東京辯が非常に多くなつたのに氣がつく。恐らく自動車の運轉手などは東北人が大部分であ

らう。運轉手と云へば、いづぞや小石川の目白坂を流してゐるのを拾つて乗つたのが、此奴が一寸モダン味のあるイナセな兄哥あにいで、茅場町まで乗せて行く途々、落語家のやうな垢抜けた口調でいろ／＼と運轉手稼業の辛いことを瓢輕に語り出すのであつたが、だんだん尋ねると、色物の寄席が大好きとき／＼聞きに行くと言ふ。だが此の兄哥のしやべる言葉が、よく聞いてゐるとやつぱり何處かに野州邊のあの尻上りのアクセントがあるのだ。いかさま、現代の東京のイキとかイナセとか云ふ奴は皆これなんだとつく／＼その時にも思つたことだが、運轉手はいゝとして待合の女將なんかにはズウ／＼が多いのは全く驚く。それも澁谷や五反田ではない、新橋赤坂下谷と云ふやうな所に案外それがあるのである。私は經濟上のことはよく知らないが、自分に最も縁の近い出版業者の話を知ると、雜誌でも單行本でも關東よりは關西の方が遙かに多く賣れる、京都から西には大阪があり、廣島があり、福岡があり、朝鮮滿洲の殖民地があつて、孰れも相當の讀者層を有してゐるが、關東の方は、たゞ東京が全國的に第一位を占め斷然群を抜いてゐる外には、仙臺や札幌などは大したことはないと言ふ。此の一事を以て推論すると、東北と云ふ所は東京と云ふ恐ろしく立派な玄關を持つてゐるだけで、いや、或は玄關にばかり費用をかけた過ぎたために、西部日本に比べると財力も文化も劣つてゐるのだ。さうして東京はその貧しい東北のたつた一つの都會なのだ。斯く東京を「東北地方に屬するもの」として見る時、昔は「鳥が啼く東あづま」と云つた夷が住んでゐた荒蕪の土地が權現様の御入府に依つて政治的に、

と云ふのはつまり人爲的に、繁華な町にさせられたものであると見る時、始めて今戸の煎餅や千住の鮎の雀焼や淺草海苔やタ、ミイワシが名物であると云ふ理由が分る。震災前の東京市は市でなくて村だと云はれたが、震災後の今も、或る意味に於いて田舎なのだ。米澤や會津や秋田や仙臺の延長なのだ。私は嘗て東北に遊んで、モヤシのヌタや、鮎はたはたの味噌漬や、ナメコの三杯酢に舌鼓を打つたことがあり、今でも折々たべてみたくなるけれども、あの地酒のまづさを想ひ、それらの食物の東北らしい淋しい色合ひを想ふと、背筋が寒くなつて来て、再び彼の地へ行つてみようと言ふ氣にはなれない。が、東京の所謂「オツなもの」を竝べた食膳の色彩も、それと幾ばくの差があるかと云ひたい。

私は、歴史のことはよく知らないが、今の東京、昔の江戸と云ふものゝ成り立ちを考へると、昨今の滿洲國の新都新京のやうなものであつたらうと想像する。何しろ土地は廣いけれども、見渡す限り草ぼう／＼たる原ツばで、大阪や京都に負けないやうな新市街を建設することは容易でない。折角道路を作つても、地質が柔かた、泥濘が深く、雨が降れば溝どろになり、冬になれば霜解けがする。そこへ持つて来て秩父風の空ツ風がピユウピユウ吹く。日本は氣候温暖だとか風光明媚とか云はれるのは、瀬戸内海の沿岸、大阪から四國中國へかけての話で、箱根から東は四季を通じて曇天が多く、横なぐりの風雨が強く、

全體に土の色が黒ずんでゐて、山の形や樹木の姿が荒々しく、海岸の景色も、高妙住の江須磨明石などの白沙青松と云ふ譯には行かない。おまけにときと地震がある。二百十日前後には毎年凄じい颱風が来る。土着の人はいへけれども、政府の命令でさう云ふ土地へ西國から移つて来て、俄普請の家の中に住まはなければならなかつた大名や豪商共の家族は、どんなに心細かつたであらう。今でも地方の素封家などが、故郷で失敗して東京へ流れて來、中野や澁谷や阿佐ヶ谷あたりのガタピシした新建ちの借家に世帯を持つてゐるのを見ると、とても氣の毒になると云ふのは、凡そ東京の場末の新開地ぐらゐ索落たる感じのする所はないのである。これは私の持説であるが、あの邊の冬は恐らく北海道の冬よりも寒からう。北國は温度が低くてもそれを凌ぎ得るやうな設備があり、雪が積れば却つて家の中は暖いものだし、雪國らしい情趣も生ずる。然るに東京の場末と来ては、雪が積らないで、空ッ風が吹き募る。同じ借家でも京阪地方のは疊建具が親切に出來てゐて、座敷も京間だからユトリがあり、床や柱の材木などもしつかりしてゐるが、東京のは概して貧弱で建てつけが悪いから、隙間洩る風の寒いこと、云つたらない。夜は敷布團を何枚重ねても、疊の合せ目からさへ寒い空氣が這ひ上つて、スウ〜と襟元へ沁みる。それに、町の光景を何よりも哀れに醜くしてゐるのは、あの外圍ひの葎したみである。上方の借家は、外側が壁か、でなければ杉の焼板を縦に張つてあるので、まだ見られるが、東京の葎と云ふ奴は立派な家の中でも薄汚い。まして安普請になると、あれがカラ〜に乾いて、干割れたり

膨れ上つたりしてゐて、見るからに掘立小屋のやうである。廣い空の下に、さう云ふ矮屋が兩側に竝んで、往來の地面はカン〜に凍ててゐる。そこを木枯しがビュウビュウと紙屑や砂塵を吹き飛ばして通る。夕方、訪ねる知人の家が分らないで、そんな家並みの間をウロ〜する時、路上で子供が鼻をす〜りながら遊んでゐたりするのを見ると、實に悲しい。何の因果で此の人達はこんな所へやつて來るのだらう。東京々と云ふが、農村でも田舎の小都會でも、こんな町よりはまだ落ち着きがあるではないか。彼等の故郷の家屋敷の方が、煤けてゐても寒暑を凌ぐには足りるであらうし、爐邊の居心地も悪くはあるまいに、こんな場末の生活の何處がよくつてと思ひ、彼等もそれは分つてゐながら生きて行くために是非なく東京へ集まるのだとすれば、それは政治が悪いのだと云ふ風にも思ふ。が、徳川氏の初期に於ける江戸の下町も、多分あんな風なカサ〜した、みじめなものだつたに違ひない。そして關西から移住した上方人は、武士も町人も秩父風や筑波風に齒を喰ひしぱり、魚や野菜のまづいのに苦い顔をしたことであらう。吉原の廓言葉が山出しの女の訛りを胡麻化すためであつたことを思へば、遊女なども京大阪のそれに比べて肌觸りが粗く、立居振舞もふつ〜かで、熱河や新京のカフェー女の感じがしたであらうから、たまたま憂さを晴らしに行つても、うた〜望郷の念に驅られたであらう。春は花見、秋は紅葉と云ふけれども、嵐山や嵯峨や高尾や梅尾を知つてゐる者には、雑木林と草ッ原と平凡な丘陵の連續の外に、心を慰める眺めもない。私なんぞが小學校時代に秋の遠足と云ふと瀧

の川へ出かけたものだが、あんなちつぽけな庭みたいな所が紅葉の名所だつたんだから驚く。その外には目黒の不動、堀切の菖蒲、木下川、臥龍梅の梅、柴又の帝釋天、龜井戸の藤、團子坂の菊、池上、堀の内のお祖師様、そんなのが四季の行樂の地であるとは、まあ情ないではないか。大阪の人が成田の不動様々々と云ふから山深き靈域にある大した伽藍なんだらうと思つて、成田驛で下車してドン／＼行くと、田甫や畑ばかりで一向それらしいものがない、あゝさう云へばさつき通り路に山門らしいものがあつたが、扱はあれだつたかしら、まさかあんな詰まらない所ではと、半信半疑で引つ返してみるとやつぱりそれがさうだつたと云ふ話があるが、名勝でも神社佛閣でも、關東と關西では奈良の大佛と上野の大佛ほど違ふ。上野と云へば、京の清水寺に模した清水堂と云ふものが今も山内に残つてゐるが、あれを京都の人に見せたら何と云ふだらう。龜井戸の天神様の太鼓橋と大阪の住吉神社のそれを比べても分る。泉岳寺なんかも、「何だ、これが泉岳寺か」と呆れる人が多いさうだが、あの子供欺しのやうな義士の木像なども赤穂の華岳寺にあるものゝ方がすつと立派であると云ふ。で、すべてがそんな工合に貧弱なのを見るにつけても、昔の江戸人が何とかして江戸を將軍家のお膝元らしくしようと、急に慌てゝいろ／＼なものを取り揃へた様が想像される。だから江戸のものは、東叡山が比叡山の、愛宕山が愛宕山の真似であるやうに、皆間に合せて規模が小さい。

が、草創時代の江戸は關ヶ原で勝ちを制した覇者の都であるから、殺伐な中にも活氣が溢れてゐたであらう。さうしてそこへ流れ込んで來た江州商人や伊勢商人や三河武士共も、滿洲の新天地を望んで自己の運命を開拓しに行く昨今の人々の如く、雄心勃勃たるものがあつたであらう。されば彼等と東北人との混血兒である昔の江戸つ兒が、タ、ミイワシや目刺しのやうなもので我慢しながら、イキだとかオツだとか負け惜しみを云つてゐた氣分は分る。イキと云ふ言葉は「意氣」の意味なのであらうが、彼等はあらゆる生活上の不便を、意氣を以て耐へ、征服したのだ。鯛がまづければ鮪や鰹の刺身を拵へ、蒲鉾が食へなければカンモのスヂのやうなものを作り、餛飩を蕎麥に換へ、白味噌を赤味噌にして、さう云ふ器量の悪い、田舎臭いものを、無理にイキだのオツだのと云つて喜んで食つたのだ。火事をさへ江戸の花と云つて痛快がつた彼等は、一面に於いて京阪の文化を取り入れるのに忙しかつたが、一面では征服者の誇りを以て贅六を輕蔑した。上方見物に來た江戸つ兒が堺の妙國寺の蘇鐵を見て、「何だ蘇鐵か、蘇鐵ならちつとも珍しい、こたあねえ、己あ山葵かと思つた」と云つたと云ふ、それに似たやうな江戸の落語が幾種類かあつて、先年も菊五郎が芝居でやつたが、さう云ふ話の中にある江戸人の自慢を聞いてみても、實質的には何一つ京阪に優つたものがあるのではない、今の蘇鐵の件などは御愛嬌だが、あ

んな工合に威勢のいゝ口調でボン／＼云つて除け、如才のない上方人を遣り込めた氣であるのである。まことに物は見やうであつて、シヤコや目刺しを並べたゞけの貧弱の食膳でも、食ふ人間の氣位次第で勇ましくも哀れにも見える。昔の江戸つ兒のイキと云ひオツと云ふ言葉の中には確かにさう云ふ氣概が籠つてゐたのであらうが、それは政治的に關東が關西を壓服してゐた時代迄のこと、私などが知つてゐる江戸趣味と云ふもの、さうして今の東京にも變な形で残つてゐるそれは、そんな景氣のいゝものではない。幕末から明治の初期、中期、末期へかけての江戸つ兒乃至江戸趣味は、昔の氣概がない癖にその缺點ばかりを受け繼いだ、ヒネクレた、亡國的な、イヤ味なものである。私は日本橋の蠣殻町二丁目の、今もある筈の玉秀と云ふ鳥屋の近所、かき餅屋の隣りで生れたんだが、自分の両親や祖母は勿論、家に入りしてゐた親戚や知人の誰彼を見渡しても、落語にあるやうな向う意氣の強い江戸つ兒は一人もゐなかつた。思ふにそれはいろいろの原因があるであらう。江戸にも追ひ／＼固有の文化が形成され、草創時代のやうな殖民地氣分でなくなつた代りには、化政度の爛熟期を経て次第に世紀末的に、廢頹的になり、旗本の次男が劍術は下手だが三味線や端唄は上手と云ふやうな世相を現出した。そこへ維新の變動が起り、三百年の太平に馴れて遊惰安逸を貪つてゐた江戸人は、政治的、經濟的、軍事的に、上方に破れて關ヶ原の仇を取られた。されば維新後の東北は兎角繼兒扱ひを受け、さまざまの施設が關西より後れてゐるが、東京人と雖も氣分に於いては東北人と同じ敗者であるから、意

氣が揚がらないのも尤もである。ちやうど甘やかされて育つた大家のお坊つちやんがジリジリと身代を傾けて落魄したやうに、彼等は概して見え坊の癖に意志が弱い。常識の圓滿と趣味の纖細を自負してゐるが、はにかみ屋で、人の前では口が利けない。洒落は巧いが世渡りは拙く、正直ではあるが勇氣や執着力がない。五月の鯉の吹き流しとか宵越しの錢は持たねえとか云つても、殖民地時代にはさう云ふ闊達さも必要だつたであらうが、昔の江戸つ兒の意氣地がなくなつては、それは寧ろ救ふべからざる缺點である。だから維新以後の社會に處しても、東京人は日に／＼敗北者の位置に追はれて零落の一路を辿りつゝある。最早や今日に於いては長閑だとか薩閑だとか云ふものがある譯ではなく、關ヶ原の恨みも鳥羽伏見會津の恨みも帳消しにされ、總べての日本人が立身の機會を均等に與へられてゐるのだが、東京の下町の人間で偉い政治家や實業家や軍人になつた者を殆んど聞かない。荒木前陸相や鳩山元文相は東京生れださうであるが、彼等が純粹の東京人であるとしたなら誠に稀有の出世であつて、私共のやうな下町の人間で、あゝ云ふ花々しい働きをしてゐる者は一人もない。本所生れの芥川龍之介は、「われ／＼は氣が弱いから駄目ですな」と、よくさう云つた。「里見君は横濱生れだと云ふが、あれは薩摩人の血を受けてゐるから、とても強氣です、あなたや僕のやうなものぢやありません」と、世間からは強氣らしく思はれてゐる私の弱氣を、流石に彼は觀破してゐた。

嘗て私は「私の見た大阪及び大阪人」の中で、東京の下町には「敗残の江戸つ兒」と云ふ型が多いことを書いた。「私の父親などもその典型的な一人であつたが、正直で、潔癖で、億劫がり屋で、名前に淡く、人みしりが強く、お世辭を云ふことが大嫌ひで（中略）商賣などをしても、他國者の押し強いのとはとても太刀打ちすることが出来ない。そんな工合で親譲りの財産も擦つてしまひ、老境に及んでは孫子や親類の厄介になるより外はないが、當人はそれを少しも苦にしない。（中略）五十錢か一圓も小遣ひをやればそれを持つて淺草あたりへテクつて行つて、活動を見るとか、鮎の立ち食ひをするとかして、半日を愉快に過す。酒も好きだが多くを嗜まず、一合の晩酌に陶然として、酔へば機嫌よく世間話をし、直きにすやすやと寝てしまふ。ハタから見ると何を樂しみに生きてゐるのか分らないと云ひたいが、當人は天成の樂天家であるから、決して世を拗ねたり他人の幸福を嫉んだりしない。自分は勿論、骨肉の者の死に遇つても騒がず嘆かず、何事も定命としてあきらめる。その代り親類間の争ひとか、一家内の不和とかに關係することをうるさがり、自分だけはいつも超然として誰とでも調和する。従つて子供たちにも親類にも邪魔にされず、又他人の迷惑になるやうな無心も云はず、ほんの僅かなあてがひ扶持で喜んで暮らしてゐる」と云ふ、さう云ふ老人がよく區役所や小學校の小使をしてゐたり、町内の碁會所など

へ來てゐるものだが、いつぞやの中央公論に佐野繁次郎君が書いてゐた「船場」の話を讀むと、大阪にはあゝ云ふ型が少いと云ふから、矢張りあれは東京人の特質であらう。私は「さう云ふ老人が東京の古い家なら、一家一門の間に必ず一人ぐらゐはゐるものだ」と書いた。「近いところでは辻潤などもあそのタイプだ」とも云つた。この頃大阪に來て音樂の教師か何かをしてゐる澤田柳吉君なんども、敗残と云つては失禮であるが、先づその方の部類であらう。が、よく考へると、一家一門に一人どころではない、こんな老人は實に多いのだ。澤田君や辻などはまだ脂ツ氣があるけれども、あれがもう少し年を取つて枯れて來ると、飄々として風のやうな、全く市井の仙人のやうな容貌になる。その顔つきは、今を時めく大臣や實業家などのそれとは正反對の感じて、第一皮膚の色つやが違ふ。どうも私の經驗では、さう云ふ老人に禿げ頭の人をあまり見かけない。おびんずる様のやうにたら／＼光つた、精力的な、蝟入道のやうな爺さんはめつたにゐない。體もコチ／＼に干涸らびてゐるが、顔も面長に痩せてゐて、大概胡麻鹽の髪を五分刈りぐらゐにしてゐる。カサ／＼した肌につやと云ふものが微塵もなく、さも榮養不良らしい血色をし、皺の多いのが目立つ。さうして、眼の光が柔和で、初對面の人に會ふ時、オド／＼した、はにかむやうな様子合がある。物を云はせると、さわやかな江戸辯であるが、決して早口には語らず、又おしやべりでもなく、必要な時だけ、低い、優しい聲で、ゆつくりと云ふ。それが頼りないくらゐ粘り氣のない、さらりとした聲音である。それでゐて氣の向いた折には

家人を掴まへて洒落なども云ふ。私の親父が貧窮時代に（と云ふと、貧窮でない時代もあつたやうだが、後半生はずつと貧乏のし通しであつた。）五六歳になる末の弟を他家へ養子にやらうとしたことがあつたが、その弟が陰囊何とか云ふ鞆丸の垂れ下る病氣になつた、すると或る朝、親父は母と差向ひに長火鉢の上に屈みながら、「いゝぢやあねえか、それがほんとの持參鞆丸だわな」と、ニコリともせず、憂鬱な口調で云ふのである。私は傍で聞いてゐて可笑しくもあれば哀れでもあつたが、今考へると、親父が貧乏したのは、何よりも氣魄がないと云ふこと、無精であることが原因だつたと思ふ。親父はづう／＼しいことや臆面もないことを甚しく嫌つた。そしてそんな人間を「彼奴は田舎者だ」と云つた。だから一たび失敗するとすつかりアキラメを附けてしまつて、悪足掻きをしたつて仕方がないと云ふやうな變に悟り濟ました氣になり、獅子奮迅の勢で盛り返さうと云ふ料簡が湧かない。そんならと云つて、地道にコツ／＼商賣にいそしむと云ふのでもない。日曜になると、長火鉢の前で一杯引つけて、その儘ごろつと横になつて寝てばかりゐた。「ちよいと、お父つあん、風邪を引きますよ、そんな所に寝てしまつてさあ」と、母が叱言を云ひながらそうツと搔卷をかけてやる。少年時代の私は、さう云ふ光景を幾度も見てゐる方面へ顔出しをしたらばどうか。親父のやうな働きのない人間でも、正直の一徳を買はれて、随分力になつてくれてゐた人もある、さうでなくても、私に學費を給してくれ

たり、家庭教師の口を世話してくれた人々がある、ところが親父はさう云ふ方面へさつぱり挨拶に廻つてくれない、「近頃お父さんはどうしてゐるね、暫くお目に懸らないが」などと皮肉を云はれたこともあつたが、親父はいつも「濟まねえ濟まねえ」を繰り返して、「誰さんの所へも一遍顔出しをしなくツちやあならねえんだが」と歌には唄ふけれども、それでゐて、いざとなるとつい億劫になつてしまふ。何もオベツカを云ひに行けの、お世辭を使つて取り入れのと云ふのではない、當然の禮儀を盡す迄のことなんだが、親父に云はせると「どうもあんまり厄介になり過ぎて、キマリが悪くつて行けやしねえ」とか、「いろいろ親切に云つて下さるんで、有りがてえとは思ふけれども、自分の意氣地のねえことがつくづくイヤになつちまつて」とか云ふのである。だから恩に着てゐない譯ではないんだが、それだけに行きにくくなつて足が遠のき、ます／＼閩が高くなり、我から世間を狭くしてしまふ。何とも云ひやうのない腑甲斐なさが、會つてみると毒にも藥にもならない人間で、決して憎む氣にはなれない。現に親父などは若い時から一遍も吉原を知らないと云ふ堅人で、何の楽しみがあるのでもなく、只もう無精なのであつた。で、東京人の悉くが斯うであるとは云へないけれども、その大部分が、年を取るとかう云つた老人になる。されば京都や大阪では土着の人間が今も尙先祖の資産を守り、大資本主義の時勢に抗して舊家の體面を保つてゐるのがザラにあるが、東京の下町には、恐らくそんなのは數へる程しか残つてゐない。彼等は大概親の身代をなくして、それでも生れた町の近所の裏店

なんかに巢食つてゐたものだが、その頽勢に地震が拍車をかけたので、散り／＼バラ／＼に郊外の方へ追ひ立てられ、行くへも知れずになつてしまつた。本所深川淺草あたりには、復興後の現在もコマ／＼した家が割りに多いやうだから、まだ幾分か昔の住民が留まつてゐるさうな氣がするが、一番ひどいのは日本橋ッ兒の運命である。彼等の家の跡は、京橋銀座丸の内の勢力範圍に入れられて磊嵬たる大ビルディングのブロックに填められ、最早や彼等の住むやうな小さな路次の存在を許さない。私は船場や島の内あたりを歩いて、小ぢんまりした格子作りのしまうた家だの、昔風な土藏作りの老舗の前を通つたりすると、昔の日本橋の町の様子や小學校時代の友達の家などを思ひ浮かべるのであるが、さう云ふ友達で元の所に住んでゐるのは、借樂園を除いたら一軒もない。蠣殻町を中心にして茅場町、堀江町、杉の森など、五六町の半徑内にかたまつてゐた私の本家や分家等も、私の所謂「北海道よりも寒い」場末の方へ移つて行き、或は朝鮮、ブラジルへまで流れて行つて、伯父伯母などが亡くなつた後は音信も不通になり、行方不明になつたのもある。かく考へて來れば、日本橋ッ兒は實に散々な目に遇つてゐる譯で、あの昭和通りや市場通りの眞ん中に立つて巍然たる街路を四顧すると、方丈記の著者ならずとも人生の無常を感じるのである。

思ふに眞の東京人であるならば、上に述べた私の觀察が決して偏見でも誇張でもないことを認めてくれるであらう。私は好んで故郷の人をクサスのではない。が、東京人は從來地方の人が考へてゐたやうな威勢のいゝ、ブリ、アントな人種ではない。彼等には何處までも東北人の暗い陰翳が付き纏つてゐ、彼等の頓智や洒落にさへも一脈の淋しさがたゞよふのである。それを疑ふ者は久保田万太郎氏の戯曲を讀むがよい。氏の作品を貫いてゐるあのじめ／＼した陰鬱な氣分、あれこそ實に偽りのない東京人の世界であつて、苟くも下町の生活を知つてゐる者には、氏の描寫するさまざまの人物の顔つきや物云ひなどが一種異様な現實味を持つて迫つて來るのを覺えるであらう。氏は好んでお店者や、職人や、お羽打ち枯らした藝人や、若旦那のなれの果てなどを扱ふやうだが、東京の下町の住民なる者は大部分がさう云ふ種族であつて、私などもあれを讀むと、自分の親しい人々の中に一々それに當て嵌まるタイプを求めることが出來、彼等の聲音や風采はおろか、一と間の様子、疊、座布團、襖の色、押入れ、火鉢、茶箆のありどころ、果てはその火鉢の抽出しや茶箆の中にとんな物がしまつてあるかと云ふことまで、はつきり推測出來るのである。此の意味に於いて久保田氏の戯曲は、現代の東京が持つ唯一の郷土文學であり、また滅び行く東京人の弔鐘であるとも云へる。實際、氏の描くやうな純下町の世界は、今では東京の何處に残つてゐるのであらう。事に依ると「たけくらべ」や「隅田川」の昔をあこがれる氏の藝術家的空想が生んだ産物であつて、もうそんなものは何處にも存在しないの

でないかと、私はしばしば疑ふのである。氏の戯曲では、出て来る人物の悉くが洗練された、山の手臭の微塵もない、生粹の下町辯を使ふが、現代ではもう俳優とか落語家とか云ふ餘程特殊の社會でなかつたら、あゝ云ふ場合はめつたに有り得ない。十人寄れば必ずそのうちの一人か二人は東北訛りが交つたり、山の手言葉や書生言葉が這入つたりする。こゝに下町辯と云ふのは、私の親父なぞの時代の下町の町人が使つた言葉、即ち氏の戯曲に見るやうな云ひ廻しを指すのであるが、私なんぞが親戚故舊の何回忌とか云ふやうな時に上京して、日本橋時代の古い顔馴染が寄り集まつた席へ出ると、たまにさう云ふ久保田式會話の情景に打つかる。そしてそんな老人たちに對すると、自分もいつしか釣り込まれて長らく使ふ機會のなかつたあのなつかしい云ひ廻しで受け答へをし、一寸いゝ氣持ちになるのであるが、それにしてもまあ此の人たちは、こんなに東京が變り果てしまふまでよくも無事であつたものだ、いつたい今の東京のどんな隅っこに生きてゐたのかと、不思議な氣持ちがするのである。彼等の歳を聞いてみると、みんな五十幾つとか六十幾つとか云ふ。「只今お住居は」と云ふと、代々木の方とか、杉並の方とか、果ては馬込だの碑文ヶ谷だのと、昔は聞いたこともなかつた町や村の名を云つて、あとは曖昧に口籠りながらキマリ惡るさうに横を向く。此の人たちが誰も彼も決して裕福に暮らしてゐるのでないことは、住居の様子を聞くまでもなく身なりをみればそれと察しがつくのであつて、羊羹色の紋附の羽織にヤマの這入つた仙臺平の袴なんかを穿いてゐるのはまだいゝ方だが、中には明治年代の

フロックコートを着、雨の日だとゴムの長靴でやつて來たりする。私は久し振りに亡き両親が親しくしてゐた此れらの人たちに遇ふのであるが、やはり嬉しいよりは悲しい方が胸を打つ。彼等と雖も昔はもう少しその眼光に輝やきがあり、言語に張りがあり、表情に活氣があつた筈だが、何とその下町辯の徒らに鮮やかにして、その人體のいかに影が薄く、みすばらしくなつたことよ。分けても斯う云ふ人たちの身にそぐはない洋服姿は、何よりも心を傷ましめる。彼等は窮屈なズボンや上衣は着てゐるけれども、煙草を吸ふ手つきや、ヒョイヒョイと首を下げて挨拶する恰好や、兩の膝頭を擦り寄せて畏まる様子などに、争はれない體のこなしが出て、どうしても角帯に前掛けを締めてゐた下町の町人そのまゝである。だが考へてみれば、霜の降る朝遠い郊外から赤土の解けた道を踏んで、バスや省線や市電を乗り次いで來る今の彼等には、ぞべらぞべらした紋附袴よりも洋服やゴム靴の方が便利であるに違ひない。彼等は今も服装なんかには構つてゐる暇はないのだ。彼等の持つてゐた東京人の誇りなんと云ふものは、世路の辛酸と闘ふ間に消磨し盡されて、昔の日本橋の町が跡形もなく滅びたやうに、完全に忘れ去られてゐるのだ。さうなつて來ると、今も彼等が使つてゐる爽やかな下町辯といふものが、寧ろ哀愁を催さしめる。いつそ東北のズウ／＼辯か朝鮮訛りの日本語でも使つてゐてくれたらば、こんなに情なくは見えないと思ふ。いかに故郷忘じ難しとて、私はかう云ふ人々と會ひ、かう云ふ悲しい思ひをするのが辛いのである。久保田氏の戯曲の世界は、戯曲なればこそ感興を覺えるが、實

際にあゝ云ふ雰圍氣の中へ這入つてみようとはさら／＼願はないのである。

私は餘りに舊時代の東京人について語り過ぎたかも知れない。久保田氏の戯曲か落語家の話にのみ出て来る東京人、さう云ふものは、たとひ彼等が眞の江戸人の子孫であり、江戸の傳統を受け継いだ純粹の種族であるとしても、さうして又、私には最も縁故の深い連中であるとは云ふものゝ、或は既に滅びてしまひ、或は滅びつゝある人々であつて、現在の東京を代表する市民でも何でもない。さうかと云つて、今の帝都を代表するのはどう云ふ階級の人々であらうか、私にははつきり見當が付かないのであるが、震災後特に感じることは、所謂知識階級に屬する男女が著しく殖えたやうな氣がする一事である。尤も東京と云ふ所は昔からさうなのであるから、近頃頓にさう感じるのは私が田舎者になつたせゐかも知れない。が、いつたい山の手の住民は以前から下町の町人に對して、官吏や、軍人や、政治家や、讀書人が多かつた。そして彼等の住宅區域は大部分震災を免れたので、焼け残つた彼等が自然東京を代表するやうになり、それが今日の知識階級と云ふものに進化したのではあるまいか。「進化」と云ふのは、今日の彼等は以前の山の手の人々とも違ふ。以前の人々は、服装、言葉づかひ、坐作進退等、いろ／＼の點で明かに下町の市民と對照をなし、趣味や肌觸りが異つてゐたが、今日の知識階級は震災前の下町山の手兩様の趣味

を包容し、尙その上に上方贅六の料理をも歓迎し、近代藝術の教養に富み、西歐の繪畫や音樂をさへ理解する。實に彼等の鑑賞力は出鱈目と云つてもいゝ程に廣い。彼等の趣味を比率で現はすと、山の手五分、下町三分、田舎二分と云ふところではあるまいか。その昔漱石先生は「猫」の中で「月並」なるものに定義を下して、白木屋の番頭に中學生を加へて二で割つたものだと云つたが、今日の東京にはそれよりもう少し複雑な要素の月並臭を持つた通人が、非常に多い。但し複雑と云つたところで、決して内面的な複雑ではなく、極めて上ツ面な、ほんの鼻先だけのもので、お腹の中の單純なことは白木屋の番頭プラス中學生時代と變りはない。彼等は昨日はAワンで飯を喰つて文樂座の出開帳に押し寄せ、今日は帝劇のキングゴングを見て歸りに濱作で一杯やる。朝にファッシュヨ政治を論じ、ヒットラーや荒木さんの噂をするかと思へば、夕にはフリードマンを評し、菊五郎を説く。而も一と通り聞いてゐると、中々分つたらしいことを云ふ。随分政界の消息にも通じ、新聞に出ないやうなことまでも聞き齧つてゐる、又樂屋裏の事情にも明るく、水谷八重子は誰がパトロンだとか、六代目には幾ら幾らの借金があるとか、見て來たやうなことを云ふ。文化學院の生徒あたりから四五十の有閑紳士やマダム連までが大概此の程度の通人であり、インテリゲンチアであるのだから恐れ入る。さうしてロケだのデモだのセンチだの合流だの轉向だのと云ふ言葉が、忽ち一般人の常用語になり、常識になる。私はかう云ふ市民に會ふと、なるほど日本人も利口になり生意氣になつたものだと思ふ。全く、此の調子

ては舶來品であれ國産品であれ、あらゆる贅澤品が東京に於いて多大の顧客を見出すと云ふのも無理はない。九里四郎君が今のBRを數寄屋橋際で始める前に、出来るなら關西で開業しようと思つて、大阪と東京と、兩方の西洋料理屋を視察してみたが、大阪では開く餘地がないことを悟つて東京へ持つて行つた。九里君の話に依ると、洋食屋へ這入る客種と云ふのが、此の兩都ではまるで違ふ、大阪では高級な洋食を食ふお客さんは極く少數に限られてゐて、そんな人たちにはまあアラスカが一軒あれば澤山である、あとの連中は、洋食と云へばハイカラで、輕便で、格安なもの極めてゐるので、いくら旨くても安くなくかつたら食ひに行かない、だから經營次第で儲けることは出来るけれども、料理人が腕を振つて認めて貰ふと云ふ樂しみが無い、そこへ行くと東京は、彼處が旨いと云ふことになれば値段などにはお構ひなしに食道樂が寄つて來る、故に贅澤な「うまいもの屋」が後から後から出来るのだと云ふ。バアなどにしても、大阪では女給の綺麗首を揃へてカクテルカウイスキーでも飲まして置くより能はないが、東京では華族や外交官の通があるので、歐洲物の古酒の味を解してくれ、かう云ふものをどう云ふ經路で手に入れたかなどと褒めてくれるのが嬉しいと云ふ。半襟なども大阪ではたか／＼十圓臺が止まりであるが、東京には二十圓三十圓と云ふのが珍しくない。従つて東京人は氣前がよく、金離れがいい。旅行に行つても茶代なんかを派手に氣張る。宵越しの錢は持たないと云ふ習慣を、今の東京の智識階級が矢張り受け繼いでゐるのである。いや、そればかりでなく、彼等は前代の下

町人の弱點を總べて受け繼いでゐる、たとへば變に氣の弱いところも、一抹の東北的淋しさの漂つてゐるところも。

元來此の連中たち、今の東京の智識階級なるものは、職業的に見てどう云ふ人々が多いのであらうか。前にも云ふやうに、彼等の中には學生もある、有閑紳士や婦人もある、銀行會社の重役もある、官吏や代議士の古手もある、だが此の外に昔は下町人の方に屬してゐたところの、銀座京橋日本橋邊の商店の主人、俳優、藝人、畫家、小説家等も交つてゐる。斯く見來れば紛然雜然とした集團であつて職業的には統一がないのであるが、それである。彼等の面貌、言語、動作等には或る共通したものが存在する。昔は俳優でも新派の人と舊派の人とは身嗜みが異なり、藝者と貴婦人とは一見して區別が付き、官吏と町人とは頭の下げ方一つでも見分けられたが、今はだん／＼外見上の差別がなくなり、映畫のスタールも華族の令嬢も清元の師匠も金持ちの若旦那もホテルのマナージャーも外交官も、皆インテリゲンチアと云ふ一階級に屬せんとしてゐる。何しろ久保田の万ちやんが洋服を着て放送局の何々課長とかに納まり、菊五郎がニッカー姿で鳩山文部大臣にゴルフを教はる御時勢である。思ふにかう云ふ状態を誘致したのは、ジャーナリズムの力が大いに與つてゐるのであらう。新聞や雜誌の上では、大臣も大學教授も實業家も藝術家も一様に「時の

人」として平等の扱ひを受ける。さうしてそれらの専門的智識や技倆や經歷を持つた彼等が同じ誌上に肩を並べて、思想や意見を發表する。讀者から見れば近衛文麿公も西田幾太郎博士も平田晋策氏も大辻司郎君も、乃至われわれ小説家も、その政談たる漫談たる、哲學的論文たると藝術的創作たるを問はず、興味ある讀み物を提供する點に於いて變りはない。斯くして讀者も寄稿家も新聞雜誌と云ふ一つ箱船の乗合客となり、その全體が東京の智識階級を代表する。そこへ持つて來て婦人雜誌や三面記事の記者共は、飛耳張目してブルジョア社會のスキヤンダルを素ッ破抜き、或は當事者自身が堂々と告白したり、釋明したりするので、縁もゆかりもない家庭の祕事が飛んでもない方面にまで知れ渡り、まるで親類間の出來事のやうに論議される。實際東京と云ふ所は、最近の擴張に依つて面積は廣くなつたけれども、世間的には非常に狭くなつてゐる。たとへば私などがたまに出で行つて銀座のバーに現はれたり、小料理屋の暖簾をくぐつたりすると、すぐに發見されてしまふ。それは寫眞と云ふものが行き互つてゐるからで、天ぶら屋の亭主やバアテンダーなんぞが直きに「谷崎先生でいらつしやいますか」と來る。此の調子では東京に住んでゐる連中は一層知られてゐることと思ふが、一般に、市民全體が各方面の名士連と個人的に親しくないまでも、そのくらゐな親しきを感じ、又感じるだけのゴシップ的智識を持ち合はせてゐる。勿論かう云ふ傾向は、一面に於いて文運の發達を證據立てるものであり、又ジャーナリズムの影響の及ぶところも東京だけではないだらうけれども、就中東京が特

にひどい。世間が狭いことにかけては大阪も同様ではあるが、しかし阪地は昔から「町人の都」であつて、職業的に統一されてゐ、今尙勤勉で、質素で、謙讓な商人氣質を失つてゐない。大多數の中産階級が、商科大學や専門學校を卒業した人でも、親の遺業を受け繼いで一商店の主になると、よく己れの分を守り、知らないでもないことを知らうとはせず、一意専心、眞つ黒になつて商賣に身を入れる。俳優なぞでも、いつぞや左團次が神戸へ來た時、阪神間の或る夫人を樂屋へ案内したことがあつたが、さう云ふ夫人に對する態度が東京と大阪では大變違ふ、此方では鴈治郎あたりでさへとても腰が低くておあいそがいゝが、東京の役者はサツパリはしてゐるけれどもブツキラボウである、あれでは御祝儀なんぞ出したつて受け取りもしまいし、うつかりそんな眞似をしたら怒られさうな氣がすると云ふ話であつたが、事實關西では、彼等には彼等の社會があつて、やはりその分を守つてゐるらしい。關西に新時代の俳優や劇團が出ないのも、そんな卑屈な封建的氣風があるからで、分を守ると云ふことも場合に依つては困りものだが、しかし東京のやうに天ぶら屋の親爺までが智識階級面をぶら下げ、皆座談會の名士のやうな物分りのいゝ顔つきをしてゐるのも、何となく輕佻浮薄な感を催さしめる。

○
輕佻浮薄と云ふ言葉が出たから、ついでに此處で書いてしまふが、東京及東京人の何より

の缺點は、おつとりしたところがないことである。先年私がしきりに洋行したがつてゐた時分、或る時偶然祇園の茶屋で正宗得三郎畫伯に出遇ひ「僕も一遍巴里へ行つてみたいんだが」と云ふと、「巴里は京都と同じやうな所ですよ、物靜かで、おつとりとしてゐて。此處で遊んでゐればわざ／＼出かけるがものはないでせう」と畫伯が云つた。成る程、苟くも一國の文化の淵源であり、地方人の憧れの的となつてゐる首府であるからには、さうでなければなるまいと思ふ。然るに東京にはさう云ふ落ち着きがないのである。これは年中地震があつたり風がザワ／＼吹いたりする氣候風土にも因るのであらう。實際、六七十年に一逼つつ市街の大半が破壊されたり、毎年冬が来るたびに何百軒も家が焼ける土地柄では、人の心が只管新を趁ふやうになるのも當然かも知れないが、それにしても東京人は餘りに重厚の資質に乏しく、且最も嘆かほしいことには、その乏しさから來る薄ッぺらさや哀れさに、彼等自身が氣が付いてゐない。而も東京が日本の帝都である以上、此の東京人の薄ッぺらさがわれ／＼の産するあらゆる文學藝術に影響することを思へば、等閑に附すべき問題でない。いつたい東京人は何處までもイキと云ふことに祟られてゐるので、大都會の人間に似合はず、コセコセした、四疊半式の、しん猫趣味が好きであつて、近頃流行つてゐる小唄などと云ふものは、あれがやつぱり音曲の方の雀焼であり、タ、ミイワシではないか。こんなことを云ふと木村莊八君なんぞに叱られさうだが、私は實にあのくらゐ薄ッぺらなものはないと思ふ。あの中に東京人の缺點の總べてが具現されてゐると云つ

てもいい。嘗て故岸田劉生君は伊十郎式の長唄がすたれて小三郎式のが流行するのを嘆いてゐたやうに記憶するが、東京人は江戸の昔から、上方の音曲を輸入してはそれをだんだん薄ッぺらなものに變へて行つたのだ。ちやうど今日の亞米利加人が歐羅巴人の優長なものを嗤つてスマートネスを自慢するのと同じ心理かも知れないが、さうして徳川時代には、上方の鈍重味に代る新鮮さ、ピチピチした、魚の跳ねるやうな感覺が盛られてゐたのかも知れないが、それがもう今日の小唄になると、そんな新鮮さはなくなつて、一種の廢頹的なものが感じられる。尤も廢頹的と云つても、毒々しいものや油ツこいものが腐つたのなら文學に於けるデカダン派のやうな深みも生じようけれども、もと／＼鮎の雀焼が日が立つたんだから、ただカサ／＼に干涸らびたゞけで何の變哲もありはしない。但し小三郎の長唄あたりは何と云つても洗練されてゐて、鯛ほどの貫目はないにしろ、まあ鯉ぐらゐる品のよさがあり、先づ東京趣味の上乗なるもの、纖弱ながら健康體の音曲と云へようが、新内、都々逸、端唄、歌澤、あゝ云ふものから段々とよくない。私の親父は小さんの都々逸が大好きで、たび／＼寄席へ引つ張つて行かれたので、あれは今も覚えてゐるし、又橋之助の冴えた音やキビ／＼した節廻しはハッキリ耳に残つてゐるが、さう云ふ稀な例を除いて、藝者の座敷なんぞで聞いた都々逸を想ひ出すと、私はぞつとするのである。さう云ふ私も東京時代には咽喉が自慢で、遊びに行くとき矢鱈に三味線を弾かせたものだが、でもその時分から、都々逸だけは餘り唄つたことがなかつた。それと云ふのが、變

に安直に氣が利いてゐるのが、蟲が好かなかつたのだ。どうせ俚謠の一種であるから卑俗なのは是非もないとして、その主題とするところは何かと云へば、吉原、山谷、隅田川沿岸の狭斜の世界に於ける男女の痴情、でなければ奥の植半か水神の八百松あたりの微吟低酌趣味である。それも真正面から素直に謠つてあるのではなく、例のイキガリから、愚にも付かない洒落や地口や穿ちのやうなことを嬉しがつてゐるので、氣が利いてゐると云へば云ふものゝ、全體の感じが實に薄手で弱々しい。さうして又聲の出し方が東京人獨特のものであつて、あの冴えた甲の聲、キュウツと突つ込むところ、軽くウツチャツたりシヤクツたりするところ、キビキビした齒切れのいゝ發音、あればかりは關西人に眞似が出来ないものだから、東京人は何處へ行つてもその「江戸前」の咽喉を自慢にするのであるが、私にはあのウツチャリや突つ込みが何とも云へず氣障に聞える。大阪人の義太夫も聲の出し方が不自然ではあるが、しかし此の方は腹の底から全力的に出す。孰方が他人迷惑かと云へば、義太夫の方があくどいだけに迷惑だけでも、その何處までも堂々として、眞つ正直に語るところは、兎に角男性的であると云へるが、都々逸や端唄の名人なんと云ふものは、要するにたゞ器用に咽喉を轉がすのである。而もそんなのに限つて、さも得意さうに頤をシヤクリながら、鼻の先や口の先から、細々とした、弱い、果敢ない、コマシヤクられた聲を出す。私はあれを聞くと、これが大の男の出す聲かと、亡國の音を聞いてゐるやうな情ない氣がするのである。上方の地唄にも短い唄物があり、遊女の涙やきぬくの別

れや獨り寢の淋しさを謠つたものがあるけれども、それらの歌詞や節廻しは由來するところが深く、遠く閑吟集や松の葉の時代から傳統の絲を引いてゐるだけに、弱々しい中にも纏綿たる情緒があり、骨身に沁むやうな沈痛味があつて、決してあんな上すべりのした、安直なものではない。同じ上方の情景でも、歌澤にある「淀の川瀬」なんかと來たら、あの二上りで「淀のウー」と出る突拍子もない唄ひ始めからして第一淀の景色ではない。どうしたつてあれは綾瀬川が市川あたりの、筑波風の空ッ風が吹く景色だ。そして角刈りの兄哥が何か、錢湯で怒鳴るのに適した唄だ。元來端唄はほんの即興的なものであるから、聞き嚙りに覺えたのを器用で唄ひこなすところが生命なので、師匠を取つて稽古をすべきものではないのに、それがいつの間にか歌澤と云ふ嚴めしいものになり、芝派だの寅派だのと云ふのからして馬鹿々々しいと思つたら、近頃は小唄にまで家元があると云ふ。何の事はない、鰯の目刺しを金蒔繪の膳に載せるやうなものではないか。

たび／＼親父を引き合ひに出して恐縮であるが、私の親父が或る時「お艶ごろし」と云ふのを聞いて「江戸つ兒が『お艶ごろし』と云ふ奴があるけえ、コロシと云ふんだ」と、さう云つたことがある。親父は又醬油のことをムラサキだの、おかうこのことをオシンコだのと云ふのを嫌つて、「ムラサキなんて云はねえで下地したぢと云ひねえ、ありやあ田舎者の云

ふこつた」と、よくそんなことを氣にしたものだつたが、それで思ひ當るのは、どうも近頃の東京人は親父時代の江戸つ兒から見ると、何かその邊が田舎臭くなつてゐるのではな
いか。明治時代の江戸趣味なるものは、林中の常盤津や默阿彌の世話物に依つて代表され
る、相當滋味のあるもので、いくら何でも今日のやうに薄ッぺらではなかつたであらう。
つまり小唄が流行ると云ふのは、地方人がシンコやムラサキなどと云ひたがる類で、昔の
人は果してあんなのを江戸趣味の粹なものと思ふかどうか、大きに「ありやお田舎者の習
ふもんだ」と云ふかも知れない。總べて物事は極端に長所を發達させると缺點ばかりが残
るやうになるもので、無闇にイキがつたり輕快がつたりした結果が、とう／＼あんな弱々
しいヒネクレたものが流行るやうになつたのであらう。で、私には今の東京人の顔が、あ
の小唄のやうにコマシヤクレた貧弱なものに見えてならない。彼等は多く氣の利かないこ
とや洒落の分らないことを一代の恥辱と心得てゐる人間で、年齒も行かぬ時代から諧謔を
解し、穿ちに長じてゐるけれども、彼等の云ふことには小唄のウツチャリや突つ込みのや
うな嫌味が伴ふ。さう云へば銀座の裏通りあたりには、しん猫式の小さなカフェーが軒を
並べてゐるが、あれが矢張り水神や植半に代る近代式四疊半であつて、東京人はいつ迄た
つてもあゝ云ふ風なひねツこびた趣味を喜ぶのである。成る程、樂隊入りでドンチャン囃
し立てる大阪式のカフェーも俗惡ではあるが、さればと云つてあの四疊半式がよもや高級
だとは云へまい。それも一軒や二軒ではなく、あゝ云ふのが實に無數にあつて、それ／＼

小さなサークルの常連を擁してゐるのである。大阪式のは俗惡でも規模が大きいだけ資本
を要するが、せい／＼テーブルの五六臺も並ぶくらゐな狭い所へ、成るだけ金のかゝらな
い、目先の變つた造作を施し、間接照明の暗い電氣でボロ隠しをして、文學青年の喜びさ
うな佛蘭西語の屋號を附けたら、それで結構出来るのだから、新奇の店が彼方此方に雨後
の筍の如く殖える。尤も出来るのも簡單だが、潰れるのも早い。何しろほんの臍繰り金
で、僅かな常連を頼りにしてやる仕事だから、少し客足が遠のいたら、忽ちバタ／＼と參
つてしまふ。お客の方も經營者の方も、孰方も飽きつばいのだが、それでゐてさう云ふ店
や客が常に絶えたことはない。私は、斯くの如き有様を見るにつけても、東京で寶塚のや
うな大がかりな歡樂境の經營が成り立たないと云ふのは、眞に所以ある哉と思ふ。私が覺
えてからでも昔向島に太陽閣と云ふ、温泉と料理屋と娛樂場とを兼ねたやうなものが計畫
されたことがあり、その後鶴見に花月園が出来たが、太陽閣は直ぐに潰れてしまつたし、
花月園とても寶塚のやうには發展しなかつた。それと云ふのが、東京人はあゝ云ふ風に切
符制度や何かで大衆的に無邪氣に遊ぶことを、智識階級の沽券に關はるやうに感ずるので
ある。見え坊で、はにかみ屋で、そのくせ獨りよがりの彼等は、通俗とか低級とか云はれ
ることを厭がつて衆に伍することを嫌ひ、何かしら自分だけの小天地を築かなければ承知
しない。そこで彼等は彼等の趣味にかなつた小ぢんまりしたカフェーに行き、薄暗いポツ
クス隅に收まつて目立たぬやうに紅茶かカクテルを啜りながら、女給を相手にヒソ／＼

コン／＼と私語することを楽しみとする。さう云ふモボは大概洋服の身嗜みに五分の隙もなく、言語動作が垢抜けてゐて、決して喧嘩を吹つかけたり、女の頬ツぺたに喰らひ着いたりするやうな不作法はしない。彼等は鄭重で、お行儀がよくて、都會人の氣取りと自信とを鼻先にぶら下げてる、相手の女が外のテールブルへ呼ばれて行けば、氣長に根よく待つてゐて、さてその女が戻つて來ると、いつ迄でも飽きずにしやべつてゐるのであるが、何を語つてゐるのやら話聲が隣りの席へ洩れて來ることはめつたにない。彼等は低い優しい聲で、それも極めて言葉少なに、長い間を置いてポツンポツンと云ふ。全く、あんなことをしてゐて何が楽しみなんだか、さうしていつたい何をそんなに話すことがあるんだか、私なんぞには氣が知れないが、あれでなか／＼油斷のならない丹次郎が揃つてゐて、隙があらば小色の一つも稼がうと云ふ連中なんだから驚く。だが考へてみるが、もと／＼カフエーと云ふものが、吳越同舟、入れ込みの仕組みであるから、吉原の假宅かりたくよりはまだ落ち着きがない譯なんだが、そんな所でハタのお客に氣をかねながら二時間も三時間も「微吟低酌」しようと思ふ、その料簡が抑も甚だシミツタレたアタジケナイ話で、何しろ安直なこと、云つたら、昔の四疊半の通人なんかは顔負けしてしまふ。東京人と云ふものが、それも血氣盛んな若い者の心意氣が、かうまでイヂ／＼と、小さくイヂケて、ヒネクレて、小生意氣になつて來たかと思ふと、實にイヤになつてしまふのであるが、しかし此のことは、單に青年ばかりではない、市民全體の氣風がさう云ふ風にコセ／＼とイヂケて

來つゝあるやうに見える。

江戸歌舞伎の十八番、市川宗家の荒事と云つたら、暫にしろ、矢の根にしろ、助六にしろ、豪快を極めたものであるが、あゝ云ふおほまかな、桁外れな猪突心がなくなつて、退嬰的にち／＼こまつたものが今の東京人なのである。或る大阪人が話したことに、去る大正十一年頃、震災の少し前時分に、自分はたび／＼商用で上京したことがあつたが、なせか知らぬがどうも東京人の顔色が悪い、皆榮養不良のやうな青い色をしてゐて元氣がないので、此れは何か近いうちに東京が全滅するやうな變事があるのではないかと云ふやうな氣がした。それがあゝ云ふ形で來るとは思はなかつたが、自分には何かしらそんな豫覺があつたと云ふ。蓋し東京人の顔色に潑刺とした感じのないことは此の大阪人の説の通りであつて、私などには、震災後の今日もそれが一向改まつてゐないやうに思はれる。尤も復興後の市街の殷賑な状況や、あの新議會の建物を始めとして諸官衙諸ビルディングの壯觀を見れば、此の都が我が大帝國の腦髓であり、此處から東亞の運命を擔ふ偉大な力が發揮されつゝあることは否定すべくもないけれども、さう云ふ國家的活動の樞軸を握つてゐる政治家や實業家や軍人などは、實際は地方人であつて、東京人ではないのである。此の人々が功成り名遂げて、或は國家から恩賞を頂き、或は銀行會社から株や慰勞金を貰ひ、

相當の資産を作つて引退した後、二代目三代目あたりの當主になつてから、やう／＼東京人になる。例へば先年死んだ小村欣一侯の如きはその典型的な一人であつて、侯は自ら帝国外交の前線に立つて活動してはをられたが、外交上どう云ふ功績を残されたか、乃父壽太郎侯の赫赫たる偉勳に蔽はれて目立たないのかも知れないが、私などは一向侯の功勞と云ふものを聞かされたことがない。それよりもあの侯は「粹侯爵」と云はれて小説家や俳優の世話を焼き、國民文藝協會とか云ふものを作つて藝術家を奨励することが好きであつて、本職の外交官よりもその方が性に合つてゐるらしく見えた。但し生半可なまはんかの役人なんか道樂半分に世話を焼いたつて、少しも藝術の爲めになりはしないんだが、東京人にはあつた。あ云ふ風なお坊つちやん育ちの「譯知り」が多いのである。彼等は食ふに困らないから、セチ辛い社會の競争に打ち勝つて立身しようなどと云ふ奮闘心は持ち合はせない、まあまあ自分一代の間は樂に暮らして行けるんだから、出来るだけ呑氣に、うまいものを食つたり面白いものを見たりして生きて行く方が賢明だと云ふ享樂主義者が揃つてゐて、學校なんぞも始めからその考へで、美學をやるとか哲學をやるとか、音樂學校や美術學校を出るとか云ふ風に、多くは文學藝術に關係のある修行をし、學校を出てからはその學問を役に立て、小遣ひ取りの閑職に就くのもあれば、これと云ふ定職もなくのら／＼してゐるのもあり、小村侯の如く本職をそつち除けにして餘計なオセツカイをするのもある。私の云ふ東京の智識階級とは實にかう云ふ連中が醸し出す一種の零圍氣を指すのであつて、彼等

は何處か肌合が藝術家風であるけれども、もと／＼一つの藝術なり學問なりに生涯を捧げる程の熱意があるのではないから、色々なことに首を突つ込んで聞いた風な口を利くに過ぎない。かう云ふ手合がいかにか帝都に多いかと云ふことは、歌舞伎、東劇、新橋演舞場等の、都下一流の劇場へ行つて、幕合に廊下をぶらついてみると分る。年恰好は三十五六歳から五十五六歳までの、中年もしくは老年の紳士で、大概は黒つばい濫い和服を着てゐるが、或る者はその服の下に英國製の駱駝のシャツを覗かせて、葉卷なんかを咬へてゐる、或る者は着流しのまゝ不精つたらしく懷ろ手をして、さも／＼遊惰の民と云ふ風體で廊下を行つたり來たりしてゐる、或る者は袴を着けてゐるが、どう云ふものかその袴が着流しよりは一層ふしだらに下品に見える。それと云ふのが、近頃の絹物は上等の品になればなる程しな／＼してゐて腰が弱く、二三度着ると直きに疲れてよれ／＼になるので、やう／＼體に馴れて來た時分には、へんにぞろりとし過ぎて、遊治郎然として、見たところが頗る品が悪い。分けて袴は昔の仙臺平のやうにシャンと突つ張つてゐてこそ立派であるのに、近頃の品は居職ぢやくの職人や草鞋屋の親爺が膝へ嵌めてゐる袋のやうなもので、前掛け代りの上ツ張りに過ぎないんだから、どうかすると却つて人體が卑しく見える。そこへ持つて來て此の連中は、必ず紺足袋に草履を穿いてゐる。尤も劇場の中だから下駄を穿いてゐる奴もないが、あのぞろつとしたなりで、太い柱や厚い壁で幾何學的に仕切られた近代建築の廊下の間を徘徊しながら、絨毯の上を音もなく歩いてゐる姿は、當人はいゝ心持ちさうだ

けれども、地廻りの兄哥が戸惑ひをしたやうで、あんまり映りのいゝものでない。で、何處の劇場へ行つてみても、さう云ふのがいつもろ／＼してゐるんだが、彼等は孰れも身なりや人柄が似たり寄つたりでありながら、行く度毎に目新しい顔に出遇ふところを見ると、餘程此のタイプに屬する人間が多いに違ひない。關西にも遊惰の民はあるけれども、此の方は在來の茶人型かぼんち型に極まつてゐて、單純でハツキリしてゐるが、東京の近代的遊民なるものは、複雑で、不鮮明で、兩棲動物的胡算臭さを漂はしてゐて、まことに帝都獨特の產物であり、決して京都や大阪では見ることの出來ない種族である。彼等の職業は、服裝からは判斷が付かない。商店の旦那のやうでもあれば華族の野良息子のやうでもあり、退職官吏のやうでもあれば私立大學の講師のやうでもあり、演藝記者のやうでもあれば藝人のやうでもある。要するに彼等は半藝人半學者半通人半批評家なのである。ところで此の人達が、皆申し合せたやうに顔色が悪い。血色がすぐれない。皮膚が病人のやうに弾力がなくて、どす黒く濁つた、青褪めた色をしてゐる。私は此れには大いに原因があるのだと思ふが、彼等は表面裕福ではあるけれども、全く親譲りの財産に依頼してゐるので、さなきだに中産階級が成り立ちにく／＼なつてゐる今の世の中では、内心に將來の不安がある。大阪人の如く進んで金儲けに努めるか、退いて吝嗇な生計を立てるか、孰方にすればいいのだが、見え坊で、贅澤で、生意氣な彼等は、眞つ黒になつて働くのも馬鹿馬鹿しいし、爪に灯をともして暮らす氣にもなれないし、ひたすら生活をエンジョイ

せんとする。されば彼等の臺所へ這入つて見ると、大概は身分不相應な、年に少しづつ財産を減らして行くやうな無謀な暮らし方をしてゐる。さうしてゐれば老後に至つて食ふに困るやうになることは分つてゐながら、彼等にはそれが止められない。彼等は江戸人特有の呑氣と恬淡を以てその日その日を送つて行き、一向そんなことは苦にならない顔をしてゐるが、一念此處に思ひ及ぶと、ぞつと襟元が寒くなるやうな折もないではあるまい。そこで勢ひ利那主義、姑息主義、虛無主義になつて、一日の安きを貪りながらいよ／＼無成算に金を使ふ。昔の江戸つ兒が宵越しの錢を持たないのは、進取的積極的な心意氣から出たのであるが、今日の東京人が金錢を浪費する裏面には、明日はどうなる身の上か分らないと云ふ亡國的な悲哀がある。私はそれが、無意識のうちに彼等の顔色に現はれて、何となく意氣銷沈してゐるやうに見えるのだと思ふ。しかし私はよく知つてゐる、彼等は薄っぺらではあるが、氣障も見え坊もたゞ上ツ面だけのことで、一人も惡人はゐないのである。みんな正直な、腹のキレイな、氣の弱い人達ばかりなのである。彼等のうちには年來の舊友も多いことだし、第一私にしてからが、據ん所なく筆一本に取り縋つて口を濕ほしてはゐるものゝ、もし親譲りの財産があつたら彼等と同じタイプの一人になつたであらうことを思へば、さら／＼惡口なんぞ云へた義理ではないけれども、でも他人事とは思へないだけに、何だか一層悲しいのである。大阪の落語に、上方の職人が江戸つ兒の職人をおだて上げて金を使はせ、蔭で舌を出す話があつて、春團治にやらせると、關東者のおめで

たい輕薄なところと、關西人のノロマなやうで抜け目のない、腹のすわつたしぶといところとが對照の妙を極めるさうだが、考へてみると、實際笑ひごとではない、近代型の東京人もやがては皆私の親父と同じやうな敗殘の江戸つ兒になるのではないか。それが私の杞憂であるならいゝけれども、此方の人のすることを見ると、數十萬の資産のある者が、東京ならば二三百圓の月給取りのやうな暮らしをしてゐる。利息で食つてゐる人などはつましい上にもつましくして、僅かづつでも恒産が殖えて行くやうに心がけ、映畫や芝居を見るのにも少し入場料が高いと二等や三等で辛抱する。東京の有閑階級がしてゐるやうな享樂生活は、此方では餘程の金満家のすることである。能樂や歌舞伎劇が東京を除くあらゆる都會では既に衰微しつゝあるのに、ひとり帝都に於いてのみ今も隆盛を誇つてゐるのは、斯くの如き浪費家の市民のあるお蔭であり、我々の小説を買つてくれるお得意様も彼等が大部分であるとする、藝術家のためにはかう云ふ人達の存在が必要な譯であるが、上方の資本が進出して、何千人を收容するやうな大劇場が幾棟も殖え、それらが孰れも繁昌するのを見るにつけても、その反對に彼等の懐ろがますます／＼瘦せ細るやうに思へてならない。彼等がイキだとかオツだとかモダンだとかシイクだとか云つて嬉しがつてゐる間に、甘い汁は利口な地方人に吸はれてしまつて、彼等はだん／＼貧乏する。斯くの如くにして、二三十年の後には今の有閑階級は再び没落してしまひ、新しく入り込んだ地方人が、やがて第二世第三世の東京人となるのであらう。それを思へば此の都に落ち着きのな

いのも宜なる哉である。

さて、さう云ふ風に顔色の悪い東京人を一方に置いて、復興後の帝都のブロックを填めてゐる摩天樓の景觀を眺めると、私は一種不思議な感を催すのである。と云ふのは、地震のお蔭で町は確かに立派になつたが、そのために市民の不健康な血色と吹けば飛ぶやうな薄ッぺらさが、餘計目に立つやうになつた。それでなくても近代都市の蜂窩式大建築は、人間を蟻のやうに小さくしつゝあるのに、元來が安手で貧弱な彼等は、上へ上へと聳えて行く大百貨店や大ビルディングに壓し潰されて、その青い顔が一層青く、細い聲が一層細くなりつゝある。昔の詩人は「國破れて山河在り」と歌つたが、今の東京はコンクリートの橋や道路が徒らに堅牢にして人は路上を舞つて行く紙屑の如く、と云つたやうな趣がないでもない。私は過日の「陰翳禮讚」にもそのことを書いたが、いつたい日本人の皮膚や衣服には材木の生地を露にした在來の建築が一番適してゐるのであつて、石やセメントのかたまりを積み上げケバ／＼しいタイルや煉瓦で化粧した大廈高樓は、やつぱりそれを發明した國民、大柄で骨太で、バターやビフテキを食つて幅の廣い聲を出す人種には向くけれども、われ／＼のやうなお茶漬式國民には不向きである。されば東京人の顔色の悪いのは、彼等が内心に抱いてゐる悩みのせゐもあらうけれども、一つには西洋化した街衢との對照

から、尙更さう見えるのではないであらうか。尤も若いサラリーマンたちが働いてゐる商業区域では、近代式オフィスの設備と彼等の背廣姿とがよく調和して、活氣が溢れてゐないでもないが、銀座や丸ビルの賣店街に下駄や草履を引きずつて歩いてゐる遊惰の民のだらしなさを見ると、復興局の役人は東京人をいやが上にも影が薄く、情なく、安ッぽく見せようと云ふ趣意で今の新市街を設計したのではないのかと、恨めしい氣がするのである。特に私はそれが婦人の容姿の上に多大の關係があることを一言したい。と云ふのは、人はよく東京の町には美人が多いと云ふ。大阪の心齋橋や京都の京極あたりをぶらついても此れはと思ふのはめつたに打つからないけれども、銀座通りを歩いてゐると、覺えず振り返つて見たいやうな洋装和装さま／＼の美人が通る、何と云つても流石は東京だと云ふ。私もそれには同感で、京大阪にも美しい夫人や令嬢がゐない譯ではないのだが、此方の人は未だに深窓の佳人式で漫然と外をほつき歩くやうなことをしない、従つて、美人が街頭を往來することは東京の特色であるけれども、しかし私に云はせると、彼女たちの餘りにもきやしやな衣裳や體格が、周圍の建築物の重々しいスタッフに打ち負かされてゐる場合が多い。例へば百貨店の階段の跳り場で、一人のモガに行き遇ふとして、若し彼女が和服を着てゐるとしたら、柱や欄干の逞ましい太さに比べて、その錦紗だか御召だかの裾や袂が餘りにひら／＼と頼りなく、輕きに失するを感ずるであらう。彼女は衣裳の好みに於いて、一點の隙もあらぬのではない、着こなしも上手なら、色の選擇も氣が利い

てゐる、眼の配り方、足の運び方、ハンドバッグの持ち方等、すべての舉措に遺憾がなく、その上容貌も端麗である、が、彼女の小さなフェルト草履が踏んでゐる床の頑丈さと、彼女の背後にそ／＼立つ壁の厚さへ眼をやる時に、彼女と云ふものゝ存在が聊か稀薄になることを否み難い。その感じは洋装の時も同様であつて、此の場合には纏つてゐる絹物の地質の輕さよりも、彼女の肉體そのものゝ分量的僅少さが目立つ。近頃の東京の婦人は亞米利加の田舎なんぞからやつて來る觀光團の連中よりはよつほど洋服が身に着いて來て、中には巴里や紐育の本場へ出しても恥かしくないやうなのがあり、四肢の均整も取れてゐるが、惜しいことには餘り小柄で充足感が缺けてゐる。現今は瘦せぎすの美人が世界の流行であるけれども、瘦せたと云つても西洋人の方はもと／＼上せいがあるのだし、骨組みもしつかりしてゐれば、肩とか胸とか臀とかの要所々は適當に充實して、手ごたへのある弾力性を示してゐるが、日本の女にはそれが乏しい。小さな部屋の、きやしやな家具の中ではどうやら胡麻化しが利くけれども、巨大な建築物の中へ入れると、彼女の持つてゐるほんの僅かな肉體感が悉く壓倒されて、有るか無きかになつてしまふ。私はかね／＼日本の女の手の美しさは西洋人以上であると思つてゐるが、さう云ふ場所で見ると、その掌が木の葉のやうに薄く、見だてがないので、寧ろ一種の憐憫と輕蔑に似たものを感じ。脚線美などと云ふものも、あゝ細々として、今にも消えてしまひさうでは、さつぱり性的魅惑がない。かうしてみると、矢張り周圍の大きさや堅固さと適當の釣り合ひを保つ

ことが必要で、さうでなかつたら美人であればあるほど滑稽な、哀れ果敢ない、コマシヤクレた印象を興へる。で、大東京市の近代的景觀は立派は立派であるけれども、そこにさまよふ男女の群をいよ／＼淋しく、味氣なく、オツチヨコチヨイに見せてゐるやうに思ふのであるが、さう感じるのは私一人だけであらうか。

以上私は、故郷の人の憎しみを買ふのを氣にしながら、随分勝手な悪口を書いた。多分私の友人の中にさへ、これを読んで怒つてゐる人があるであらうが、しかし元來調子に乗つて心にもない毒舌を弄することは東京人の通性であるから、「又谷崎が始めやがつた」ぐらゐなところで笑つて受け取つてくれる人もないではあるまい。何にしても私は、上に述べたやうな理由で東京が嫌ひなのであるが、それは或は一面に於いて今も愛着を覺えつゝある證據かも知れない。つまり私の悪口は、未曾有の天災と不躰な近代文明とに自分の故郷を荒らされてしまひ、親戚故舊を亡ぼされてしまつた人間の怨み言であるかも知れない。兎にも角にも、私には生れ故郷の人々のお羽打ち枯らしたみじめな様子ばかりが眼について、市街の面目の一新されたことなどが、嬉しいよりは却つて遣る瀬ない涙を誘ふ。私は帝都の空を限る嚴しい穹窿や屹然たる臺を眺めながら、「あゝ、素晴らしい都會になつたものだなあ」と思ふと同時に、自分の町がいつしか他人に占領されて、彼等の氣儘に改

造されてしまつたやうな不満を抱く。事實、近頃はあの都の青年男女が用ひてゐる言語でさへも、たまに出かけて行く私には、聞き馴れぬ他國の言葉のやうな耳新しさといふガサツさと、そつちなさを以て響く。私は既に「大阪及び大阪人」の中で東西の言語を比較したことがあるから、再びそのことをくどくどは云ふまいが、それにしてもあの持ち前のカスカスした、乾いた聲で云ふ言葉が、何とまあ忙しく、そ／＼つかしく、蕪雜になつたことであらう。嘗て岡鬼太郎氏は、姉のことを「おねえさま」と云ふ東京語はない、「ねえさん」と云ふか「おあねえさま」と云ふのが本當だと云はれたが、私の學生時分までは正しくその通りであつた。兄のことも同様に「おにいさま」とは云はなかつた、「にいさん」と云ふか「おあにいさま」と云つた。パパやママは論外として、「おとうさん」や「おかあさん」なども使はなかつた、私共は父を「おとつあん」母を「おツかさん」と呼びならはし、成人の後もその稱呼を用ひたので、明治期の東京人と昭和の東京人との間には、かう云ふ些細な言葉遣ひの末に迄も明瞭な區別の存することを知るのである。思ふに「おとうさま」「おにいさま」式の呼び方は山の手の官員さんの家庭あたりから流行り出して、いつしか純東京の下町言葉を驅逐するやうになつたのであらう。細君のことを「奥さん」と云ふのも矢張り山の手言葉であつて、下町ではどんな大店の女房でも「おかみさん」と呼ばれた。そしてわれ／＼は中學の時分に、「僕が女房を貰つたら、おかみさんと云つて貰ひたいね、奥さんはイヤだね」などと下町つ兒の仲間同士で云ひ合つたものだが、左様に下町

の人間は、山の手言葉を野暮ツたらしい、田舎臭い、勿體ぶつた云ひ方として輕蔑してゐたのである。だが今日ではもうそんな馬鹿なことを云ふ者はゐなくなり、「おかみさん」と呼ばれるのは客商賣の女將に限られ、「奥さん」が普通になつてしまつた。言語の變遷はいつの時代のいかなる土地にもあることだから、それを兎や角云つたところで始まらないが、でも私にはさう云ふことが他國の人に自分の故郷を乗つ取られたと云ふ感をいよ／＼深くさせるのである。成る程今の東京辯は、昔に比べれば輕快味と纖細味を増し、語彙も豊富に、表現も自由になつたであらう。が、イキがらうとして却つて田舎臭くなり、智識階級ぶつて却つて品が悪くなつた嫌ひがないか。特に私の云ひたいことは女が男の言葉を使つたり、翻譯小説や新聞雜誌に出てゐる新語をいち早く應用したりするのは、いつの場合にも必ず地方出の人間であつて、眞の都會人は容易にさう云ふ突飛な眞似をしないものである。巴里あたりでも畫壇に新しい運動を起すのは常に外國人系の畫家達であつて、眞の巴里つ兒は傳統に對する執着が強く、なか／＼流行に動かされないと云ふ。早い話が「銀ブラ」などと云つて嬉しがるのは田舎者の證據であつて、東京人なら「一寸銀ブラをして來る」とか云ふ。その外アジだのデマだのオルグだのと云ふ外國人にも通用しない外國語の略稱は、恐らく無産派の作家や新聞記者などが擴めたのであらうが、あゝ云ふ風なそそつかしい、氣が利いてゐるやうでイケぞんざいな云ひ廻しの流行ることは、どのくらゐ

東京を居心地の悪い、ソワ／＼した、慌しい氣分にさせてゐるか知れない。元來都會の人間は言葉が純粹で正確で典雅であることを誇りとし、こなれた、角かどの除れた、行き届いた表現をするやうに心がけるのであつて、東京語が標準語とされたのもさう云ふ長所があつたからだが、今日の如く亂脈に、田舎臭くなつてしまつては、何處に標準語の品位と權威があるかと云ひたい。取り分け私に田舎臭く響くのは、「僕そんなこと知らない」とか「君あの本讀んだことある」とか云ふ風なテニヲハを略す云ひ方である。實にたび／＼云ふことだが、從來東京語はテニヲハや前置詞の使ひ方に於いて特に周到だつたものだ。市井の町人、車夫馬丁と雖も「己あ」とか「彼奴あ」とか「あッしあ」とか云ふ風に主格を現はす「ハ」を入れた。喧嘩の時でも「何を」(ナニヨ)と云つた。「てめへ」とか「おめへ」とか云ふ二人稱代名詞には往々「ハ」が略されることがあるが、一人稱や三人稱では大概の場合口の内でちやんとそれを云つてゐる。然るに近來は實地の會話のみならず、活字にしてまでもテニヲハを省く。あれでは追ひ／＼日本國中の青年男女があゝの眞似をして、支那人の片言のやうな日本語を使ひ出すであらう。さう云へば、昔は洒落や警句の類が花柳界から流行り出したが、今はカフェーから流行り出す。だから下品で、土臭くつて、こせついでゐるのも無理はないが、職業の區別がなくなつたやうに言語の區別もなくなつた現在、それが忽ち全階級を風靡して、華族の夫人令嬢が遊ばせ言葉と女給言葉をチャンポンに使う。ついでながら、もう一つ耳障りでないのは、近頃の奥さん連が使う「さう

づざんす」「さうづざいます」と云ふ、「でござんす」「でございます」が約まつたアレである。文字で示すと「づざんす」「づざいます」とより外に書きやうがないが、實際は「づ」と「ざ」のつながりを曖昧にボカして二音か一音か分からないやうに、器用に噛み殺して云ふ。あれは恐らく山の手言葉が一般化したのに違ひないが、昔の「廓言葉」のざますのやうに色氣があるのでもない、何か地道に發音するのを面倒臭がつてゐるやうな、セツカチな、嗜みのない感じを受ける。而も一層イヤなことには、それが所謂有閑マダムのダラシのない、荒んだ人柄にびつたり嵌まつてゐるのである。これなんぞも矢張り田舎が這入つて來たせゐで、昔の人は廻りくどくても「さうでございます」と、ちやんと鮮やかに律義に云つた、さうしてそれがゴゴチなく響かないやうに、圓滑に、流暢に、齒切れよく發音するのを自慢にしたので、こんな工合にもぐ／＼と胡麻化したたりなんぞしなかつた。それにつけても氣が付くことは、近來の東京人は非常に鼻聲を使ふことが多くなつてゐる。私はこれにも何か理由があるのだと思ふ。もと／＼東京語と云ふものは一語々にアクセントがなく、全體の調子に抑揚が乏しく、なだらかなのを特色としたけれども、しかし昔はなだらかな中にも張りがあつたのではないか。講談や落語に出て來る江戸つ兒は、喧嘩の時に鋭い甲聲でタンカを切る。彼等は大阪人のやうな太いドス聲は出さないが頭の脳天から高い甲走つた聲を發して、ペラ／＼とまくし立てる。然るに今の東京人はさう云ふ氣魄がなくなつたので言葉までが氣の抜けたビールのやうになつたのである。彼等はいかなる場

合にも腹の底から聲を出さない、いつも鼻の先で軽く發音する。従つて彼等の話し聲は關西人に比べると低音であるのを特長とする。これは女子よりも男子に於いて殊に然りで、彼等が洒落や穿ちを云ふ時は、努めて曖昧に、もぐ／＼と鼻へ抜いてしまつて、わざと田舎者なんぞには通じないやうに、オヒヤラカスやうに云ふ。私は今、かう書いて來てはつきり思ひ當るのであるが、東京人の影が薄いこと、彼等が何となく廢類的に、疲れたやうに見えることの有力な原因の一つは、全くさう云ふ話し聲と話し方にあるのだ。彼等は血色に於いてもさうであるが、就中發音と言葉遣ひに於いて生氣がない。要するにあの空ツ風の吹く町の中でうすら寒さうな顔をしながら、カサ／＼に乾いた、蚊の鳴くやうに細い、世にも不景氣な聲を出してしやべつてゐるのが、今の東京人なのである。

○
終りに臨んで、私は中央公論の讀者諸君に申し上げたい、諸君のうちにはまだ東京を見たことのない青年男女が定めし少くないことであらう。しかし諸君は、小説家やジャーナリストの筆先に迷つて徒らに帝都の華美に憧れてはならない。われ／＼の國の固有の傳統と文明とは、東京よりも却つて諸君の郷土に於いて發見される。東京にあるものは根底の淺い外來の文化か、たか／＼三百年來の江戸趣味の殘滓に過ぎない。東京は西洋人に見せるための玄關であつて、我が帝國を今日あらしめた偉大な力は、諸君の郷土に存するのだ。

私は何故地方の人が一にも二にも東京を慕ひ、偏へに帝都の風を學ばんとするのか、その理由を解するに苦しむ。例へば大阪のやうな大都會の青年男女でさへ東京と云ふと何か非常にいゝ所のやうに思ひ、何事も東京の方が上だと考へて、自分たちの言語や習慣を恥ぢるやうな傾きがあるのは、彼等をさう云ふ風に卑下させたのは、誰の罪か。近頃の爲政家はしばしば農村の荒廢を憂へ、地方の振興を口にしているが、現今の如く帝都を壯大にし、諸般の設備を首府に集中して田舎を衰微させた一半の責任は、彼等政治家にあるのではないか。私は地方の父兄たちが子弟を東京へ留學させる利害についても、多大の疑問を持つてゐる。成る程東京には立派な教授や學校があり、いろ／＼の教育機關が完備してゐるであらう。が、前途有爲の青年を驅つて二世三世の東京人たらしめ、小利口で猪口才で影の薄いオツチヨコチヨイたらしめることは如何であらうか。返す返すも東京は消費者の都、享樂主義者の都であつて、覇氣に富む男子の志を伸ばす土地柄でない。但し、文學藝術だけはその限りでないと言ふ人もあらうが、私はそれにも異議がある。大體われ／＼の文學が輕佻で薄ッぺらなのは一に東京を中心とし、東京以外に文壇なしと云ふ先入主から、あらゆる文學青年が東京に於ける一流の作家や文學雜誌の模倣を事とするからであつて、その風潮を打破するには、眞に日本の土から生れる地方の文學を起すより外はない。ついでには、いつも思ふのであるが、今日は同人雜誌の洪水時代で、毎月私の手元へも夥しい小冊子が寄贈される。實にその數と種類とは大變なもので、印刷費と紙の代だけでもち

つとやそつとの濫費ではなく、まことに勿體ない話だが、扱それらの雜誌を見ると、殆んど大部分が東京の出版であり、孰れも此れも皆同じやうに東京人の感覺を以て物を見たり書いたりしてゐる。彼等のうちにも多少の黨派別があり、それ／＼の主張があるのではあらうが、私なんぞから見ると、彼等は悉く東京のインテリゲンチヤ臭味に統一されてゐる。彼等の關心は、東京の文化と東京を通じて輸入される外來思想とのみに存して、自分たちの故郷の天地山川や人情風俗は、眼中にないかの如くである。で、もしもこれらの文學青年があゝ云ふ勿體ないことをする暇があつたら、東京へ出て互ひに似たり寄つたりの黨派を作ること止め、故郷に於いて同志を集め小さいながらも機關雜誌を發行して、異色ある郷土文學を起したらばどうであらうか。今日の都會中心主義を矯め、地方の人心をその土に安んせしめるには、文學藝術が先驅を勤めることが何よりも有效なのではないか。

「つゆのあとさき」を讀む

硯友社に依つて代表される明治中葉頃の文學の傳統は、その後引きつづいて起つた自然主義その他の主張に取つて代られて、今では殆んどその名残を留めない。當時の作家たる露伴、鏡花、秋聲の諸氏は今日も健在であるけれども、秋聲氏はもともと硯友社風の肌合の人でなく、早くより自然主義に轉じた。鏡花氏は紅葉一門の中にあつて最初より独自の藝術境を持つてゐた人であり、今日も猶その境地を固く守つてをられるが、しかし忌憚なく云ふと、紅葉の遺鉢を繼いだ作家とは云ひ難い。氏は疑ひもなく故山人門下の駿足ではあるが、あまりに氏自身の特色が濃い。此の師匠と弟子との作品は、文學史上に於いて互ひに光りを争ふことが出来るとしても、兩作家の素質、その藝術上の境地は餘程違ふと思ふ。一と口に云へば紅葉は寫實的、鏡花氏は浪漫的である。露伴氏も亦その意味に於いて硯友社風でない。氏の哲學的な、主觀的な作風は、夙に紅葉の客觀的な作風に對立してゐたものであつた。

私は今、「硯友社の傳統」と云ひ、「紅葉の遺鉢」と云つたが、それが何を意味するかを茲で一應はつきりさせて置かうと思ふ。蓋し、小説と云ふ文學の一形式が、明治以後の日本の文壇に於いて他の何物よりも重要な位置を占めるやうになつたのは、云ふ迄もなく西洋文學の影響であるけれども、東洋にも昔から此の形式がなかつたのではない。われわれの遠い祖先は、既に平安朝の頃から、當時の世態人情を表はすのに最も都合のいいやうな架空の人物を活躍せしめて、それらの人間の生活状態を寫すと共に、彼等が住んでゐた時代の姿、世のありさまを、哀れ深く、こまごまと再現する技術を得てゐた。それらの物語の特长は、篇中に數人もしくは數十人の人物を登場せしめ、彼等を互ひに關聯させ會話させるけれども、作者自身は常に隠れてゐて、決して主觀を現はさない。或る一人物の言葉を借りて作者の思想なり人生觀なりを吐露すると云ふことも殆んどない。今日の所謂テーマなどと云ふものもない。作者は恰も曇りのない鏡のやうに、それ自身は何等の色彩も先入主も持たないで、その前を通り過ぎるさまざまの物象を有るが儘に映してみせる。だから、従つて、そのいろいろの人物の心理にまで餘り深く立ち入るやうなこともめつたにならぬ。十人十色の人間が入れ代り立ち代り場面に現はれて、思ひ思ひに動いたり語つたりするうちに、次ぎ次ぎに事件が湧き上り、發展し、幾變遷を重ねるところに、移り行く世の姿が描かれる。まあ云つて見れば一種の風俗史、——文章に綴つた繪卷物であるが、而も傑れた作者は純客觀的描寫の手法を嚴守しながら、篇中の人物の動靜の模様や情景等を立

體的に浮き上らせ、己れは何も意見を述べないで人生の甘味、苦味、酸味を讀者に教へ、讀者をして自らそれを經驗したと同じ様な感慨を催させ、讀後の記憶が自己の體験の記憶の如く折に觸れてしばしば想ひ出されるやうにさせ、それだけ讀者の思想や感情を豊富にし、複雑にする。

西洋でもかう云ふ作風があり、純客觀的作家の方が主觀的傾向の作家よりも偉大だとされた時代があるらしい。が、東洋の小説や物語と云ふものは、從來殆んど皆此れであつた。拙いものは低級な人形芝居たるに止まり、徒らに事件がごちやごちやしてうるさいばかりだが、その優秀なものになると、社會相、時勢相、その中に生きる個々の人間の性格、運命等を暗示し、或ひは讀む者をその境地に引き入れる。いづれにしても、それらは作者の主觀を交へない説話であつて、時に依ると、客觀的態度があまり極端な結果、作者がいつたい何んの目的、何んの興味で、こんな細々と、長々と、架空の事件をまことしやかに物語つてゐるのか、ちよつと底の知れない薄氣味悪さを覺えさせる。善惡美醜の人人を等しく公平に取り扱つて何等の同情も批判も與へず、何處迄行つても唯整然たる描寫があるばかりなので、作者がへんに冷徹なニヒリストのやうに見えて來る。此處まで徹底したものは日本には割りに少いが、鷗外の「雁」などはややそれに近い。私はあまり支那小説を澤山讀んでゐないので、たしかなことは云へないけれども、支那にはさう云ふ作品が多いのではあるまいか、少くとも「金瓶梅」はその代表的なものだと思ふ。「紅樓夢」は全卷を

通讀してゐないが、これも恐らくはさうであらう。

日本でも西鶴の浮世草子などは、やはり作者の客觀の鏡が冴え返つてゐるところに虚無的な冷酷さがないでもないが、しかし冷めたいと云つてもその中に多少の優しみがある。閑寂なうちに何かしら幽艶な情操の流れのあるのが感ぜられる。つまり、われわれの國の藝術家は、いかなる時でもさびとか風雅とか云ふ嗜みを捨てなかつた。小説中に姪蕩なことやむごたらしいことを描いても、毒々しい感じやあくどい感じを與へないやうに、何處までも「いろけ」を失はないやうに、手際よく取り扱つた。此れが、遠く源氏物語から絲を引く日本の寫實小説の特長であつて、明治期に於ける紅葉山人の作物は、西鶴以後に現はれた此の方面の一つの頂點であらうと思ふ。山人の「二人妻」や「三人妻」の如きはその模範的なものだと思つていい。就中「二人妻」はちやうど私の母などが娘であつた頃の時勢相を寫し、二人の姉妹とそれを取り巻く人人を生き生きと動かしてゐる點で、先づ完璧に近い。當時高山樗牛などは、「山人の作物には哲學がない」と云つて攻撃したものだつた。今ならさしづめイデオロギーがないと云はれる所であらうが、實はなまじつかの哲學がないために、山人の態度が何處までも白紙であり、純客觀的であるために、その作品が長く後世に生きる價值を持つのである。但し山人の書き方は、客觀的であるけれども、冷酷と

云ふ程でない。「二人妻」などには日本の古典に特有な「物の哀れ」がしみじみと出てゐる。「三人妻」の方はこれに比べると規模も大きく、登場人物も多く、ずつと花やかな世界になるが、ゾラなどに書かしたら定めし毒々しいものになりさうなところを、在來の傳統に背かない範圍で、優雅に、上品に扱つてゐる。

佛蘭西の自然主義は知らないが、日本の自然主義の運動は、此の上品な寫實主義にあきたらないで起つたもので、これは確かに意義のある運動であつた。紅葉の作物も出來のいいのはいいけれども、あまり傳統に因はれた結果、醜惡な場面、露骨な場面をことさらに回避して、ひたすら優美に、綺麗事に走る嫌ひがあり、ただ常識的な上ツ面な世間しか見てゐないと云ふ傾きがあつた。紅葉はまだいいとしても、紅葉を學んだ硯友社風の作家たちは、しまひには全く此の弊害に墮して、而もそれに安んじてゐた。故内田魯庵翁の話に、翁はその頃英譯の「罪と罰」を讀んで、西洋の小説の複雑で深みのあるのに驚き入つてしまひ、紅葉などは實に足元にも及ばないと思つたさうだが、當時の翁の驚きは尤もの次第で、いかにもさう感じたことであらう。兎に角日本の自然主義はあまり大した作物を生まなかつたが、硯友社のマンネリズムを掃蕩した點に於いて非常な功績があつた。鷗外にしろ、漱石にしろ、荷風にしろ、又後輩のわれわれにしろ、自然主義ならざる者も何等かの形で多少とも影響を受けた。今にして思へば、あの運動は、日本の文壇が一度はどうしても通過しなければならぬものであつた。

さて、前置が大變長くなつたが、私は最近の荷風氏の小説「つゆのあとさき」を讀んで、計らずも以上に述べたやうなことを考へさせられた。なせなら、此の小説は近頃珍しくも純客觀的描寫を以て一貫された、何んの目的も、何んの主張もそれ自身のうちに含んでゐない冷めた寫實的作品だからである。もちろん此の小説以外にも、客觀的描寫の外見を備へた作品は多いことであらうが、此の小説に於けるが如く、作者が完全にその作品の世界から遊離し切つてゐるものは、近來あまり見當らない。志賀氏、里見氏、久保田氏、佐藤氏などのものには、どんな客觀的な作品の場合でも、何處かに作者の自我の現はれがあり、行文の間に、藝術的感興と云ふか、緊張と云ふか、燃焼と云ふか、——兎も角も作者を駆り立ててゐるところの創作熱のあることが感ぜられる。然るに荷風氏の此の作品にはそんなものが少しもない。作者は殆んど何んの感興もなしに、いやいやながら、時々五行十行ぐらゐづつ書き足して行つたかと思はれる程冷靜である。さうかと云つて、此の小説は、往年の秋聲氏や白鳥氏などの自然主義的作品のやうでもない。これを日本の所謂自然主義作品とするには、あまりに場面々々の變化があり過ぎ、筋が面白く出來過ぎてゐる。それに、荷風氏は昔から色彩の豊富な作家であつたが、老來その筆が枯淡になつても、猶なまめかしい女主人公の言動や、東京と云ふ大都會の街

上に於ける四季の風物を敘するに方つては、自然主義の作家に見られない感覺の優雅さがある。たとへば(五)に於ける清岡老人の隱宅の所で、

麥門冬に縁を取つた門内の小徑を中にして片側には梅、栗、柿、棗などの果樹が鬱然と生茂り、片側には孟宗竹が林をなしてゐる間から、其の筍が勢よく伸びて眞青な若竹になりかけ、古い竹の枝からは細い葉がひらひら絶間なく飛び散つてゐる。栗の木には強い匂の花が咲き、柿の若葉は楓にも優つて今が丁度新緑の最も軟かな色を示した時である。樹々の梢から漏れ落ちる日の光が厚い苔の上にきらきらと揺れ動くにつれて、靜な風の聲は近いところに水の溜でもあるやうな響を傳へ、何やら知らぬ小禽の囀りは秋晴の旦あしたに聞く鴟ちゅうよりも一層勢が好い。

と云ひ、

……玄關側の高い窓が明け放しになつてゐたが、寂とした家の内からは何の物音も聞えない。窓の下から黄楊とドウダンとを植交へた生垣いけがきが立つてゐて庭の方を遮つてゐるが、さし込む日の光に芍薬の花の紅白入れ亂れて咲き揃つたのが一際引立つて見えながら、ここも亦寂としてゐて、花鋏の音も箒の音もしない。唯勝手口につづく軒先の葡萄棚に、今がその花の咲く頃と見えて、蛇の群れあつまつて唸る聲が獨り夏の日の永いことを知らせてゐるばかりである。

と云ふあたり、いかにも風流味が溢れてゐるが、かう云ふ敘景は此の物語の筋の進行には

左程必要のないもので、自然主義の作家ならば當然書かない部分である。要するに此の小説は、いささか色彩がくすんではゐるけれども、矢張り一卷の優しい佗びしい繪巻物であつて、ここに私は、西鶴——紅葉に絲を引くところの傳統的作風を見るのである。

○

それにしても、いつたい荷風氏はいつ頃からかう云ふ寫實的傾向になられたのであらうか。聞くところに依ると、氏は壯年の頃、廣津柳浪に師事されたことがあるさうである。氏よりも多分六七歳若輩の私はその時分のことは知らないけれども、私の記憶する限りに於ける氏の最も古い創作は「地獄の花」であつた。蓋し、その頃の氏が「ナナ」の抄譯を著はされたことを思へば、當時はゾラの感化を受けてをられたのであらう。さう云へば「地獄の花」も、——二十年も前に讀んだきりだから、たしかなことは云へないが、——ゾラにかぶれた作品だつたやうな氣がする。が、此の小説は相當に文壇の注意を惹きはしたものの、要するに著者の早熟の才を窺ふに足るだけのものであつて、今日から見れば、青年血氣の空想に任せて作り上げた幼稚な作品に過ぎないであらう。荷風氏が眞に文壇に認められ、俄かに聲名を馳せるやうになつたのは、新歸朝者として「あめりか物語」を發表された以後のことである。當時日本の文壇は、自然主義の横暴時代と云つてもいい程の時節であつたが、壯年にしてゾラの自然主義にかぶれた荷風氏は、本場の佛蘭西から歸つて來ら

「つゆのあとさき」を讀む

れると、敢然として文壇の風潮に逆らひ、自然主義とは甚だ隔たりのある、耽美的、享樂的の作品を續々と世に問はれた。「あめりか物語」「ふらんす物語」等に於ける作者は、しばしば咏嘆し、しばしば讚美し、しばしば興奮し、主觀を憚らず流露させてゐる點に於いて、むしろ詩人的であつた。

今「荷風全集」が手許にないので、此の作家の歩んだ道を年代的に辿ることは出来ないが、そののちの氏は、時世に對する不平と反抗に燃えてゐた一時期があつたと記憶する。さうしてそれらの感情が沈靜し、稍客觀的敘述の方向へ移つて行かれたのは、「隅田川」あたりが最初ではなかつたらうか。私はあれを讀んだ時、「荷風氏も變つたな」と思つて、多少さびしく感じたことを覚えてゐる。と云ふのは、あれには從來の荷風氏の熱がなく、新鮮な感覺がなく、却つて「たけくらべ」などの境地に似た江戸趣味の世界へ退かれたやうに思へたからである。しかし此の作品にも、まだ何處やらに在來の荷風氏らしい咏嘆のあとが、ほのかなためいきの程度に於いて聞えないこともなかつたが、それから數年の後、花柳小説「腕くらべ」を書かれるに至つて氏の純客觀的寫實の作風は大成されたと云つてよからう。當時佐藤春夫は私に此の「腕くらべ」を讀むことをすすめて、「此れには過去の荷風氏の藝術が、氏の持つてゐるいいものの凡べてが、渾然として一つに纏められてゐる」と云つてゐた。思ふに此れを書かれた頃の荷風氏は、既に齡四十に達してをられたか、少くとも四十近くであつたであらう。氏は一應そのあたりで作家としての長い成績を振り返

り、過去二十年間の自己の藝術から、剪除すべきものを悉く剪除し、精選すべきものを悉く精選して、材を狹斜の巷に取つたあの小説を書かれたかのやうに見える。兎に角あの作品には、四十臺の作家が二十臺の自己の作物を讀み返してみる時にしばしば感ずるであらうやうな、氣恥しいところ、無躰なところ、生硬なところを凡べてすがすがしく洗ひ落して、今や漸く老境圓熟の域に這入つた此の藝術家が、眞に己れの身に附いた技巧を見事に完成し、整頓させた趣がある。しかし私は、正直を云ふと佐藤が推賞した程には此の作品に打たれなかつた。圓熟の美はあり、齊整の美はあるが、その題材が爲永春水以來の花柳界と云ふ古めかしい世界に限られ、あまり粹になり過ぎたために現代離れのした氣味合ひがあつて、これでは結局紅葉あたりの綺麗事の境地から一步も進んでゐないと思はれた。「巧いことは巧いが、かう云ふものは春水時代にも硯友社時代にもあつたやうな氣がするね」と、私は佐藤にさう云つたことを覚えてゐる。

が、まあ何んにしても、青年時代に詩人風であつた此の作家は、「腕くらべ」以後次第に紅葉山人風な寫實主義に轉せられたと認めていい。稀には「雨瀟々」の如き例外もあるが、そののちに發表された「おかめ笹」「かくれがに」等の作品は皆これを證する。すべてこれらの小説は、現代に材を取りながら、その形式も、文章も、共に古めかしくなつかしい感じのもので、これを明治時代の「新小説」や「文藝俱樂部」誌上に發見したとしても、さまざま不似合ひではないであらう。作者自身はどう感ぜられるか知らないが、私は此の數年間

が荷風氏の藝術の沈滞期であつたと思ふ。少くともわれわれの眼には、「腕くらべ」を頂點として、氏の創作力は下り坂になりつつあるやうに見えた。何より私の懸念したのは、氏の筆がだんだん干涸らびて来て、「腕くらべ」に見るやうな典雅な潤ひが乏しくなり、妙にバサバサして、荒んで来たことであつた。蓋し此の期間に於ける絶品としては、嘗て復活後の「明星」誌上に連載された「雪解」の第一章であらう。私はあの麗しい雪晴れの朝の描寫を讀んだとき、「荷風先生未だ老いず」と思つたが、しかしあれとても、傑れてゐるのは冒頭の敘景だけであつて、第二章以後は頗るあつけない氣がした。「荷風の物では『西遊日誌鈔』に止めを刺すね」と、故芥川龍之介がそんなことを云つてゐたのは、此の前後であつたらしい。

○
今度の「つゆのあとさき」にも、古めかしいところは可なり眼につく。否、文章の體裁、場面々々の變化配置の工合など、古いと云へば此れが一番古いかも知れない。たとへば篇中至る所に偶然の會ひがあり、その會ひを利用して筋を運んで行くやり方など、一と昔前の小説や戯曲に慣用された手段である。しかしそれにも拘はらず、その古い形式が題材の持つ近代的色彩と微妙なコントラストを成して、一種の風韻を添へてゐる。作者は表面緊張した素振りを現はさず、いかにも大儀さうに古めかしさうに書いてゐながら、その

無愛想な筆の跡を最後迄辿つて讀んで行くと、女主人公の君江と云ふ女性があざやかに浮き上つて來るのに氣がつく。のみならず、ここには夜の銀座を中心とする昭和時代の風俗史がある。震災後に於ける東京人の慌しく淺ましい生活の種々相がある。これはたしかに紅葉山人の世界でも爲永春水の世界でもない。「腕くらべ」は作者の過去の業績の總決算に過ぎなかつたが、「つゆのあとさき」は齡五十を越えてからの作者の飛躍を示してゐる。私は何よりも先づ我が敬愛する荷風先生の健在を喜びたい。

○
自然主義と云ひ、寫實主義と云ひ、今では既に時勢おくれの言葉であるが、私はかう云ふ作品を讀むと、昔ながらの東洋風な純客觀的の物語、——繪巻物式の書きかたも、使ひやうに依つてはいつの時代にも應用の道があることを感ずる。

元來心理描寫だの、官能描寫だの、乃至は意識の描寫だのと云ふ風な、内部へ深く喰ひ込んで行く書きかたは極く近頃の流行であつて、われわれの國の古い小説家は、専ら筋の趣向と云ふ點に苦心をした。そこには種々なる人物が登場し、さまざまな形でさまざまな場面へ出つ入りつするけれども、それも多くは筋を面白くするための道具に使はれてゐるだけで、都合に依つては性格の必然さなども無視されてしまふ。つまり此の場合、作者に操られていろいろに動いて行く多數の人物は、筋を弄ぶために勝手に何處へでも置きかへら

れる將棋の駒に過ぎない。現在でも、興味中心の低級な探偵小説には往々こんな風な人物の扱ひ方を見受けるが、昔のものは、高級低級の區別なく概してさうであつた。徳川末期には筋よりも會話の面白味の方へ重きを置いた作品が現はれかけたが、それとて誰がしやべつてもいいやうなことをめいめいがしやべつてゐるだけで、その場の雰圍氣を描き出してはゐるけれども、會話者の個性が寫される迄には至つてゐない。さうして少しどつしりした大作になれば、結局事件の發展と變化とを以て押して行く外に手段はなかつた。だが、私は此のことを、當時は技巧が幼稚であつたからだとばかりは考へたくない。蓋し東洋人には、人間性と云ふものを無視し、人間を木や石ころと同じ一塊の自然物と見る傾向がある。これは老莊の虚無思想などから來てゐるのであらうが、さう云ふ風な人間の見方が知らず識らず小説の方にも現はれてゐるのではないかと思はれる。讀者はしばしば、人間を機械の如く扱つた不思議な筋の探偵小説を讀むときに、へんに冷酷な、虚無的な感じを抱くであらう。古來の東洋の小説には、いかに激情的な場面、いかになまめかしい場面、功名愛慾その他いかなる人間的な葛藤を描いても、何處かにちやうどそれと同じやうな冷酷な感じのするものも多く、就中支那の小説には一層それが著しい。たとへば「水滸傳」などは、官僚の悪政治に憤りを抱く文人が、慷慨激越の情を筆に托して時世を諷したものだ云ふ様に云はれてゐるけれども、私は讀んでさう感じない。それよりもむしろ、あの何十人と云ふ性格も境遇も似たり寄つたりの英雄豪傑を、土偶の如く又しても又しても登

場せしめ、根氣よくいろいろな事件を編み出してゐるところに、いよゝいのない人が退屈しのごに無数の人形を作つてみたり並べてみたりしてゐるやうな寂寞と空虚とを感じる。私は作者施耐庵の人物については何も知らないが、作者自身は時世を憤つたつもりで書いてゐるとしても、その實作者の性格の奥に虚無的なものがあつて、それがあつて構想を生んだのではあるまいか。假りに今、茲に一人の甚だ徒然な男があつて、人間を蔑視し、人生を馬鹿にし切つてゐるとする。そして無聊に苦しむあまりにいろいろの人形を拵へ、それに彩色を施したり衣裳を着せたりして時間をつぶし、次ぎに玩具の宮殿だの茅屋だのを、ひどく念入りに細工をして幾つも幾つも作り上げて、それへその人形どもを置き並べてみては獨りで嬉しがつてゐるとする。その男はもちろんそんな仕事をして一文の金にならぬでもない、誰に見せようと云ふでもないが、その仕事が無目的なものであり、空虚なものであればある程、尙更それに熱中する。「水滸傳」の作者が綿々として同じやうな人物と事件とを後から後からと繰り出して行くあくどい迄の丹念さは、私に何かしらさう云ふ感じを起させる。うそを樂しむ人でなければ手の込んだうそは吐けないと同様に、虚無を樂しむ人でなければああ迄大がかりな空中樓閣は築けない。幸田露伴氏は「紅樓夢」を評して、「あの小説には大勢集まつて飯を食ふところばかり多くつてね」と云つてをられたが、成る程さう云へばあれなどにも同じ趣がある。此の時分の文人は現代のわれわれと違つて、原稿料や印税をアテにした譯でもないし、小説を書くのを士大夫の耻と心得て匿

名を用ひたりしたくらゐであるから、功名心に駆られたのでもないのに、それでゐてあんなに無数の人物を捏造し、あんなに長たらしい筋を案出したことを思ふと、私は此の人たちの倦むことを知らない空しい努力に寒氣を覚える。日本の作家は彼等程のあくどさがなく、風流味があり、やさしみがあつて、そこに幾分の暖みが感ぜられるけれども、人生を描寫するに方つて、人間性の内面よりも外面の動きに注意を向け、個人々々を一つのユニット(單位)として、それらが醸し出す事件の波瀾の方へ重きを置いたことは規を一にしてゐる。それは小説道がまだ充分な發達を遂げず、作家の技巧が幼稚で單純だつたのにも因るが、それにしても彼等の教養の中に東洋人特有なニヒリズムの素質があるために、無意識のうちに、人間の魂を無視して妖妄虚誕に姪する傾向を來たしたのではあるまいか。云ふ迄もなく、荷風氏の「つゆのあとさき」は「水滸傳」や「紅樓夢」の如き老大な空中樓閣でも放埒な妖妄虚誕でもない。雑誌へ載せられる讀み切りの創作としては稀に見る大作であるけれども、先づ二百五十枚前後の中篇物で、筋は面白く組み立ててあるが何處迄も純正な寫實小説であり、長さも適當にチマヂマと纏まつてゐる。が、此の作品には、今云つたやうな作者の虚無的な冷酷さが、在來の日本物にも見られない程度に強く出てゐる。さうして作者のさう云ふ態度が、女主人公の君江と云ふ癡類した女性を描くのに甚だよく調和してゐる。つまり作者の心境と作者の描かんとする人物のそれとがピッタリ合つた感じである。而も作者は君江の性格や感覺の内部にまで立ち入つてゐるのではない。その時

その時の言語動作に附隨する心持ちの説明はあるけれども、心理描寫と云ふ所まで突つ込んでゐない。作者は矢張り客觀の立ち場を守つて、君江と云ふ女性を人形の如く冷めた突つ放して書いてゐるのだが、人形と使ひ手の意氣が合つてゐるために、手を振り足を動かすだけでその人形に感情や氣持ち迄が賦與されてゐる。尙又、荷風氏の筆が昔よりも干涸らびて潤ほひがなくなつてゐるのが、此の作品では却つて冷酷味を助ける効果を上げて、そのそつけない乾いた書きぶりが一種の凄味を添へてゐる。實際、二十年前にはあんなにつやつやと脂ツ氣のあつた此の作者の文章は、いつの間にか非常に變つて、今ではところどころ正宗白鳥氏を思ひ出させる迄に無愛想になつてゐるのだ。此の、兩極端に立つてゐた筈の二人の巨匠の文體が何處となく接近して來た一事を思つても、私は時の推移に對してそぞろに感慨を催さざるを得ない。

○
ここで一寸私交上のことを云はして貰ふのだが、私は實は、近年信書の往復はしてゐるけれども、從來殆んど荷風氏とは親しく交際したことがない。それと云ふのが、青年の頃、自分の最も敬慕する此の先輩が思ひがけなく自分の書いた物をいち早く認めて下すつて、「三田文學」の誌上で過分な讚辭を賜はつたために、はにかみやの私は却つて此の人に近づきにくくされたのであつた。そこへ持つて來て荷風氏の方も餘り友人を作るのを好まれ

ない風が見えた。まあそんな譯で、最近にお目に懸つたのが既に八九年も前であるから、私は氏の生活ぶりについてをりを噂に聞く以外に何も知る所がないのである。唯、大正九年か十年頃に「雨瀟々」を読んだ時は、氏の孤獨陰慘な境涯をお察しして思はず慄然とした。今原文を引くことは出来ないが、あの中に、「詩興湧き出づる日は聊か慰むる術もあるけれども、さうでもない時は蕭殺たる心情の遣り場がない」と云ふ意味の語があつて、當時私は、家庭の事情から自分も或ひは孤獨生活に入るのではないかと思はれたので、四十過ぎてのさう云ふ佗びしい遣る瀨ない獨身男の哀れさを、人事ならず身に沁みて讀んだ。私はいつとも、荷風氏のやうに妻もなく、子もなく、友人もなく、ときどき氣の合つた茶飲み相手を拵へるぐらゐで、全くの獨りぼつちで暮らしてゐたら、それこそ心行く迄創作に耽ることも出来、花鳥風月を楽しむ餘裕も出来て、嘸しんみりと落ち着いた氣持ちになれるであらう、藝術家の生活はあであなければいけないと、遠くから氏の身の上を眺めては羨やんでゐたものであつたが、成る程それも「詩興湧き出づる」ことを勘定に入れての想像であつて、ひとたび創作熱が衰へ、藝術的感興が涸渇してしまつたら、老境に及んでの鰥寡孤獨な生活ほどみじめなものはないであらう。尤も、盛んなる體力と飽くことを知らぬ情慾とがあれば又紛れる道もあるが、日本の文人は此の方面に於いて西洋人ほど強靱でなく、ちきに疲れたり覺めたりする。だから若い時分には享樂主義だの耽美派だのと云つてゐても、早くも肉體の秋が訪れる年齢になれば、自ら藝術に對するその人の態度にも變

化が生じないではゐない。思ふに荷風氏は、長い間心境索落たる孤獨地獄の泥沼に落ち込んで、苦しく味氣ないやもめ暮らしの月日を送りつつあるうちに、いつか青年時代の詩や夢や霸氣や情熱やを擦り減らしてしまつて、次第に人生を冷眼に見るやうになられたのであらう。享樂主義者が享樂に疲れるやうになれば、大概はニヒリストになるのが落ちであるが、氏も斯くの如くにしてもその當然の經路を辿られたかと思はれる。ただ、私が驚くのは、長年月の寂寞と空虚とに可なり心身を荒ませたらしい氏が、今日も尙かう云ふ丹念な勞作をコツコツと續けられることである。氏はわれわれと同じく現代の作家の一人であるけれども、われわれのやうに原稿料に依食する人でない。今更文壇的功名心や野心に驅られる筈もない。もともと世を拗ねてゐるのだから、恐らく世間の毀譽褒貶や批評家の云ふことなどを眼中に置いてはゐないであらう。とすると、氏も亦昔の支那の文人のやうに、退屈しのぎに人形細工をされたのであらうか。私はそこまで思ひ切つて斷言することを憚るけれども、此の小説にも幾らかさう云ふ氣味合ひがあるやうに感ずる。「藝術的感興なんて、もうそんなものは持ち合はせない。心理がどうだの性格がどうだのつて、そんな面倒くさい詮索もイヤだ。己は唯自分の見た女や男を玩具の人形にして暇ツ潰しをするだけだ」と、作者がさう云つてゐるやうな氣がする。而も此の小説の面白味は作者のさう云ふ無頓着な書き方に存する。偶然の出會ひが多いことなども、一つには古い形式に對する愛着にも依るのだらうが、一つには、その方が筋を

運ぶのに都合がいいので、多少不自然にならうがどうだらうがお構ひなしにやつてのけたと云ふ風に見える。だがそれでゐて、長年の修練と琢磨の結果作者の客觀の鏡が玲瓏と冴えてゐるために、その前を去來する影像を明瞭に寫し出してゐる。努めずして物の形が表面へ映るやうに、筆が自然と描くものに随つてゐる。もうここ迄來ると、感興だの創作熱だのと力み返るのが馬鹿々々しいかも知れない。あくびを噛み殺しながらでも、遊び半分の手すさびでも、これだけのものが書ければ結構な譯である。

兎に角私は、此の作者が最も肉慾的な姪蕩な物語を、最も脱俗超世間的な態度で書いてゐるところに、——そして、何もむづかしい理窟を云はずに素直に平凡に書き流してゐるところに、——いかにも東洋の文人らしい面目を認める。勿論すべての作家にさうありたいと望むのではなく、私自身もさう云ふ態度を取る者ではないが、しかし現今のやうな文壇にかう云ふ作家のかう云ふ作品もたまにはあつて欲しいと思ふ。せんたいわれわれの傳統から云へば、小説と云ふものは此の程度に人間の動きを寫せばいい譯なのだ。少くとも斯くの如き作品に對しては、「性格が描けてゐない」とか「タイプだけしか出てゐない」とか云ふ風にばかり見たがらないで、作者がいかにか材料を扱つてゐるか、その扱ひ方にも眼をつけるべきだ。藝術品の持ち味はどう云ふ所にころがつてゐるか分らないもので、何も性格を描くばかりが能ではない。大勢の人物を登場せしめてそれを書き分ける時など、タイプだけ出てゐれば澤山で、さう一人一人の性格まで書ける筈もなく、そんな必要もない。

それに又、もともとタイプ以上に人間が描けるかどうかも疑問である。西洋流に内部へ細かく掘り下げて行くのもいいが、そのために却つてうそらしくなつたり、獨り合點になつたり、イヤ味になつたり、やにツ濃くなつたりする嫌ひがないでもない。昔の作家が人間を人形の距離にまで遠ざけ、或ひは全く機械の如く扱つたのも一理があると考へられる。

書き方に愛想がないと云へば、此の小説の初めの部分、(一)と(二)のあたりは最もそれが甚しい。

「こいつ。ひどいぞ。」と矢さんは撲つまねをするはずみにテーブルの縁に在つたサイダアの壇を倒す。四五人の女給は一度に聲を揚げて飛び退き、長い袂をかゝえるばかりか、テーブルから床に滴る飛沫をよける用心にと裾まで摘み上げるものもある。君江は自分の事から起つた騒ぎに據所なく、雑巾を持つて來て袂の先を口に啣へながら、テーブルを拭いてゐる中、新しく上つて來た四五人連の客。いらつしやいまして大年増の蝶子が出迎えて「番先はどなた。」と客の注文をきくより先に當番の女給を呼ぶ金切聲。……と、先づかう云つた風な調子で、君江が朝起きてから日比谷の賣卜者を訪ねて、數寄屋橋の朋輩の女給に遇ひ、それから勤め先のカフェエへ行くところ、次ぎにはそのカフェエに於ける女給や客の動作などを、たとへば或る女給が拾圓紙幣を手を持つて「お會計を願ひます」

と帳場の前へ立つたとか、會計の女が傳票と剩錢を出したとか、何んの意味もない細かいことを一々綿密に記してゐる。それが、脚本のト書きのやうな現在止めや名詞止めの多い文章で、古くは「浮世風呂」や「膝栗毛」、ずつと下つては「當世書生氣質」などに見る筆づかひなのである。作者のかう云ふ文體は今度に始まつたことではなく、此の舊式な表現法になつかしみを感じてをられるのであらうが、なんにしても此の書き方でさしたる必要のないこと迄も丹念に拾ひ上げて行くのだから、何處迄これが續くのかと、讀んでゐて一寸不思議な氣がする。作者のニヒリステイタな冷めたさは、此の邊で一番よく出てゐる。想像を逞しうすれば、作者は最初、疲勞倦怠の氣分を引き立てて強ひて筆を執り、書いて行くうちにやや油が乗つて來られたのかと思ふ。そのせゐか冒頭の一二回のところは作者のさう云ふ慵げな状態が讀者にまで傳はつて來るやうである。それが地の文ばかりでなく、君江と松子との會話などにも感ぜられる。しかし、文章は何處迄も今云つたやうな張り合ひのない調子で續けられてゐるのだが、四回目五回目あたりから、作者も讀者も共に此の慵い状態から眼を覺まされる。殊に五回目へ來て急に舞臺が一轉し、六回目で再轉するに及んで、テムボが漸く早くなり、經緯が複雑になり、話の絲がそれからそれへと分岐して思ひがけない發展を遂げ、七回に至つて最も波瀾重疊を極める。が、私は八回の鶴子の出發後、烈風と霧雨の中の夜の出來事を敘するところが、此の物語中の壓巻であると思ふ。ここは芝居なら雨の中で舞臺が二三度廻

つて、銀座のカフェエに於ける清岡と村岡、蕎麥屋の前の君江との出遇ひ、津の守坂下の自動車の災難と云ふ工合に目先が變つて行くところだが、小説でも昔はかう云ふ書き方が流行つたものだつた。今も髻物の大衆小説には用ひられてゐるだらうが、現代物の藝術小説に此れを見ることは實に久しぶりで、なつかしい氣がする。それに、鶴子のあわただしい出發のあとへ天候の激變を巧みに使つて、次ぎ次ぎに事件を突發せしめ、物騒がしい風雨の聲が聞えるやうな感じを與へる。私は風と雨の少い關西にゐるせゐか、かかる敘景を讀むと、いかにもそれが晩春から初夏へかけての東京の夜らしく、嘗て東京に住んでゐた頃

のさう云ふ夜の記憶を幾つも想ひ浮かべるのである。實験者から聞いた話でもあるか、君江を載せてゐた運轉手が突然彼女を口説く前後は、或ひは作者の思ひつきか、いづれにしてもいかにも有りさうによく出來てゐる。ここへ來て君江と云ふものが一層はつきりと讀者の眼に映り、此の小説の凄味が一段と加はる。且又、ここで作者が最も光つてゐる。早くゾラの影響を脱し、日本の自然主義に反抗した作者ではあるが、さすがにかう云ふところへ來ると佛蘭西仕込みの下地が見え、フローベルやモウパッサンを思ひ出させるものがある。私は夙に、日本の自然主義作家の眼界が狭く、題材が貧しく、色彩と變化が乏しいのに不満を抱いてゐたものだが、蓋しこれなどはモウパッサン流の自然主義に最も近い作品であらう。日本の自然主義が衰へて十何年かの後に、荷風氏に依つて斯くの如き作品が發表されたのは甚だ皮肉である。

いつたい私は、自分が代々の東京人であるにも拘はらず、東京と云ふところを餘り好ましく思はない。東京人には故郷がないと云はれるが、私のやうに下町で生れた人間は、その下町が、全く形態を改めてしまつた今日となつては、猶更愛着がない譯である。尤も私の東京嫌ひは震災以前からのことなので、復興後の昨今は、たまに行つて見るとさすがに近代都市の美觀を感ずるけれども、しかし何んとなく埃ッぽい、落ち着きのない、カサカサした空氣は相變らずである。道路や建築がいくら立派になつても、市民の間に潑刺とした復興氣分らしいものは認められず、往來で行き遇ふ人が皆血色の悪い青い顔をしてゐるか、狼のやうなトゲトゲしい眼つきをしてソッパッパしてゐる。そして忙しさうに見えるのも、希望があつて働いてゐるのではなく、一般に人心が荒んで、絶望的に齷齪してゐるのである。蓋し日本全體の現下の人氣がさうなつてゐるので、それが政治の中心地だけに一層濃く現はれてゐるのでもあらう。ところで「つゆのあとさき」には、さう云ふ東京のローカルカラーが實によく出てゐる。ここに描かれてゐる女給群や、二階貸しをしてゐる婆さんや、賣卜者や、運轉手や、清岡を取り巻く有像無像や、その他の有閑階級の紳士連や、それらはいづれもほんの一寸しか顔を出してゐないのだが、いかにも東京によくあるタイプの人人であつて、僅か二三行の説明を讀んでも直ちにその顔つきや聲音が想像されるので

ある。かう云ふことは親しく東京に住んでゐる者には却つて氣がつかないであらうが、私のやうに東京を知つて東京を離れてゐると、それがよく分る。一人一人を取り立ててみれば左程でもないけれども、各方面の東京タイプの代表者とも云ふべきものを斯うまで集めて見せられると、東京の埃ッぽい風の匂ひを嗅がされるやうな氣がする。

私はこれを讀んで心づいたことだが、現在日本の小説家の九割までは東京に住み、現代に材を取る場合には殆んど東京を舞臺としながら、未だ曾て東京の地方色を意識的に描いたものを見たことがない。多くの作家は、それぞれ別にテーマを持ち、目的を持つてゐるので、適當の距離から此の大都會を見渡す餘裕もなく、又そんな興味も感じてゐないのであらうが、それにして文學史上に我が昭和時代の東京を記念すべき世相史、風俗史とでも云ふべき作品が一つぐらゐはあつてもよからうし、むづかしく云へば東京に住む文人の義務人事を描くばかりでなく、明かに意識して東京の風物を寫さうと努め、作者に最も馴染みの深い銀座界限、牛込市ヶ谷附近、外濠線の土手の景色などをしばしば繰返して取り入れてをられる。

あまりいつまでも同じところに立つてもゐられないので、君江は考へ／＼見附を越える

と、公園になつてゐる四番町の土手際に出たまま、電燈の下のベンチを見附けて腰をか

けた。いつも其邊の夜學校から出て來て通り過る女にからかふ學生もゐないのは、大方

日曜日か何かの故であらう。金網の垣を張つた土手の真下と、水を隔てた堀端の道とに電車が絶えず往復してゐるが、その響の途絶える折折、暗い水面から貸ボートの静な櫂の音に雜つて若い女の聲が聞える。君江は毎年夏になつて、貸ボートが夜毎に賑かになるのを見ると、いつもきまつて、京子の圍はれてゐた小石川の家へ同居してゐた當時の事を憶ひ出す。……

かう云ふ風に、作者は第九回の終りの方で、君江に散歩させながら、新見附から市ヶ谷見附に至る沿道を敍してをられる。私はあの濠に貸しボートのあることを此れで始めて知つたのだが、それにしても、近頃はいつも自動車で通り過ぎるばかりで、何年にもあの邊をゆつくり歩いたことがないので、此のあたりの敍景など、眞に久しぶりで東京の姿を見る心地がする。が、それよりも一層胸を打たれるのは、松崎と云ふ男が尾張町の四つ辻に亘んで銀座街頭の夜景を眺めるところ、――

松崎は法學博士の學位を持ち、もと木挽町邊に在つて某省の高等官であつたが、……麴町の屋敷から抱車で通勤した其の當時、毎日目にした銀座通りと、震災後も日々に變つて行く今日の光景とを比較すると、唯夢のやうだと云ふより外はない。夢のやうだといふのは、今日の羅馬人が羅馬の古都を思ふやうな深刻な心持をいふのではない。寄席よせの見物人が手品師の技術を見るのと同じやうな軽い賛稱の意を寓するに過ぎない。西洋文明を模倣した都市の光景もここに至れば驚異の極、何となく一種の悲哀を催さしめる。

云々と云ふ一節である。これなぞ四十以上の東京人があの四つ辻に立つた時に誰しも抱く感慨であらう。作者はこれを第七回の波瀾を極めた場面と場面との間へ卒如として挿入してゐる。事實、さう云ふあわただしい時に思ひがけなく足を止めてこんな感慨を催すものである。その挿入のしかたが甚だ効果的で、讀者の心を動かすやうに生かして使つてある。

さう云へば、今引用した一節の直ぐ後の方に、――
 ……君江は同じ賣笑婦でも従來の藝娼妓とは全く性質を異にしたもので、西洋の都會に蔓延してゐる私娼と同型のものである。ああ云ふ女が東京の市街に現れて來たのも、之を要するに時代の空氣からだと思へば時勢の變遷ほど驚くべきものはない。翻つて自分の身を省れば、……月日はそれから二十年あまり過ぎてゐる。一時はあれほど喧しく世の噂に上つた此の親爺が、今日泰然として銀座街頭のカフェーに飲んでゐても、誰一人これを知つて怪しみ咎めるものもない。……そして人間の世は過去も將來もなく唯その日の苦樂が存するばかりで、毀譽も褒貶も共に深く意とするには及ばないやうな氣がしてくる。果して然りとすれば、自分の生涯などまづ人間中の最幸福なるものと思はなければならぬ。年は六十になつて猶病なく、二十の××を捉へて世を憚らず往々青年の如く×××更に愧る心さへない。この一事だけでも其の××は遙に王侯に優る所が

「つゆのあとさき」を讀む

あるだらうと、松崎博士は覺えず聲を出して笑はうとした。

と云ふところがある。此の松崎と云ふ男は此處へ一寸出て來るだけで重要な人物ではないが、思ふに此の老紳士の述懐は幾分か作者自身のそれでもあるだらう。考へてみれば此の作者ほど始終一貫して艶情小説に筆を染めてゐる人も少い。昔は花やかに、今は冷やかに、「腕くらべ」では花柳界を、「つゆのあとさき」ではカフェエの女給を、時に依つて書き方や題材は變つて來たけれども、その描くところは常に淫蕩なる男女の痴情の世界である。さうして、老來文章が枯淡の味を帯びると共に、話の筋はますます淫蕩の度を加へ、佛蘭西小説や支那小説のあくどさには及ぶべくもないけれども、青年時代の詩的要素が失はれたために、却つて變に實質的になつて來てゐる。私はそこに、老シユニツツアの作品に見るやうな一種のいやらしさをさへ感ずる。此の小説の最後に川島と云ふ老人が現はれて、君江の枕元へ遺書を残して行く件は、少し拵へ過ぎたやうな嫌ひがあるが、察するところ作者の冷めたく乾き切つたニヒリズムの底には、なほ往年の享樂主義の搾り糟に似たものが滓の如く沈澱してゐるのであらう。

尙ちよつと茲に附け加へておきたいのは、作家が老境に入るに従つて自然と懷古趣味に傾き、その表現の形式等に殊更新様を避けて舊態を學ぶやうになるのは多くの藝術家に見る

所であつて、唯り荷風氏ばかりではないが、それにしてもさう云ふ人たちの懷古趣味がせいせい徳川末期、化政頃の戯作者の世界に止まつて、それより古い時代に遡る者の少いのは何故であらう。何故彼等は江戸文學の狭い範圍にのみ跼踏して、室町、慶長、元祿頃の上方文學の廣い領域へ眼を付けようとしないのであらう。比較的近代の産物である江戸情調のみが特にさう云ふ人たちに牽引力を及ぼすらしいのを私は不思議に思ふのである。

春琴抄後語

或る時の座談で志賀君が里見君の小説の批評をして、「(今日は)から始まつて(左様なら)まで書く書き方」と云つたことがある。慥に里見君はさう云ふ書き方をする作家の雄で、短篇は素よりであるが、「多情佛心」や「安城家の兄弟」の如き長篇でも、あの尤大な枚数の大部分を會話を以て運んでゐる。これをわれ／＼の先輩に求めれば、泉鏡花氏が此の方に屬する作家で、作中に會話を多く使ひ、「はい」で一行を占めるやうな書き方をする。いづぞや上海に遊んで支那の新聞記者の訪問を受けた時、日本の小説家は枚數で原稿料を貰ふさうですが、あゝ云ふ書き方をして一枚に勘定されるのですかと云ふ奇問に接したことがあつたが、近頃の私は、久しく會話の多いものを書かないので、少々割の悪いやうな氣がしないでもない。勿論これはその時の心境と題材とに因ること、一概には云へないけれども、私の外にも割の悪い方に屬する作家が相當にある。志賀君なども引き締められるだけは地の文で引き締め、要所にだけ會話を使ふ行き方のやうで、同じものを里見君が扱

つたら三四倍の長さにはなるであらう。故人では芥川龍之介、現存の人では宇野浩二氏と佐藤春夫、此の三人も、決して會話が不得手なのではないが、大體に於いて地の文が多い。佐藤などは近來ますますさう云ふ傾向があり、偶々會話を用ひても、カギで圍つたり行を改めたりしないで、地の文の中へ織り込むやうにしてゐる。私の「卍」と云ふ作も佐藤式の行き方であるが、あれは實は地の文よりも會話の方が多いためであるから、普通の形式に従つて一つ一つ行を改めて行つたら、餘程枚數が殖える勘定で、あのくらの割の悪い作品はないのである。が、佐藤は知らず、私があゝ云ふ形式を擇んだのは、「エロイズとアベラール」以後のジョーデムリアの書き方、それから源氏物語以下の日本の古典小説の行き方を學んだのであつた。誰も知る通り源氏の帚木の卷に於ける雨夜の品定めは、會話と地の文との區別がやゝこしく、何處から誰の言葉になるのだから分りにくいのであるが、しかしあゝ云ふ風にした方が日本文の美しさが出る。私はそこに興味を持ち、専ら地の文と會話とのつながり工合に苦心を拂つた。それでも「卍」では讀者の便宜を考へて、カギだけは施して置いたのであるが、「蘆刈」ではそれも除ることにした。

私は、自分の若い頃の作品を読み返してみても「拙いな」と思ふことが屢々あるが、それは會話から地の文に行の變る所、(と、彼は云つた)(かう私は云つた)等の語の挿入されて

ゐる部分に多い。今から見ると、挿まないでも済む筈の所へ挿んであるのが眼につくが、たしかにこれは眼障りなものであつて、これを手際よく省略し、又は上手に挿むことが出来るやうになるのが、一つの修行であるかも知れない。それと云ふのも、畢竟會話と地の文とを切り放して書くために、これらの語が餘計眼に立ち易く、又必要にもなるのであるから、昔のやうに會話を地の文に織り込んでしまふと、それが幾らか防げるのである。しかしさう云ふ風になると、會話のリズムを地の文のリズムと一致させたくなり、自然會話が死んでしまつて、結局地の文と一つものになつてしまふ。だが、どう云ふものかわれわれ日本の創作家は年を取るとだん／＼會話を書くことが億劫になるらしく、小説よりは物語風の形式を擇ぶやうになり、しまひには地の文さへも簡略にして、場面を描き出す面倒を厭ひ、物語風から一層枯淡な隨筆風の書き方をさへ好むやうになる。

○
近松秋江君は直木君の歴史小説と私の「盲目物語」とを比較して、後者のやうな形式でなら、どんなに巧く書いてゐたにしろ左程驚くに足らないが、直木君のやうな書き方は、作家の最も困難とする方法を試みてゐるので、あれは容易に及び難いと云つてゐる。秋江君の意は、つまり小説風と物語風との難易の問題なのである。同君は昔から純客觀の描寫と會話とを以て押して行く所謂本格小説の信者であり、而も不幸なことには、夫子自身の素質が聊かさう云ふ作風に不向きであるところから、ひとしほそれを得意とする作家を羨む念が強いのであらう。此の氣持は私にもよく分るのである。今日雑誌編輯者が創作として扱つてゐるものの中には、小説風のもの、物語風のもの、隨筆風のもの、日記風のもの、感想文めいたもの、書簡文體のもの等まち／＼であるが、しかし何と云つても近代小説の形式に依つて本格的な書き方をしたものが、一番創作らしい感じがすることは事實である。此のことは讀者側がさう感ずるばかりでなく、作家側も同様であつて、ひとり秋江氏のみならず、私なども、會話を以て人物の性格やその場の情景を髣髴せしめるのでなければ、ほんたうの小説でないやうな氣がしたものであつた。又作家として、さういふ作品を書いてゐる時が一番嬉しくもあつた。それと云ふのが、物語風や隨筆風のものならば、多少文筆の素養のある者なら誰にでも書けるのであるから、作家たる者がさう云ふやさしい道を擇ぶのは、卑怯で横着のやうに思はれたのである。私は最早現在ではそんな幼稚な馬鹿らしい考へを捨て、しまつたけれども、而も猶「今日はから始まつて左様ならまで書く書き方」に一種のあこがれを持つてゐることは否み難く、たま／＼さう云ふ作品の傑れたものに接すると、秋江氏と同じやうな羨望の念を覺えることもあり、自分も書いてみたいと云ふ野心が急にムラムラと湧くこともある。又、久しくさう云ふ作品を書かずにあることに不安を感じ、自分はいつかさう云ふものが書けなくなつてゐるのではないか、自分が書かないのは書けないのでなく、それに適した題材が浮かばないからであるが、しかし浮

質が聊かさう云ふ作風に不向きであるところから、ひとしほそれを得意とする作家を羨む念が強いのであらう。此の氣持は私にもよく分るのである。今日雑誌編輯者が創作として扱つてゐるものの中には、小説風のもの、物語風のもの、隨筆風のもの、日記風のもの、感想文めいたもの、書簡文體のもの等まち／＼であるが、しかし何と云つても近代小説の形式に依つて本格的な書き方をしたものが、一番創作らしい感じがすることは事實である。此のことは讀者側がさう感ずるばかりでなく、作家側も同様であつて、ひとり秋江氏のみならず、私なども、會話を以て人物の性格やその場の情景を髣髴せしめるのでなければ、ほんたうの小説でないやうな氣がしたものであつた。又作家として、さういふ作品を書いてゐる時が一番嬉しくもあつた。それと云ふのが、物語風や隨筆風のものならば、多少文筆の素養のある者なら誰にでも書けるのであるから、作家たる者がさう云ふやさしい道を擇ぶのは、卑怯で横着のやうに思はれたのである。私は最早現在ではそんな幼稚な馬鹿らしい考へを捨て、しまつたけれども、而も猶「今日はから始まつて左様ならまで書く書き方」に一種のあこがれを持つてゐることは否み難く、たま／＼さう云ふ作品の傑れたものに接すると、秋江氏と同じやうな羨望の念を覺えることもあり、自分も書いてみたいと云ふ野心が急にムラムラと湧くこともある。又、久しくさう云ふ作品を書かずにあることに不安を感じ、自分はいつかさう云ふものが書けなくなつてゐるのではないか、自分が書かないのは書けないのでなく、それに適した題材が浮かばないからであるが、しかし浮

かばないと云ふのが年齢のせゐではないか、などと云ふ疑念が起つて来て、矢張何としても淋しいのである。

○
作家も年の若い時分には、會話のイキだとか、心理の解剖だとか、場面の描寫だとかに巧緻を競ひ、さう云ふことに夢中になつてゐるけれども、それでも折々、「一體己はこんな事をしてゐていいのか、これが何の足しになるのか、これが藝術と云ふものなのか」と云ふやうな疑念が、ふと執筆の最中に腦裡をかすめることがある。私は往年芥川龍之介に此れを語り、「君はさう云ふ經驗がないか」と尋ねたことがあつたが、芥川は「いや、大いにある」と言下に答へた。そして、「シエンキウイツチも矢張それを云つてゐるが、さう云ふ疑念が萌した時は悪魔に取り憑かれたと思つて、匆々に拂ひ除けるやうに警めてゐるね」と云ふのであつた。事實大概の作家が、そんな場合には慌て、左様な忌むべき不安を追つ拂ふやうに努め、ひたすらそれに眼を閉ぢてしまふのであるが、現在の私は、それを「悪魔と思へ」と云ふシエンキウイツチの説には賛成し難くなつてゐる。私は一方に於いて、「年を取ると、短い詩形程好もしくなる、三十一字の和歌の形式でもまだ長過ぎると思ふやうになる」と云つた北原白秋の言葉を想起する。これとシエンキウイツチの言と、必ずしも矛盾してゐないであらうが、何にしてもわれ／＼日本人の作家の多くは、老齡に及ぶ

に従つて本格的な書き方を面倒臭がるやうになり、場面の描寫や會話の遣り取りなどに苦心するのを無駄な仕事のやうに感じ出すのである。さうしてそれが、一時の疑念や不安でなく、われ／＼の體質の深い所に根を据ゑてゐるらしいので、さう簡單には追つ拂ふ譯に行かなくなる。此のことは讀者の側に廻つてみてもさうであつて、若いうちこそ小説的な作品でない物足りないが、老人になると、さつぱりさう云ふ書き方に興味がなくなる。どんなに巧く書いてあつても、巧さの底が知れてゐる、讀まないうちから分つてゐると云ふ氣がして来る。現に私なぞがめつたに雜誌の創作欄に眼を通さないのも、叙事文にすれば半枚か一枚で済むところを、事も細かな段取りを踏んで運んでゐるのが、たど／＼しい、煩はしいものに見えるからである。

○
一體、讀者に實感を起させる點から云へば、素朴な叙事的記載程その目的に添ふ譯で、小説の形式を用ひたのでは、巧ければ巧いほどウツらしくなる。私は永井荷風氏の「榎物語」を正宗氏が推稱する程には買つてゐないが、しかしあの作品が、正宗氏を感動させたのは、主としてあの中に含まれてゐる實感のせゐであらうと思ふ。さうしてそれは、一にあの簡略な、荒筋だけを述べてゐる書き方に由來するのである。西洋人は日本の和歌や俳句を以て詩の内容を成すものでなく、題目を指示するものに過ぎないと云ふさうだが、さう云へ

ばあの作品なども、小説ではなくて小説の材料であるに過ぎない。しかし私は、私よりも遙かに老齡な此の作者が一方に於いて「つゆのあとさき」のやうな大作を書き、一方に於いてあゝ云ふ筋書式の物を書く心持を、ほゞ忖度することが出来る。思ふに作者は「つゆのあとさき」の形式にも未だ愛着を絶ち難いであらうが、その心境はむしろ「榎物語」の方にびつたり當て嵌まるのではないか。が、さすがにあれでは物足りないのと、自己の老境を嘆ずる念も禁じ難いので、あの大作に手を染めたのではないか。されば作者に取つては「つゆのあとさき」を書いた時の方が嬉しかつたであらうけれども、恐らく此の作品は「榎物語」ほど正宗氏の感動を贏ち得ないであらう。と云ふのは、「ほんたうらしさ」と云ふ點で、前者は後者に劣るからである。今の若い作家諸氏はかう云ふ問題をどう考へてくれるであらうか。諸氏は矢張性格や心理や場面を云々し、それらを描寫する過程にこそ藝術があると主張されるであらうか。

直木氏の歴史物についても同じことが云へると思ふ。氏が在來の軍記類や新史料を涉獵して、英雄豪傑の言語聲色を再現し、大がかりな小説の世界を展開した精力と手際は、嘗て私も論じた通り敬服に値ひするけれども、もし「巧さ」と云ふことを離れて、扱はれた史實が人を感動せしめる力から云へば、平家や太閤記の記述の方がむしろ優つてゐるので

ある。私は石田三成の悲壯な生涯に多大の興味を覺える者であるが、それにしても氏の「關ヶ原」を読む時よりは、却つて渡邊世祐博士の「稿本石田三成」を読む時に、一層感銘が深いのである。私は又、三田村翁の「大名生活の内祕」の中にある「伊賀の水月」の記載を読んだが、頃日斯くの如き面白い讀み物を見たことがなかつた。又右衛門の事跡は淨瑠璃に、演劇に、講談に、大衆文學に、何回となく蒸し返されてゐるけれども、その事實の正確さに於いて、その視野の廣さと觀察の周到さに於いて、又右衛門を中心とした大名と旗本との軋轢から當時の時代相社會相との關聯が鳥瞰的に見渡してある點に於いて、此の四六判で百ページしかない淡々たる記載に及ぶものはないのである。著者は終始要約的に「話して」ゐるので、「描いて」はゐないのであるが、それでゐる此の仇討ちを廻つて動く武士や町人や若黨や小者や女房達の生活の有様から言語動作迄が、自ら想像されるのであつて、此れ以上何も附け加へる必要はない。私は斯くの如きものが藝術であるかないかはよく知らない。が、斯くの如くんば百の心理解剖や性格描寫や會話や場面の轉換も、畢竟何するものぞと云ふ感が、改めて強く湧くのである。尤も、歴史物の場合には材料が過去の實事であるから、小説の形にするとうそらしくなると云ふ事情もあるが、「つゆのあとさき」や「榎物語」の如き架空の題材に於いてすら、同様の感があることは前陳の通りなのである。

○
 私は春琴抄を書く時、いかなる形式を取つたらばほんたうらしい感じを與へることが出来るかの一事が、何よりも頭の中にあつた。そして結果は、作者としては最も横着な、やさしい方法を取ることに歸着した。春琴や佐助の心理が書いてゐないと云ふ批評に對しては何故に心理を描く必要があるのか、あれで分つてゐるではないかと云ふ反問を呈した。『春琴抄後語』と題して遂にそのことに觸れる暇がなかつたけれども、以上の所懐を讀んで頂けば、あとは宜しく御賢察に任せる。

懶惰の説

○
 懶惰と云ふことは、簡単に云へば「怠けること」である。普通、懶惰の「懶」の字の代りに「懶」の字を使つて、「懶惰」と書くのをしばしば見受けるが、あれは間違ひで、矢張り「懶惰」が正しいやうである。今、簡野道明氏の「字源」に據つて調べると、「懶」は「憎懶」などと用ひ、「にくむ」或ひは「きらふ」の意である。「懶」の方は、「ものうし」「なまける」「おこたる」「つかれふす」の意で、柳貫の詩の、

借得小窗容吾懶

五更高枕聽春雷

と云ふ句が引例として擧げられてゐる。なほ「字源」から孫引きすれば、許月卿の詩に

「半生懶意琴三疊」、杜甫の詩に「懶性從來水竹居」などがある。以上の例でも分るやうに、懶惰は「怠けること」に違ひないが、「ものうがる」「億劫がる」と云ふ心持ちが多分に含まれてゐることを見逃してはならない。そして一層注意すべ

きは、「小窗ヲ借り得テ吾ガ懶ヲ容ル」と云ひ、「半生ノ懶意琴三疊」と云ひ、「懶性從來水竹居」と云ひ、いづれも「ものうい生活」の中に自らなる別天地のあることを知り、それに安んじ、それをなつかしみ、樂しみ、或る場合にはさう云ふ境地を見えや氣取りにするかの如き傾向の存することである。

此の心持ちは支那ばかりでなく、古くから日本にもあつて、代々の歌人や俳人の吟詠の中に例を求めたら定めし數限りもないであらうが、就中室町時代のお伽草紙のうちには「物臭太郎」と云ふ小説さへ作られてゐる。

……ただし名をこそ物臭太郎と申せども、家づくりの有様人にすぐれてめでたくぞ侍りける。四面四町に築地をつき、三方に門を立て、東西南北に池を掘り、島を築き松杉をうるゑ、……錦をもつて天井を張り、桁、うつばり、たる木のくみ入には、白銀黄金を金物にうち、瓔珞の御簾をかけ、厩さぶらひ所にいたるまで、ゆゆしく作り立てて居ばやと心には思へども、いろいろ事足らねば、ただ竹を四本たて、菰をかけてぞゐたりける。……かやうに作りわろしとは申せども、足手のあかがり、のみ、虱、ひぢの苔にいたるまで、足らはずと云ふ事なし。もとでなければ商ひせず、物を作らねば食物なし。四五日のうちにも起き上らず、ふせりゐたりけり。

と、かう云ふ書き振りで筆をすすめてある此の物語は、純然たる日本人式の着想であつて、支那の小説の焼き直しであるとは思はれない。恐らく當時の零落した公卿などが、それこそ作者自身物臭太郎の如き生活をなしつつ、退屈紛れにこんな物を書いたのであらう。そして、幾分そのせゐもあらうが、作者は此の手に負へない怠け者の主人公を擯斥しないのみならず、その物臭さ、不潔さ、横着さに、一種の掬すべき愛嬌を持たせてゐるのである。隣り近所の人人からは爪弾きされ、土地の厄介者のやうに書いてはあるものの、乞食かと思へば地頭の威力を怖れない程の氣骨があつたり、馬鹿かと思へば時の帝の叡聞に達する程の和歌の才能があつたりして、たうとうしまひには御多賀の大明神と云ふ神様にまで祭られる。

昔、嘉永年間にペルリの船が浦賀へ來たとき、彼等が日本人について第一に感心したことは、他の亞細亞民族と違つて如何にも綺麗好きであり、港の町筋や家家の掃除がよく行き届いてゐると云ふ點にあつた。左様にわれわれ日本人は東洋に住む人種中では最も活動的であり、最も怠け者でない筈であるが、それでもなほ此の「物臭太郎」の如き思想を持ち、文學を持つてゐるのである。「怠ける」と云ふことは決して褒めた話でなく、誰しも「怠け者」と云はれて名譽に思ふ者はないが、しかしその一面に於いて、年中あくせくと働く者を冷笑し、時には俗物扱ひにする考へは、今日と雖も絶無ではない。

○ 此處まで書いて來て想ひ出したのは、近頃數日に互つて大阪毎日新聞紙上に連載されてゐる

る「米國記者團から見た日本と支那」と云ふ記事である。此れは最近アメリカの新聞記者連が東洋へ視察旅行に来て、歸國の後にその偽らざる感想をいめいの紙上で發表した中から、大毎社の高石眞五郎氏が面白さうな部分部分を紹介されつつあるもので、今日迄のところでは主として支那の悪口が多く、まだ日本へはお鉢が廻つて來ないけれども、あの調子だと日本の方が支那よりずつと好感を持たれてゐるらしい。彼等は支那へ着くと早速、第一に汽車の不潔なことに呆れて、ひどく胸糞を悪くしてゐる。そのくせ彼等の乗つた車臺は決して普通の客車ではなく、張學良氏が彼等のために特に京奉鐵道中の最良の車輛を準備させたのだが、それにも拘はらず、彼等は満足に顔を洗ふことも髯を剃ることも出來ないやうな言語道斷な目に遭つた。これにはいろいろ絶え間なき國內の争亂とか、財政の窮乏とか、その邊の事情もあらうけれども、現今の滿洲は支那に於いて最も秩序の保たれてゐる裕福な地方であり、近年は内亂も終熄してゐる形であつてみれば、さしあたり辯護の足しになる口實はあるまい。かく云ふ私自身も、嘗て京漢鐵道の一等車に乗つて彼等と同じ經驗を嘗めた記憶がある。北平から漢口までざつと四十時間のあひだ、寢臺車に雨漏りがするくらゐはまだしもとして、尾籠な話だが何より困つたのは便所の掃除が不完全なこと、私は差し迫る必要に驅られながら何度も入口から引つ返したことがあつた。思ふにかう云ふ不潔と不規律とは、いつの時代を問はず支那人には免るべからざる通有性であつて、どんな進歩した科學的設備が移入されようとも、一とたび彼等の經營に委ねら

れば、忽ちそれが支那人獨特の「物臭さ」を帶び、折角の近代的な尖鋭な利器が東洋風な鈍重な物に化してしまふ。清潔と整頓とを文化の第一條件とするアメリカ人などの眼からは、許すべからざる無精とも横着とも見られるであらうが、支那人自身はちつとやそつとの不都合はあつても、用さへ足りれば済まして置くと云つた風な、傳統的な性癖を容易に改める様子もない。そして時に依つては、西洋人の極端な規則づくめと神経質とをうるさがるやうな氣味合ひも見える。歐米流の禮儀作法とし云へば事毎に反感を寄せ、自分の國の風習なら一夫多妻の制度をさへ是認してゐた晩年の辜鴻銘翁などは、定めしこんな事象に對しても相當の意見があつたであらう。さう云へば印度のタゴール翁、ガンデー氏などは何んと云ふであらうか。彼等の國も物臭さに於いては敢て支那に引けを取らないやうであるが。

なほ此れは餘談ながら、アメリカの記者は支那が外國から金を借りて元金も利子も拂はない不信を攻め、此の點に於て「南京政府はモスコの眞似をしてゐる」と云つてゐる。が、單に金錢上の問題ばかりでなく、不潔なことも此の兩國民は甚だ似通つてゐはしないか。但し此の方は執方が本家か分らないが、私の知る限りに於いて、白人のうちではロシア人が一番汚い。凡そロシア人の多く泊まつてゐるホテルの便所は、大概支那の汽車のそれと同じやうな觀を呈する。ロシア人が西洋人の中で最も東洋人に近いことは、此の一點でも證明されるやうに思ふ。

兎に角此の「物臭さ」、「億劫がり」は東洋人の特色であつて、私は假りにこれを「東洋的懶惰」と名づける。

ところでかう云ふ氣風は、佛教や老莊の無爲の思想、「怠け者の哲學」に影響されてゐるのであらうが、實はそんな「思想」などに關係なく、もつと卑近な日常生活の諸相に行き渡つてゐるのであつて、その根ざしは案外に深く、われわれの氣候風土體質等に胚胎し、佛教や老莊の哲學は寧ろそれらの環境が逆に生み出したものであると考へる方が自然に近い。怠け者の「哲學」や「思想」だけなら、西洋にだつて必ずしもないことはあるまい。古代のギリシヤにはデイオゲネスのやうな一種の物臭太郎もゐたが、しかしそれも哲學的見地から出發したところの學者としての態度であつて、日本や支那に無數にころがつてゐる物臭人種の如く、ただ何んと云ふ理由もなくぐうたらに日を送つてゐたのではあるまい。あの時代の克己主義の哲學と云ふものは、消極的ではあるが、物慾を征服しようとする一念が強く、多分に努力的、意志的であつて、「解脱」とか、「眞如」とか、「涅槃」とか、「大悟徹底」とか云ふ境界からは餘程かけ離れてゐるやうである。それから又、仙人だの隱者だのと云ふ者もないことはないが、彼等の多くは所謂「哲學者の石」を發見せんとするアルケミストの類であつて、恰も支那の葛洪仙人の如く、「無爲」とか「怠け者」とか云ふよ

りは寧ろ「神秘」の觀念と結び付けられてゐるやうに想像される。

近代に於いて「自然に復れ」と云ふ説を唱へたジャン・ジャック・ルソーの思想は、幾分老莊のそれに相通ふところがあると云はれるが、私は、實は、それこそ怠け者のためにまだ「エミール」一冊をすら讀んだことがないので何んとも云へない。しかしさう云ふ思想や哲學はどうであらうとも、實際の日常生活に於いて、西洋人は斷じて「物臭」でもないければ「怠け者」でもない。それは彼等の體質、表情、皮膚の色、服裝、生活様式等、あらゆる條件からさうなつてゐるので、たまたま何等かの事情のために不潔や不規律を餘儀なくされることはあつても、東洋人が懶惰のうちには或る安らかな別乾坤を打開するやうな心持ちは、夢にも理解し得ないであらう。彼等は富める者も、貧しい者も、遊ぶ者も、働く者も、老人も、青年も、學者も、政治家も、實業家も、藝術家も、労働者も、等しく進取的、活動的、奮闘的である點に於いて差別はない。

「東洋人の精神的若しくは道徳的」と云ふのは果して何を意味するか。東洋人は浮世を捨てて山の中へ隱遁し、獨り冥想に耽つてゐるやうなのを聖人と云ひ、高潔の士と云ふ。しかし西洋ではそんな人間を聖人だとも高潔の士だとも思はない、それは一種のエゴイストに過ぎない。われわれは勇ましく街頭に出で、病める者に藥餌を與へ、貧しき者に物資を惠み、社會一般の幸福を増進する爲めに身を犠牲にして働く人を、眞の道徳家であると云ひ、さう云ふ仕事を精神的の事業と云ふのだ。」と、大體かう云ふ趣意のことをジョン・デ

ユウイが書いてゐたのを讀んだことがあるが、これが西洋に於ける一般の考へ方の標準、常識であるとするれば、恐らく「怠ける」と云ふこと、「何もしないのである」と云ふことは、彼等の眼から見て悪徳中の悪徳であらう。われわれ東洋人と雖も、「怠けること」が「働くこと」より精神的だと極め込んでゐる譯ではないから、此のアメリカの哲學者の説に正面から反對する氣はないし、さう堂々と開き直つて來られると挨拶のしやうにも困るのだが、いつたい歐米人の「社會のために身を犠牲にして働く」と云ふのはどんな場合を指すのだらうか。

たとへば基督教の運動に「救世軍」と云ふものがある。私はその事業なりそれに携はるる人に對して敬意をこそ抱け、決して反感や惡意を藏する者ではない。しかしその動機は如何に拘はらず、ああ云ふ風に街頭に立つて激越な、早口な、性急な口調で説教したり、自由廢業の援助に奔走したり、貧民窟を軒並みに叩いて慰問品を贈つたり、一人一人行人の袂を捉へて慈善鍋への寄附をすすめピラを配ると云ふやうな、せせこましい、鎖々屑々たる遣り方は、不幸にして甚だ東洋人の氣風に合はない。それは理窟を超越した肌合ひの問題であつて、東洋人にはお互ひに解つてゐる筈の心理である。ああ云ふ運動を見せられると、われわれは足元から追ひ立てられるやうに忙しい氣持がするばかりで、少しもしんみりした同情心や信仰心が湧いて來ない。人はよく佛教徒の布教や救濟の方法が、基督教に比べて退嬰的なのを攻めるけれども、實はあの方が終局に於いて國民性に叶つてゐるのであ

る。鎌倉時代の日蓮宗や蓮如時代の眞宗がいかにか積極的、能動的であつたと云つても、歸するところは七字の題目や六字の名號にあつて、ああ云ふ風に現世的な枝葉のことにまで係はつてゐたのではあるまい。禪宗の道元の如きは「佛教のための人生であつて人生のためめめ佛教でない」と云ふ風に考へてゐたらしい。基督教とは千里の差があるやうに思ふ。諸葛孔明が玄徳に三度も草廬を驚ろかされて、仕方なしにその重い腰を持ち上げたのは三國誌でお馴染みの話である。われわれは、もし孔明が玄徳に引つ張り出される迄もなく、もつと早くから世に出て活動してゐたとしたら、それも亦結構な事だと思ふが、いくら玄徳に懇請されても逃げ隠れして現はれずにしまひ、閑雲野鶴を友として世を終つたら、その心持ちにもなかなか同情出來るのである。支那では昔から「明哲保身の道」と云ふ言葉があり、争亂を避けて一身を全うするのも、亦一つの處世術と考へられてゐる。戰國の世に蘇秦が錦を着て故郷へ歸り、「我をして負廓の田二頃あらしめば豈六國の相印を佩びんや」とか何んとか云つて威張つたと云ふ話があるが、立身出世して六國の相印を佩びるのもいいけれども、負廓の田二頃を耕しつつ生涯田舎に埋れることも悪くはない。但し、こんなことを云つて得意がる蘇秦と云ふ男は、何んだか此の頃の代議士みたいで、孔明などに比べると大分品格が落ちるやうである。事實東洋に於いては、蘇秦型より孔明型の人物の方が、單に品格ばかりでなく、本質的にも傑れてゐる例が多いのである。

私は此の頃、いろいろの映畫雜誌に載つてゐるホリーウツドのキネマ・スタアたちの寫眞を見てしばしば變な氣がすることがある。と云ふのは、彼等の顔を大寫にした肖像を見ると、殆んど一人の例外もなく、悉く齒を露はして笑つてゐる。そして此れも亦一人の例外もなく、その齒がどんな俳優のでも實に見事に、眞珠のやうな粒が揃つて眞つ白に竝んでゐるのである。が、彼等の表情を仔細にじつと視詰めてゐると、その笑ひ顔がどうしても笑つてゐるやうには思へないで、無理に可笑しくも何んともないのに唇を開けて、齒並びを見せびらかしてゐるやうにしか取れないのである。よく日本の女の兒があくたいを吐く時に「いーッ」と云つて齒を出す、ちやうどあれと同じである。その感じが、女優の場合にはそれほど極端でないけれども、俳優の場合には特に顯著である。こんな氣持ちのするのは大方私一人ではあるまい。讀者諸君がもし疑はれるなら、早速「クラシック」でも開いて試して御覽になるといい。一遍さう思ひ出したら、どの俳優の肖像でも「笑ひ顔」が忽ち「齒をムキ出してゐる顔」に見えること甚だ妙である。

文化の進んだ人種ほど齒の手入れを大切に、齒列の美しさ如何に依つてその種族の文明の程度が推し測られると云ふ。それがほんたうなら、齒科醫學の最も進歩したアメリカこそは世界一の文明國であり、かのわざとらしい無氣味なる笑顔を作る俳優たちは「己は

此の通りの文明人だぞ」と云ふところを誇示してゐるのかも知れない。そして私の如く生れつきの亂杭齒の持ち主で、それを療治しようとしてもしない者は、嘗て故大山元帥のあばた面がさうされたやうに、手もなく未開人の標本にされても仕方がない。尤も此の頃は日本人でも私のやうなのは例外であつて、少し氣の利いた都會には何處へ行つてもアメリカ人仕込みの齒科醫の店が繁昌してをり、中には腦貧血を起すぐらゐるは覺悟の前で立派に使用に堪へる天賦の齒を抜いたり切つたりして人工的の裝飾を施す。そのせむか知らぬが近來都會人の齒は日増しに美しくなつて昔のやうな亂杭齒や八重齒や茄子齒なすびはめつきりと少くなつた。男女を問はず、禮儀や容姿に氣を付ける人は、齒研き一つ買ふにしてもコリノスだとかペソデントだとか、アメリカの舶載品を使つて、念の入つたのは朝夕二度も齒を研く。だから日本人の齒は、一日一日と眞つ白に眞珠色になり、それだけアメリカ人に近く、文明人になりつつある。人に快感を與へることを目的とする以上、これは悪いことではない。が、元來日本では八重齒や味噌齒の不揃ひなところに自然の愛嬌を認めたもので、あまり色の眞つ白な齒がズラリと綺麗に列んでゐるのは何んともなく酷薄な、奸黠殘忍な感じがするとされたものだつた。それで、東京、京都、大阪等の都會の美人と云ふものは（いや、男でもさうだが）大體に於いて齒の性が悪く、且不揃ひである。殊に京の女の齒の汚いことは殆んど定説になつてゐる。私の知るところでは却つて九州あたりの邊陲の人に齒列の美しいのが多い。（だから九州の人は薄情だと云ふのではないから、怒つてはいけ

ない。又老人などは、煙草のやにで黄色く汚れて、手摺れのした象牙のやうな色をしてゐるのが、白毛交りの疎髯の隙から見えたりするといかにも老人らしく、皮膚の色ともよく調和して、のんびりした、悠悠迫らざる感じを抱かせるもので、中には一本や二本ぐらゐる抜け落ちたままに捨ててあるのも、決してそんなに見苦しいものではない。今ではかう云ふ黄色い歯を持つ老人は、田舎へでも行かない限り日本では見られなくなつてしまつたが、支那や朝鮮へ行けばザラにある。老人の歯の眞つ白に揃つてゐるのは、少くとも東洋人の容貌には調和しない。入れ歯をするにも成るべく自然に近いやうにすべきで、年寄りのくせに餘り若がつて綺麗にしたのは、「四十過ぎての厚化粧」で、へんにイヤ味なものである。

上山草人の話をきくと、アメリカでは禮儀作法が實にやかましい。男子が女子の前で肉體の一部を見せてならないことは勿論、鼻をかんでも啜つても咳をしてもいけない。だから風邪でも引いた時は何處へも出られず、一日家に籠つてゐるより仕方がないと云ふ。此の調子だと、今にアメリカ人は鼻の穴から唇の穴まで、舐めてもいいやうにキレイに掃除をし、垂れる糞までが麝香のやうな匂ひを放つやうにしなければ、眞の文明人ではないと云ひ出すかも知れない。

此れと似たやうな話は、嘗て故芥川君から又聞きしたのだが、成瀬正一氏が獨逸で或る

家に客となつて、芥川君の「或る日の大石内藏助」をその場で譯しながら讀んで聽かせた時、「内藏助は立つて厠へ行つた」と云ふ句に行き當つてハタとつかへた。そしてたうとう

「厠」と云ふ語を譯さずにしたつたと云ふのである。ポール・モーランの小説などには「厠」と云ふ語がちよいちよい出て来るから、近頃の佛蘭西あたりはそれ程でないのもあらうが、どうも歐米人と云ふものは斯う云ふことに變に氣を廻す癖があり、それを文明人の資格と心得てゐるらしい。

トルストイの「クロイツェル・ソナタ」を讀んだ人は御承知であらう。あの中で、あの小説の主人公は歐羅巴の所謂文明人の生活振りを口を極めて批難してゐる。彼等の日常の食物や婦人の服装等を見ると、甚だしく刺戟的、積極的で、どうしても劣情を挑發する目的にしか出來てゐないのに、一方に於いて禮儀作法をやかましく云ふのは虚偽である。と、今その本が手元にないのでハッキリ想ひ出せないが、たしかさう云ふ意味のことで、私はあれを讀んだとき、さすがにトルストイはロシア人であると思つた。

實際、紳士が夜會の席などで、足枷手枷を箴められたやうな禮装をして、あの誘惑的な婦人の服装を前にしながら、オクビをしてもシャツクリをしてもスープをすすする音を立ててもいけないなどと云ふ禮法に束縛されて食卓に就いたのでは、いかに善盡し美盡しの料理

を竝べられても何んの御馳走になるであらう。そこへ行くと支那人の宴會は、「食ふ」「飲む」と云ふ目的のために大概な不作法を許容する。いかに騒騒しい音を立てても床やテーブルをどんなに汚しても差支へなく、夏など南の方へ行けば、主人から先に上衣を脱いで、腰から上は素ツ裸になる。日本も此の點に於いて支那と大した變りはない。ホテルの食堂と云ふものは、家族的で、花やかで、舊式な旅館の個人主義なのよりいと云ふ人がある。しかしながら、あれは紳士淑女が服装を見せびらかし、虚榮心を満足させる爲めの處で、食ふ方は二の次ぎにされてゐるやうに見える。浴衣がけで脇息に凭れたり足を投げ出したりしてたべる方が胃の腑はたしかに喜ぶのである。

之を要するに、西洋人の「文明的施設」と云ひ、「清潔」と云ひ、「整頓」と云ふのは、あのアメリカ人の齒のやうなものではないのであらうか？ さう云へば私は、あの白い汚れ目のない齒列を見ると、何んとなく西洋便所のタイル張りの床を想ひ出すのである。

今日われわれが惱んでゐる二重生活の矛盾と云ふことも、衣食住の様式と云つたやうな末節の點にあるのではなく、その由來するところはもつと眼に見えない深い原因に依るのだと思ふ。つまりわれわれは絶対に疊のない家に住み、朝から晩まで洋服を着、洋食を食ふやうに努めてみても、なかなかそれが續けられないで、しまひには洋室に火鉢を持ち込ん

だり絨毯の上へすわつたりするやうになるのは、矢張り何んと云つても東洋人の持ち前たる「ふしだら」や「億劫がり」が心の奥に根を張つてゐるからである。第一われわれは食事の時間を規則的に極められることに苦痛を感じる。晝間事務所で働く人は、その間だけ已むなく規則的になるが、家庭へ歸れば直ぐ不規則になる。又さうしなければ本當に落ち着いて休息し、一杯やりながら物を食ふと云ふ氣になれない。だから勤め先で晝飯を食ふ多くの日本人は、ほんの辨當代りに、簡単な物を大急ぎで掻つ込んで置くだけであるが、神戸や横濱に住む西洋人はさうではない。近い所に家庭のある者は可なり忙しい思ひをし、でも必ず一定の時間に家に歸り、食堂に打ちくつろいで食事をし、酒を飲み、そして又時間迄には事務所へ歸る。そんな慌しい思ひをして何が面白いと云ひたいけれど、彼等はさう云ふ規則づくめに馴れてゐるのである。それに洋食の料理法と云ふものが、何時何分に食堂へ這入るとキツチリ極めて貫はなければコックが困るやうに出來てゐる。だから日本人はしばしば「何時に召し上りますか」とコックに執拗に念を押されて腹を立てることがあるが、すべらをすればどんなに料理がまづくなつても、コックは決して責任を負はない。

一事が萬事である。食器にしても、箸や椀ならざつと洗つておけば濟むが、西洋料理は材料が脂ツこいのだし、銀器や磁器やガラスの器が多いのだから、始終ピカピカに研くやうに氣を付けなければならぬ。われわれは斯う云ふ無數の煩はしい拘束に堪へて迄も二重

生活を打破しようと云ふ氣持ちには、容易になりにくいのである。

イギリス人は老人でも朝から濃厚なビフテキを食ひ、そして盛んにスポーツをして精力を貯へ、體力を養ふ。此れも一つの養生法であるに違ひない。しかしながら無精な人間の眼から見ると、刺戟性の食物を多量に攝取するために、否でも應でも運動しなければ消化し切れないと云ふことになつては、スポーツも一種の苦役である。それだけの時間を靜かに讀書にでも費した方が、或ひはもつと有益であるかも知れない。況んやトルストイの言の如く、その刺戟のために一層性慾を煽つて煩惱の火を掻き立てる結果となり、精力の濫費を來たすとしたら、つまるところは食ふ物を減らして怠けてゐるものと孰方が善いか分らなくなる。

昔、と云つてもついわれわれの祖母の時代の頃までは、堅儀な家の女房と云ふものは殆んど一年中日の目も見ないやうな薄暗い部屋の奥にゐて、めつたに外へ出ることはなかつた。京大阪あたりの舊家では入浴さへ五日に一遍ぐらゐだつたと云ふ。そして「御隠居さん」と云はれるやうな身分になれば、一日べつたりと据わつたきり座蒲團の上をさへ動きはしない。今から思ふとそんな風にしてどうして生きてゐられたか不思議であるが、彼等のたべる物と云つては、ほんの僅かな、ごく淡泊な、鳥の摺り餌のやうなものだつた。粥、

梅干、梅びしほ、でんぶ、煮豆、佃煮、——私は今でも祖母の膳の上にあつたさう云ふ品品を想ひ出すことが出来る。彼女たちには彼女たち相應な消極的な攝生法があつて、多くの場合活動的な男子よりも長壽を保つてゐたのである。

「寢てばかりゐては毒だ」と云ふが、同時に食物の量を減らし、種類を減らせば、それだけ傳染病などの危険を冒す度も少い。カロリーのヴィタミンだのとやかましく云つて時間や神經を使ふ隙に、何もしないで寢ころんでゐる方が賢いと云ふ考へ方もある。世の中には「怠け者の哲學」があるやうに、「怠け者の養生法」もあることを忘れてはならない。

今大阪で一流に數へられる老檢校の話に、昔は地唄をうたふ場合に餘り大きな聲を出して發音を明瞭に云ふと、却つて下品だと云つて叱られたものだ云ふ。成る程さう云へば、琴や三味線の巧い檢校で聲量の大きく美しい人は、關西には割りに少い。が、さうかと云つて、樂器の方を大切にして唄はおろそかにすると云ふ譯ではない。じつと落ち着いて聞いてゐれば、聲は小さくても節廻しは細かく、餘情も心持ちも充分に行き渡つてゐるのである。ただ彼等は、今の聲樂家のやうにアルコールを節し、女色を節しても喉を大切にし、聲量の保存に努めると云ふ心がけない。つまり何處までも氣分本位で、そんな堅苦しい思ひをして唄つたのでは、唄つても愉快でないであらう。老年になれば聲量が減り、皺

噺れて來るのは自然の理であるから、敢てそれに逆らうとしないで、自分に心行く限り唄はうとするのであらう。實際本人に取つてみれば、酔つて陶然とした時にふと三味線を取り上げて唄ふのでなければ、何んの面白味もない譯である。かかる考へからすれば、人に聞えない程の微かな鼻聲で唄つてゐても、自分では技巧の妙を味はひ盡すことが出來、三味境に這入れるのであつて、極端に云へば聲を出さずに空想で唄つても事は足りる。自分が楽しむよりも人を楽しませることを主眼とする西洋流の聲樂は、此點に於いて何處か窮屈で、努力的、作爲的である。聞いてゐて羨ましい聲量だと思つても、その唇の動きを見てゐると何んだか聲を出す機械のやうな氣がして、わざとらしい感じが伴ふ。だから唄つてゐる本人の三味境の心持ちが聽衆に傳はると云ふやうなことはないと思つていい。これは音樂のみならず、凡べての藝術に於いて此の傾きがあると思ふ。

○ 誤解をされては困るが、私は決して怠け者になることを諸君にすすめる次第ではない。が、精力家とか勤勉家とか云はれることを鼻にかけ、或ひはそれを自分の方から押し賣りする人が多い世の中だから、たまには懶惰の美德——奥床しさを想起しても害にはなるまいと思ふのである。正直のところ、さう云ふ私自身が實はそんなに怠け者ではなく、先づわれわれの仲間うちでは勉強家の方であることは、友人諸氏が證明してくれるであらう。

私の貧乏物語

○ 新年早々、貧乏の話は縁起でもないがと云つたら、なに、そんなことはありません、お書きになるのは暮のうちですから、折柄原稿の催促に來た本誌の記者佐藤觀次郎君が極めて適切なことを云つた。實は先日佐藤君をつかまへてしみじみこぼした次第のだが、毎年々々、年末になると上京して金策に奔走するのが、久しい間の例になつてしまつてゐる。だから事情を知つてゐる東京の友達も、もう谷崎が出て來る時分だと云つたり、又掛け取りに來たのかいと冷やかしたりする。が、取るやうな掛けがあればいいのだが、取るべきものはイン・アドヴンスに取りつくして、その上にも尙融通をしようと思ふのだが、骨が折れる。君は東京の悪口を云ふ癖に、困れば結局東京へ出て來るぢやないかと云ふ者もあるが、残念ながらその通りで、何と云つても取引先の九分九厘までが東京の雜誌社や出版屋なのだから、まさかの時は駆けつけるより仕方がない。しかし全く、金の用でもなかつたら東京へなぞ來たくはないのだ。外の用なら何とか來ないで濟ませるやうにした

いだけども、こればかりは手紙で押し問答をしてゐたのでは埒が明かないし、出来る話も出来ずにしまふ恐れがあるので、不承々にやつて来る。さうして用が足りさへすれば、親戚故舊へは義理を缺いてもすぐ上方へ逃げ歸つてしまふ。さう云ふことが、年に一回、十二月だけではなくて、二三回、或は四五回はある。どうしてそんなに大金のいることがあるんです、何かよつほど無駄遣ひをするんでせう、と、中には忠告するつもりで尋ねてくれる人もあり、古い友人などは親身に心配してくれて、さういつ迄もその日暮らしい生活をしてゐるとはどうしたものか、少しは老後に備へることを心がけて貯金でもする氣にならないものか、第一君の歳になつてそれでは見つともないと云ふ。かう云ふ人達は、私が特に金銭に締めくくりがなく、右から左へばつくと使つてしまふやうに思ひ、暗にその點を批難するらしいのだが、しかし、まあ待つて貰ひたい、成る程私は、自分でも決して締めくくりがある方だとは思つてゐないが、それより何より、友人達は私の収入と云ふものを過大に見積つてゐるのである。印税や原稿料で莫大な上り高があるやうに考へ、その前提から無駄遣ひをするの貯蓄心がないのと云ふ結論を誘導するのである。これが抑もの間違ひであつて、先達も佐藤君に「せめて毎月千圓あるといふんだがなあ」と云つたら、けんな顔をして「へえ、千圓ありませんかねえ、無論そのくらゐはあると思つてゐましたが」と云ふのである。そこで具體的な數字を挙げ、千圓には遠く及ばない所以を説明すると、やう／＼納得してくれたが、佐藤君の如きジャーナリストにして猶且然り

なのは困ると思つて、その後某雑誌社の某氏々々などを掴まへて話してみると、大分誤解をされてゐたことが明かになつたので、これでは友人達が考へ違ひをするのも尤もだと思つた。

○
 断つておくが、千圓の月収がないと云ふのは茲數年來のことで、過去にはそのくらゐあつた時代もある。で、その時代に一旦膨脹した生活費をその後徐々に切り縮めることが困難なところから、斯くの如く始終赤字に悩むのでもあるが、しかし千圓の月収と云ふことは、それ程不當な慾望であらうか知ら。勿論五百圓でも三百圓でも食つて行けない筈はないから、千圓を基準にしての貧乏呼ばはりは贅澤だと言ふ人もあらう。又、金が欲しいなら通俗小説を書くがいゝ、貧乏に耐へる覺悟がなくて純文藝に志したのは矛盾だと云ふ意見もあらう。さう云はれれば即座に黙つて引き退るより外はないので、敢て千圓の月収を當然の權利だと主張するのでもないのだから、そこは安心して頂きたいが、それにしても何故に千圓が必要であるか、又何故に千圓を得ることがむづかしいか、と云ふ理由を、まあ愚痴だと思つて聞いて貰ひたいのである。

私は、文藝春秋の新年號に「職業として見た文學について」と題して、小説家稼業の必ずしも損な商賣でないことを論じ、更に進んで他の職業よりもいろ／＼有利な點があることを指摘してゐる。そのくらゐだから、自分が小説家になつたことを決して後悔してはゐないし、もしもう一遍生れ變つて來るとしても多分やつぱり小説家を志望するだらうけれども、あれは一般論であつて、此處に書くのは現在の私と云ふ特定な場合についてあるから、それとこれとを混同されては困るのである。そこで、今の私だけの苦情を云へば、もう少し怠ける時間、もう少し遊ぶ時間が欲しいのである。さう云ふと又、それは誰だつて欲しいと云ふだらうが、しかしわれ／＼小説家に取つては、此の遊ぶ時間が實は學問や修養をする時間であり、次の創作への準備をする時間であつて、これがなくては會心の作が書けないことぐらゐは、諸君も大概御承知であらう。然るに歳を取れば取るほど、此の遊ぶ時間が餘計欲しくなる。なせなら、若い時代には青年特有の空想力と放膽とで、知らないことでも知つたやうに書いて除けるが、老人になると、さう云ふ點が丹念にもなり、臆病にもなつて、物事を曖昧にしておくことが出來ず、合點が行くまで緻密に調べてからでなければ、筆が執れない。たとへば千利休を扱つた歴史小説を書くとして、若い作家なら一と通り参考書を漁つたゞけでも書き出すであらうが、此の頃の私なら、先づ三四年も茶の湯の稽古をしてから、と云ふことになる。而もほんたうの理想を云へば、豫め利休を書く目的で茶の湯を習ふのでなしに、茶の湯を習つてゐるうちに利休を主題にした物語が自ら

構想されて來ると云ふやうであつて欲しいのである。だから私は、自分が昔「麒麟」だとか「刺青」だとか云ふものを書いた當時を回想して、あゝ云ふ題材の小説を、よくあゝ造作もなく書けたものだと思ひ、若い時分の無鐵砲さに驚くのである。つまり老人は、それだけ空想の力が弱く、事實や經驗に頼らなければ創作熱が湧かないのであるが、しかし青年にも老人にもおの／＼長所があるのであつて、青年の無鐵砲さが成功する場合もあれば、老人の丹念さを必要とする作品もある。何はともあれ、今の私は既に老人なのであるから、一つの創作を準備するにも老人特有の凝り性と詮索癖とを發揮して、コッコツと石橋を叩いて渡るやうに、氣長にかゝるより外はないが、さうなると實に、調べてみたいもの、知つておきたいもの、經驗したいものが、實際もなく見出だされて來る。畢竟それは、生活の範圍を廣く、内容を豊富にすると云ふことになるので、従つて金がかゝるのである。

さう云ふ意味で、比較的充分な準備を以て取りかゝれたと思ふのは「蓼喰ふ蟲」であつた。あれは、ちやうどあれを書く前に、改造社その他から圓本が出て、私などには生れて始めてと云ふ巨額な金が這入り、所謂印税成金になつたので、あの前後四五年と云ふものは殆ど生計の苦勞を知らずに、極めて悠々たる月日を過したのであつたが、その數年間の生活があゝの作品を生んだのであつた。尤もそれは、あゝ云ふものを書かうと思つて、生活

をそれに適合させたのではない。私は、いつ、何を書かうと云ふ成心もなしに、たゞのんびりと、何も考へずに暮らした。さうして大阪毎日から長篇の依頼を受けた時にも、何か書けさうな豫感があつたゞけで、どんなものが出来るか自分にも分つてゐなかつた。第一回の筆を執るまではつきりしたプランの持ち合はせがなかつた。それでゐて、何の不安もなしに筆を執り、執つたらすら／＼と書け出した。考へないでも、筋が自然に展開した。あの時ぐらゐ、自分の内部に力が堆積し、充實してゐるのを感じたことはなかつた。これを以て思ふに、準備と云ふのは一定の腹案を立て、物語の構成に苦心したり場面や人物の出し入れを考へたりすることではないのだ。それも準備には違ひなからうが、さう云ふことは末の問題で、それより前の、仕事と云ふものを念頭に置かない悠々たる時間が、眞の準備なのだ。で、繰り返して云ふが、歳を取ると此の時間がだん／＼長くなるのである。しかしさう云つても、「蓼喰ふ蟲」の時のやうに裕福ならばいゝけれども、その後再び元の貧乏に復つてしまつたので、あれ以來それが一度も理想通りに行つたことがない。ないけれども私は、多少の無理を覚悟の上で、と云ふのは、借金が殖えたり支拂ひが滞つたりするぐらゐは我慢をして、頑張れるだけ頑張つてみる。「吉野葛」の時は、あれは早くから腹案らしいものがやゝ漠然と出来かけてゐたが、それでもそれから足かけ三年と云ふものは頑張りが通した。私は最初あのテーマを「葛の葉」と云ふ題で書きかけてみたが、吉野の秋を背景に取り入れ、國栖村の紙すき場の娘を使ふことが効果的であることに氣が付いて、

五十枚迄書いてから稿を捨てた。さうして、その年の秋の來るのを待つて、吉野山から國栖村に遊んだ。だが、たつた一回の旅行だけでは心もとない氣がしたので、翌年の秋の來るのを待つてもう一度出かけ、今度は暫く山の中に滞在した。その間には和泉の信田の森にも行き、古い遊女の手紙や身請けの證文などを手に入れるために道具屋や紙屑屋を漁つた。こんなことを云ふと苦心談めいて恐縮であるが、何も苦心を賣り物にしてゐるのではない。なせなら、それらの旅行や遠足や道具屋廻り等の行動は、それが一つの遊びであつて、必ずしも創作を書き上げるためにのみ拂はれた努力ではないから。しかし同時にさう云ふ遊びを許してくれないことには、思ふやうなものが書けないことも事實であつて、現に私は二三年來腹案のまゝで持ち越してゐるものが一つや二つはあるのである。

遊びの種類にもいろ／＼あつて、旅行や遠足ばかりではないから、費用も殆ど際限がない譯であるが、その上に一家を支へて行く經常費、弟妹その他の係累に對する仕送り、などと云ふものを勘定に入れると、千圓なら安いとは云へなくもない。しかしさう云ふ算珠盤の弾き方、乃至さう云ふ生活のしかたを贅澤と認める人々には、私の貧乏物語は成立しないことになるから、それを認めてくれる人々だけに、然らば何故その千圓を稼ぐのが困難であるか、と云ふ理由を聞いて貰はう。そこで、上に述べたやうな遊びの時間はそつくり

食ひ込みになるのであるが、その間を如何にして繋いで行くかと云ふと、印税、及び印税と原稿料との前借、それから諸種の支拂ひを先へ先へと繰り延べて行くこと云ふ手段、この三つより外にない。此のうち、正當な収入は印税だけで、他は悉く積極的か消極的かの負債であることは申すまでもないが、正當な収入だけでは到底支出をカバーするに足りないから、自然負債が殖えることになる。ところで、やがて一つの作品が完成された時に、その原稿料や印税を以て、遊びの間に生じた負債を償却することが出来るかと云ふのに、これがさう行かないのである。たとへば「吉野葛」であるが、前陳の如き準備の後に出来上つたものとして、あれは原稿用紙にすると百十枚の小篇でしかない。だから原稿料にしても知れたものだし、單行本にするのには枚数が足りない。さう云ふものを二三年に一度書いたのでは引き合ふ筈はないので、結局、こゝ數年來の私は、遊びの時間を次第に縮めて行つて、平均年に一回ぐらゐは、百枚乃至百五十枚程度の創作を書くやうになつた。けれども、それでもまだ借金が残るところから、苦し紛れにいろ／＼の手段を講ずるのである。われ／＼に取つて、何と云つても一番望ましいことは本が澤山賣れてくれること、即ち印税が這入ること、これは原稿料と違ひ、働かないで儲かるのであるから、私のやうな怠け者にはこれ程うまい話はないので、一度出版したものを、装釘を變へ、定價を變へ、出版書肆を變へ、廉價版、或は豪華版などと名目を變へて、二度も三度も出版する。二三の例を擧げるなら「蓼喰ふ蟲」は改造社から單行本として一度、全集の中の一編として一

度、春陽堂の廉價版叢書の一冊として一度、と云ふ風に三度出てゐる。「蘆刈」も二度、「春琴抄」も二度であるが、近いうちに又追つかけて、三度目、四度目が出るかも知れない。これらは書肆の勧誘に依る場合が多く、必ずしも作者が計畫するのではないが、さうして必ずしも金儲けのためばかりではないが、しかし今も云ふやうな事情がなかつたら、出したくないと思ふことも度々ある。少くとも一つの本の賣れ行きが止まつてゐないのに、その同じものを、それと餘り違はない定價で他の本屋から出すと云ふのは、出版道徳に上面白いことではないから、私に財産がありさへしたら、多分許しはしないであらう。いや、私ばかりではない、他の多くの作家諸君も、恐らく私と同感であらう。が、又世の中はよくしたもので、讀者の數は大體極まつてゐるのだから、形を變へて蒸し返したからと云つて、さう一つ本が一定量以上に賣れはしない。故に此の手段にも自ら限度があることを知らねばならない。

それから、こゝにもう一つ、私が貧乏してゐる重大な原因は、遲筆と云ふことに存するのである。これは原稿の催促に來る記者諸君にはいつも訴へてゐるのだけれども、その程度が如何に甚しいかと云ふことを本當に諒解してくれてゐるのは、私と起居を共にする家族の人達だけであつて、記者諸君などは好い加減に聞いてゐるらしいのが残念でならない。

實は私も、凝り性とか彫琢の苦心とかを看板にしてゐるやうに思はれるのが嫌であるから、くどくは説明しないのであるが、私の遅筆はそんな殊勝な理由よりも、主として體力の問題なのである。私はじつと一つことを考へ詰めると、精神的にも肉體的にも直きに疲労する。だから二十分とは根氣が續かない。これは若い時分から糖尿病があるせゐなのだと思つてゐるが、兎に角そんな次第であるから、原稿用紙に向つても、煙草を吸ふとか、湯茶を飲むとか、小用に立つとか、十分二十分置きぐらゐにいろ／＼な合の手が這入る。さう云ふ風にして一息入れては氣を變へないと、思考を集注することが出来ない。それで、たま／＼或る一個所に行き悩むと、此の、立つたり、坐つたり、飲んだり、吸つたりが、いよ／＼頻繁に繰り返される。一服吸つてみて五分か十分じつと原稿を睨みつけて、巧く行かないと今度は茶を飲んで又睨める。それでも駄目だと小用に立つて、ついでに庭を歩いて來てから又原稿にしがみ着く。行き悩み方が激しい時には、原稿が私を撥ね返してゐるやうに感ぜられて、ほつと溜め息をつきながら仰向けに臥轉んでしまひ、天井を視詰めたまゝ三十分、一時間を空費する。かう云ふことは私ばかりに限らないであらうが、私は殊に此の習慣がひどいのであつて、一時間のうち正味執筆に費す間は十分から十五分を出でまいと思ふ。尤もこれは創作の場合で、隨筆の時は別だけれども、此の計算が誇張でない證據には、文字通り一日かゝつて、と云ふのは、洗面と、食事と、入浴と、朝夕の新聞を読む時間以外は原稿と取つ組み合つてゐて、最も成績のよい時が四枚、悪い時

が二枚なのである。若い時分には十枚と云ふレコードもあつたが、此の數年來はますます衰へるばかりであつて、最近の記憶を辿つてみても、「春琴抄」と「蘆刈」が三枚半乃至四枚、「夏菊」が二枚半乃至三枚と云ふ程度である。が、未だに苦しかつたことを覚えてゐるのは、「盲目物語」を書いた時であつた。あの時は高野山に立て籠つて訪客を避け、一意専心仕事に没頭したにも拘らず、あの二百枚の物語を脱稿するのに、最後まで日に二枚と云ふ能率を越すことが出来なかつた。だからあの作品は、準備の時間は別として、百日以上、多分完全に四箇月を要してゐるのである。さうしてこれは、晝夜兼行、時には夜中の二時三時まで机に向つてゐての成績で、もしその間に客に接するとか、手紙を書くとか、散歩に出るとかしたならば、忽ち影響を來たすのである。

○
 もしも私に遅筆の病がなかつたならば、今の私が一日を費して書く分量を午前中にでも書き終へることが出来たならば、午後の半日は悠々自適出来るのであるから、特に「遊びの時間」と云ふものを設けるには及ばないであらう。事實、多くの作家達はさう云ふ風にして日々一定の仕事をした後に、散歩をするとか、讀書をするとか、友達に會ふとか、雑務を處理するとか、してゐるのであらう。又、人に依つては一箇月の仕事を一週間か十日の間にカタメて果たしてしまひ、殘餘の時日をのんびり暮らすと云ふ方法も取れよう。とこ

ろが私はさう云ふ時間の使ひ分けが出来ないのであるから、少し長いものを書き始めると、享樂方面のことは勿論、冠婚葬祭の義理までも缺くやうになる。それが一と月にも二た月にもなると、さうは世間と没交渉であられないから、いろ／＼邪魔が這入つて来る。さうするといよ／＼仕事の後れる。すると今度は、やつと仕事が片附いても遊びの時間を取る暇がなく、次の仕事にかゝらなければならぬ。斯くの如くにして昨今の私は、時間の上遊びと仕事とのけじめが付かなくなつてしまひ、毎日机に向ひながら、その間にちよつと手紙を書いたり人に會つたり散歩に出たり、座右にある書物を拾ひ讀みしたり、と云ふやうになりつゝある。従つて、仕事の方も遊びの方もしんみりと身に着かないで、始終そは／＼してゐるのである。

○
邪魔のうちでも何より辛いのは、一つの仕事に熱中してゐる時に、他の雑誌社から別の仕事を持ち込まれることである。かう云ふ場合には斷つてしまへばよいのだけれども、それが出来ないといふのは、何處の雑誌社にも不義理をしてゐるからである。早い話が、私は今月の文藝春秋と、改造と、中央公論とへ三つの隨筆を書いた。中でも文藝春秋のは未完であつて來月號まで續くのであるが、もし此の三つを書く代りに孰れか一つへ力を集注したならば、遙かに讀み應へのあるものが出来るであらうし、作者としてもどんなにその方が

望ましいか知れない。しかし雑誌社にしてみれば、金を貸した上に一年以上も引つ張られて、新年號にも間に合はしてくれないでは困ると云ふ、當然の理窟があるのである。で、私の遣り繰り算段と云ふのは、出版屋や雑誌社の間をぐる／＼廻りしながら、A社の借りが嵩んだ時分にB社で借り、B社の方が嵩んだ時分にC社で借り、C社の分が嵩んだ時分にそろ／＼A社へ戻るやうにする、と云ふやうな心づかひに費される。さうしてさう云ふ心づかひをする一方で絶えず原稿を書くのであるが、近頃ではABC等各社の借金がキレイになつたことは一度もなく、常に少しづつ何處の社にも残つてゐるのである。

○
最近、私が創作よりも隨筆の方を多く書くのは、隨筆ならば疲れた時には人を頼んで筆記して貰ひ、口授をしながら進められるので、以上のやうな邪魔や遣り繰り算段と闘ひつゝも、又その間に遊びの時間を適當に割り込ませつゝも、どうにかやつて行けるからである。されば、隨筆は私の遊びの時間を支へるところの手段であつて、正直を云へば創作の方が書きたいのであり、腹案も出来てゐるのだけれども、かう苦しくては中々腰を落ち着ける餘裕が得られない。などと、つい下らないことをしやべつてしまつたが、此の貧乏物語もさう云ふ事情で書いた原稿の一つであることを、宜しく御諒察願ひたいのである。

半袖ものがたり

一年ちうの季節を通じて、春と秋とはこつちが優つてゐることに論はなく、冬も六甲山麓のあたゝかさを思へば、秩父嵐の肌寒さには身ぶるひが出るが、夏だけはさうでないといふ人がある。私も長くその説に同感してゐた一人で、氣候、風土、人情、食物、何一つとして上方の方がよいと思はないものはないのに、たゞ東京の涼味ばかりは、毎年夏が来るたびに久しく忘れかねてゐた。全く、寒暖計の度盛からいふなら關西が關東より暑いことは争はれない。京都の夏のしのぎにくさは誰でも知つてゐる通りで、四條河原の夕涼みなどといふけれども、日が落ちてからは河原にそよとの風も吹かず、嵯峨、嵐山へ逃れてみても、あのこんもりした山の影や水の色が妙にじつとりといきれてゐるやうで、見た眼にも涼しくはないのである。これは阪神地方とても同じことで蘆屋から夙川あたりの、遠眼にもチカ／＼と射られるやうな所禿のした山肌を見ると、口の中が渴く心地がする。それに西國は、關東に比べて土の色が白いので、日中の照り返しは分けても強く、細かい灰の

やうな地質が歩くにつれて熱い砂ほこりを揚げる。この土の色は大阪から神戸、須磨と、西の方へ行けば行くほどますます／＼白くなり、照り返しもまた強くなり、そのうへ夕なぎといふ現象が一層規則的に起つて、毎日必ず黄昏の長い時間を占める。まして市中はひとしほであるから「町中は物の臭ひや夏の月」といふ句があるのは、船場や島の内邊の路地の暑さを詠んだものではないのかと、いつもさう思ひ／＼するのである。

しかし私が關西の夏を堪へ難いものに思ふ理由は外にもう一つあるのであつた。それといふのは、こつちの夏は主として風が西から吹くために、西の塞がつてゐる家は必ず暑いものとされ、借家でも借り手がないところから、大概の家が西の方に出口や窓を開けるのであるが、なるほどさうすれば風は自由に入る代りに、ともすると西日の脅威を受ける。が生憎なことに私は平素日光に直射されるのを嫌ひ、冬も北向きの窓の下で仕事をしないと頭が冴えて來ないのである。のみならず私のやうな職業の者に取つては、あまりに風通しのよすぎる部屋も、床の間の掛け軸が壁の砂土を落したり、原稿用紙がばた／＼めくれ上つたりして、とかく感興が亂れ易い。それゆゑ慾をいはして貰へば閑寂な僧堂の奥書院のやうな、日の目の遠い、空氣の冷たい、ひんやりとした廣間が望ましいけれども、さういふ贅澤が許されないなら、蒸し暑くとも風通しの悪い一室に閉ぢ籠つてじつと脂汗を掻き

つゝ辛抱する方が、創作には都合がよいのである。されば轉宅好きの私は、居を變へるごとに書齋に充てる部屋の方角や採光の工合が氣になつたので、或る年岡本の梅林の近くに土地を購ひ、理想通りの間取りの家を普請して、もう今度こそは落ち着ける、これで長年の放浪生活にもおさらばを告げることが出来たと、さう思つたのも束の間、分不相應な費用を投じた報いには自分の貧弱な収入では邸の維持が困難になり、足かけ四年後にはその土地家屋をきれいなつぱりと人手に渡して、阪神沿線の魚崎に假りの住まひを求め、再び元の佗びしい暮らしに戻つたのであつたが、實はその年、昭和七年の一と夏ほど、およそ今までに暑いと思つたことはなかつた。

○
その魚崎の寓居といふのは、もとより家賃五十圓にも足らぬ借家の、多くもあらぬ間數のうち的大部分が、西に向つて窓や縁側を持つてゐて、その縁の外には前栽といふのも名ばかりな十坪程の空地に、せいゝの低い杉、樅、かなめ、山茶花、もくせい、たいざんぼくなどがかこかしの隅にひよろ／＼と生えてゐるばかり、あとは生々しい土の地肌があつた。尤もそのあたりは阪神間でも早く開けた町であつて、前もうしろも家がたてこんであるのであるから、家賃のことを考へると、これだけの庭を取つてあるのさへなかく、親切なだけけれども、でもその庭から午後の日光が座敷へ

いちめんさし込むのであつた。當時二階を仕事部屋に充てゝゐた私は、晝も西側の窓といふ窓を悉く締めて、南に唯一つあいてゐた窓の下へ机を据ゑ、二月に移り住んでから、三月、四月、五月、六月と、入梅のすむころまではどうにか過して來たものゝ、七月も半ば近くなつては、屋根瓦の照り返しで餘りにも暑さがきびしいために、さすがに怵へきれなくなつて次ぎの間の四疊半の方の雨戸を開けた。最初はそれも、すこしだけ風を入れるつもりで、机の方へ日が來ないやうに細目に開け、陽脚が傾くにしたがつて隙間の位置を變へて行くなどしたものだけれども、だん／＼炎暑が加はるにつれて、一寸あけたのが二寸になり、三寸になり、三枚の雨戸を一枚あけ放し、二枚あけ放すといふやうにまでなつて行つた。しかしそんな風にしてでも二階はいくらか優しであつたが、下の茶の間と八疊とは、縁側から斜にさし込む日の光をどうにも防ぎやうがなかつた。殊に四時から六時過ぎまでは、活動寫眞の映寫機から出るやうな強い明りが疊から壁へ這ひ上つて來て、足の踏み入れ場もないのであつた。私は岡本の家を建てたときに京都へ逃へて作らせた簾が、それもあらかたは邸に附けて賣り拂つてしまつた残りだが、大阪の知人の藏に預けてあつたのを思ひ出して、あるだけ取り寄せて、縁側の外へ一と側吊り、座敷と縁側の境のところにもう一と側吊り、その二た側の簾を一杯に垂らして辛くも凌ぎをつけたのであつたが、あの一と夏の暑さばかりはいまだに忘れられないのである。

だが、それから後、去年の夏は岡本の前の邸から七八町東の山の麓に家を借り、今年の夏は阪神沿線の打出と蘆屋との間の、舊國道に近いところに移つて來、かく年月を送るにつれて、あの魚崎の一と夏ほどには暑さがこたへなくなつたのは、いつか體がこちらの氣候に馴れてしまつたせゐであらうか。兎にも角にも今の私は、關西の夏にむしろ擲すべき情趣を感じて、その暑さゆゑになほ愛着を覺えつゝある。さういへば京の祇園祭は毎年七月中旬の、炎天の日に行はれるのが慣例であるのに、或る年秋に延ばしてみたと、一向祭禮の氣分が湧き立たないのみか、その年の冬市中に惡疫が流行したので、明るる年から再び夏に改めたといふ話を聞いたことがあるが、何といつても夏はせいゝ夏らしい方がよいのであつて、もし三伏の炎熱に喘ぐ苦しみがなかつたら、あの京洛の秋の魅力がどんなにか減殺されるであらう。されば昨今は麥茶と盞團扇と蚊遣線香の生活に自らなる樂みを見出しながら、やがて涼風の訪うて來る日を心待ちにしてゐるのである。

大阪の人が夏着るものに、「半袖」といふ一種の簡易服がある。見たところは襦袢に筒袖を附けたやうな仕立で、袖はやう／＼肘を蔽ふに足る短さ、裾も膝頭の下一二寸のところ

止まり、上前と下前とを付け紐で結ぶ仕掛けであるから、帯を締める必要がない。地質はこれといふ定まつた布地があるのではなく、何事にも費えを省き廢れた物を利用する土地柄のこととして、上布、黄平、平絹、縮、薩摩紼、久留米紼等、絹でも木綿でも、何によらずもはや使用に堪へなくなつた衣服の古ざれを以て作る。これを着るには、下に半袖の夏シヤツと半股引を着、毛絲の腹巻をするのが普通で、素裸も同然な不恰好な姿が下から透いて見えるのであるから、餘り體裁のよいはずはなく、あのアツパツパとかいふ下女の夏服と兄たり難く弟たり難いものだけれども、丁稚や番頭はいふまでもなく、隨分商店の主も着、店先での應對は勿論のこと、時にはそのまゝ註文取りなどの用たしにも出かける。私は初めて關西へ來たころ、此のえたいの知れぬ服裝に眉をひそめて、さういふ不作法な上ツ張りを着たまゝなりふりもなく戶外を歩く町の人々を、外國人を見るやうな一種異様な眼をもつて眺め、大阪人はどこか支那人に似てゐるといふ東京側の惡口を痛切に思ひ出したのであつたが、事實、東京には半袖といふ言葉もなければ、ましてあのやうな服裝などは知られてゐない。それは恐らく東京の夏があゝの不作法を大目に見るほど暑くないのにもよるのであらうが、さういふ事情がないとしても、もと／＼イキや見えを貴ぶ東京の人々、殊に近ごろはインテリ趣味とかいふものが流行つて、何事にも智識階級ぶることを喜ぶあの都會の市民たちに、あゝいふ低級な庶民くさい風俗が氣に入るはずはないのである。

東京とても土用に入れば相當に暑い日がつゞくから、私の幼い時分などは、二十歳前後の女までがちやうど芳年の繪にあるやうに浴衣の袖を腕まくりした。しかし彼らは不作法な中にも、傳法とか、鐵火とかいふことを忘れず、見た眼のすゞしさ、すが／＼しさを常に念頭に置いてゐたので、半袖のやうなぢむさいものを纏ふくらゐなら、袒^{はだ}ぬぎになるか、いつそ素ツ裸になつたのである。されば女の腕まくりにも肌の美しさを誇る氣分が手傳つてゐたことは、近代のモダンガールがワンピースの袖なしを着る心と、大した違ひはなかつたのであるが、私はさういふ東京人を一方に置いて、さて大阪の半袖を見ると、また此のくらゐこちらの人の特質を露骨に示してゐるものはないやうに思はれるのである。なせかといつて、東京の浴衣はたとひ手拭ひ地のものでも年々新しい品を買はなければならず、そのつど一反に一圓か二圓は取られるけれども、半袖は役に立たない古ぎれを始末するのであるから、費すところは裁ち縫ひをする手間だけで、それすら浴衣を縫ふほどの時間や勞力がかかるのではない。その上帯を締めずに済むといふことが何物にも優る輕便な點で、着た當人の肌ざはりのすゞしさは浴衣の比ではないのである。尤もすゞしいことをいふなら、裸に越すことはないやうなもの、まさか裸で商用にも出られないとすると、浴衣はあの通りだらしがなくて事務には適しないのであるが、半袖の方は結構間に合つて

ゐるのである。今大阪の町人があれを纏つて出歩いてゐる有様を見るのに、紙入、手帳、萬年筆等の必要品は大概腹巻の底に收め、なほそのほかの細々したものは下前の胸に附いてゐるポケットに入れて、一方の手に扇子を提げながら、或る者は當世風のカン／＼帽を冠り、或る者は絹紬張りの日傘をさして行く。その恰好は、何處か滑稽で、みすぼらしくて、氣の利いたものでないことは前にも述べた通りだけれども、實利に生きる大阪人は、他人の思はくを顧慮するよりはたゞ此の簡易服の重寶さと、着心地のよさを愛さうとする。さうして一般の人々も老舗の主が半袖姿で家業にいそしんでゐるのを見ると、何となく商賣ぶりの手堅さを思つて、その人と店とを信用せずには措かないのである。

○
ところで私が半袖といふものを自ら纏つて、つく／＼その恩惠を感謝したのは、あの魚崎の忘れられない夏からであつた。當時私は何と思つてあれを着る氣になつたのであらうか。最初の妻に別れてから後、二三年來浴衣を買つたことがなく、あるに任せて着てゐるうちに、その年の夏はもはや使用に堪へるものが一枚もなくなつてしまつたのに、暑熱を犯して買ひに出るのが億劫なところから、何かあるもので済ます工夫を案じたからであつたらうか。それともまた、分けてその年は負債の利拂ひや税金の取り立てに惱まされてゐたので、實は今いふ浴衣の金にも差支へるほどの不自由さから、大阪人のつましいやり方

を見様見真似に學ぼうとしたのか。或はほんの物好きからか。恐らくはそのいづれでもあつたのであらうが、私は平素不用の衣類を詰めてあるブリキ製の長持を開けて、あれかこれかと古着を引き出してみた揚句、先年土佐から二三匹取り寄せた地質のゴリゴリした黄平が、圖らずもまだ一反だけ反物のまゝ残つてゐたのを見つけ出して、試みに二つ仕立てさせた。さうしてそれを初めて着た日から、忽ち私は半袖の禮讚者になつてしまつたのである。

○
 見ては不恰好なものであつても、着ては嘸かし涼しいであらうことは、かねて想像してゐたけれども、しかしこの簡易服の餘徳は、たゞそれだけには止まらなかつた。なせなら私は、それを着た日から敢て肉體ばかりではなく、心の上の虚飾や見えや浅はかな偉りが除かれて、急に精神が自由の天地に濶歩し出したのを覺えたからである。私は自分が一介の庶民であることを知り、その分限に甘んじて謙讓の道を守るべきであることを悟つた。が、さう悟つたら貧苦も炎熱も恐るゝに足らない心境が開け、一朝にして身も魂も輕となつて來たのである。私はSといふ友人の奥さんに頼み、金太郎が着てゐる紺の腹がけのやうなものを白の富士絹で作つて貰つて、シャツや股引を着込む代りに、それを着た上へ半袖を纏つたのであつたが、追ひ／＼暑さが加はつて來ると、その腹掛けもうるさく

なつて、しまひには下帯一つの裸の上へ直かに纏ひ、真に一點のわだかまりもない胸中のすが／＼しさを、そのすが／＼しさの故に西日のさし込む借家すまひの暑くるしさを、ひたすら楽しんだのであつた。

○
 それからこつち年々夏が來る毎に私はあの時の二枚の半袖を持ち出して、代る／＼洗濯しては着るのである。されば地質のゴリゴリした硬い黄平であつたのが何十回となく洗つたために、今ではうすくしなやかになつて、それだけ肌ざはりも快く、まことに上等の越後縮にも換へ難い貴重な品になつたのであるが、朝も夕もたゞそればかりを着るところから、ついぞ浴衣に贅をつくす氣も起らなければ、めつたに手を通す機會もない。思へば私が上方の夏に馴れたといふのは、偏に半袖を着馴れた結果であるかも知れず、また大阪の土地と人との深い愛着を感ずる所以は、即ち半袖を愛する所以であるかも知れない。

厠のいろく

三五六

厠で一番忘れられない印象を受け、今もをり／＼想ひ起すのは、大和の上市の町で或る餛飩屋へ這入つたときのことである。急に大便を催したので案内を乞ふと、連れて行かれたのが、家の奥の、吉野川の川原に臨んだ便所であつたが、あゝ云ふ川添ひの家と云ふものは、お定りの如く奥へ行くと一階が二階になつて、下にもう一つ地下室が出来てゐる。その餛飩屋もさう云ふ風な作りであつたから、便所のある所は二階であつたが、跨ぎながら下を覗くと、眼もくるめくやうな遙かな下方に川原の土や草が見えて、畑に菜の花の咲いてゐるのや、蝶々の飛んでゐるのや、人が通つてゐるのが鮮やかに見える。つまりその便所だけが二階から川原の崖の上へ張り出しになつてゐて、私が踏んでゐる板の下には空気が、以外に何物もないのである。私の肛門から排泄される固形物は、何十尺の虚空を落下して、蝶々の翅や通行人の頭を掠めながら、糞溜へ落ちる。その落ちる光景までが、上からあり／＼見えるけれども、蛙飛び込む水の音も聞えて來なければ、臭氣も昇つて來ない。

第一糞溜そのものがそんな高さから見おろすと、一向不潔なものに見えない。飛行機の便所へ這入つたらこんな工合なのではないかと思つたが、糞の落ちて行く間を蝶々がひらひら舞つてゐたり、下に本物の菜畑があるなんて、洒落た厠が又とあるべきものではない。但し、此の場合厠へ這入つてゐる者はよいが、災難なのは下を通る人たちである。廣い川原のことだから家の裏側に沿うて畑があつたり、花壇があつたり、物干し場があつたりするので、自然その邊を人がうろ／＼する譯だが、始終頭の上に氣を配つてもゐられまいから、「此の上に便所あり」とでも棒杭を立て、置かなかつたら、ついうつかりして眞下を通ることあらう。とすると、どんな時に牡丹餅の洗禮を受けないとも限らないのである。

都會の便所は清潔と云ふ點では申し分がないけれども、かう云つたやうな風流味がない。田舎は土地がゆつたりとしてゐて、周圍に樹木が繁つてゐるから母屋と厠とを切り離してその間を渡り廊下でつないでゐるのが普通である。紀州下里の懸泉堂（佐藤春夫の故郷の家）は建坪は少いが、庭は三千坪からあるのだと聞く。私が行つたのは夏であつたが、庭の方へ長い渡り廊下突き出てゐて、その端にある厠が、こんもりした青葉の蔭に包まれてゐた。これだと臭氣などは忽ち四方のすが／＼しい空氣の中へ發散してしまふから、四阿にでも憩つてゐるやうな心地がして、不淨な感じがしないのである。要するに、厠はな

るたけ土に近く、自然に親しみ深い場所に置かれてあるのがよいやうである。叢の中で、青天井を仰ぎながら野糞をたれるのと餘り違はない程度の、粗朴な、原始的なものほど氣持がよいと云ふことになる。

○
もう二十年近くも前のことだが、長野草風畫伯が名古屋へ旅行をして歸つて來ての話に、名古屋と云ふ都會はなか／＼文化が進んでゐる、市民の生活程度も大阪や京都に譲らない、自分はそれを何に依つて感じたかと云へば、方々の家へ招かれて行つた時に、廁の匂ひを嗅いでさう思つたと云ふのである。畫伯の説に依ると、どんなに掃除のよく行き届いた便所でも、必ずほんのりと淡い匂ひがする。それは臭氣止めの藥の匂ひと、糞尿の匂ひと、庭の下草や、土や、苔などの匂ひの混合したものであるが、而もその匂ひが一軒々々少しづつ違つてゐる、上品な家のは上品な匂ひがする。だから便所の匂ひを嗅げば、略々その家に住む人々の人柄が分り、どんな暮しをしてゐるかゞ想像できるのであつて、名古屋の上流の家庭の廁は概して奥ゆかしい都雅な匂ひがしたと云ふ。なるほど、さう云はれてみると、便所の匂ひには一種なつかしい甘い思ひ出が伴ふものである。たとへば久しく故郷を離れてゐた者が何年ぶりかで我が家へ歸つて來た場合、何よりも便所へ這入つて昔嗅ぎ馴れた匂ひを嗅ぐときに、幼時の記憶が交々よみがへつて來て、ほんたうに「我が家へ戻つ

て來たなあ」と云ふ親しみが湧く。又行きつけの料理屋お茶屋などについても、同様のことが云へる。ふだんは忘れてゐるけれども、たまに出かけて行つてその家の廁へ這入つてみると、そこで過した歡樂の思ひ出がいろ／＼と浮かんで來、昔ながらの遊蕩氣分や花柳情調が徐ろに催して來るのである。それに、さう云ふと可笑しいが、便所の匂ひには神經を鎮靜させる效用があるのであると思ふ。便所が瞑想に適する場所であることは、人のよく知る通りであるが、近頃の水洗式の便所では、どうもそれが思ふやうに行かない。と云ふのは、他にもいろ／＼の原因があるに違ひないが、水洗式だと、清潔一方になつてしまつて、草風氏の所謂上品な匂ひ、都雅の匂ひのしないことが、大いに關係してゐるのであらう。

○
志賀君が故芥川龍之介から聞いたと云つて話された話に、倪雲林の廁の故事がある。雲林と云ふ人は支那人には珍しい潔癖家であつたと見えて、蛾の翅を澤山集めて壺の中へ入れ、それを廁の床下へ置いて、その上へ糞をたれた。つまり砂の代りに翅を敷いたフンシのやうなものだと思へば間違ひはないが、蛾の翅と云へば非常に軽いフワ／＼した物質であるから、落ちて來た牡丹餅を忽ち中へ埋めてしまつて見えないやうにする仕掛けなのである。蓋し、廁の設備として古來このくらゐ贅澤なものはあるまい。糞溜と云ふものはどんなに

綺麗らしく作り、どんなに衛生的な工夫をしたところで、想像すると汚い感じが湧いて来るものだが、此の蛾の翅のフンシばかりは、考へても美しい。上から糞がポタリと落ちる、バツと煙のやうに無数の翅が舞ひ上る、それが各々バサ／＼に乾燥した、金茶色の底光りを含んだ、非常に薄い雲母のやうな断片の集合なのである、さうして何が落ちて来たのか分らないうちにその固形物はその断片の堆積の中へ吞まれてしまふ、と云ふ次第で、先の先まで想像を逞しうしてみても、少しも汚い感じがしない。それともう一つ驚くのは、それだけの翅を蒐集する手数である。田舎だつたら夏の晩にはいくらでも飛んで来るけれども、今も云ふやうな目的に使用するのには、随分たくさん翅が必要なのである。さうして恐らくは、用を足す毎に一遍／＼新しいのと取り換へなければなるまい。されば大勢の人手を使つて、夏の間は何千匹何萬匹と云ふ蛾を捕へて、一年中の使用量を貯へて置くのであらう。とすると、とても贅澤な話で、昔の支那でもなかつたら實行出来さうもないことである。

○
倪雲林の苦心は、自分のたれたものを、絶対に自分の眼に觸れさせないやうにした、と云ふところに存するのであらう。勿論普通の厠であつても、好んで見ようとしなければ見ないで済ませるやうなもの、「恐いものを見たさ」ではなくて「汚いものを見たさ」とでも

云ふか、見える所にある以上はどうかした拍子に見ることがある。だから矢張見えぬやうな設備をするのに越したことはないが、一番簡単な方法は床下を眞暗にすることだと思ふ。これは何でもないので、汲取口の蓋をかつちり外れないやうにさへして置けば、もうそれだけでも可なり光線が防げるのだが、近頃はさう云ふ注意を怠つてゐる家が多い。尙その上に、床と溜との距離を遠くして上部からの光線が届かないやうにすることである。

○
水洗式の場合は、自分で自分の落したものを厭でもハッキリ見ることになる、殊に西洋式の腰掛でなく、跨ぐやうにした日本式では、水を流すまでは直ぐ臀の下にとぐる巻いてゐるのである。これは不消化物を食べた時など容易に発見することが出来て、保健の目的に叶ふけれども、考へて見れば不作法な話で、少くとも雲鬢花顔の東洋式美人などには、かう云ふ便所へ這入つて貰ひたくない。やんごとない上臈など、云ふものは、自分のおいどから出るものがどんな形をしてゐるか知らない方がよく、諷でも知らない振りをしてゐて貰ひたい。そこで、假りに私が好きなやうに便所を作るとすれば、矢張水洗式を避けて、昔風のものにするが、出来るなら糞溜を便所の位置から離れた所、たとへば裏庭の花壇や畑などのある方へ持つて行く。つまり、便所の床下からそこまで多少の勾配をつけて、土管か何かで汚物を送り込むやうにするのである。かうすれば床下は明りのさし込む口がな

いから、眞暗になる。瞑想的な、都雅な匂ひはほんのりするかも知れないが、不愉快な悪臭は絶対にしない。又、便所の下から汲み取るのでないから、用の最中に慌て、外へ逃げ出すやうな醜態を演ずる心配がない。野菜や花などを作る家では、かうして溜を別にした方が肥料を得るにも便利である。たしか大正便所と云ふのが此の式であつたかと思ふが、土地をゆつくり使ふことの出来る郊外であつたら、水洗式より此の方をおすすめしたいのである。

○
小便所は、朝顔へ杉の葉を詰めたのが最も雅味があるけれども、あれもどうかと思ふのは、冬だと夥しい湯氣が立つのである。それはその理窟で、杉の葉があるために流れるものが流れてしまはずに、悠々と葉と葉の間を傳はつて落ちるからであるが、放尿中生暖い湯氣が盛んに顔の方へ昇つて来るのは、自分の物から出るのだからまだ辛抱ができるとしても、前の人の直ぐあとなどへ行き合はせると、湯氣の止むのを氣長に待つてゐなければならぬ。

○
料理屋やお茶屋などで、臭氣止めに丁子を焚いてゐる家があるが、矢張厠は在來の樟腦かナフタリンを使つて厠らしい上品な匂ひをさせる程度に止め、あまり好い薫りのする香料を用ひない方がよい。でないに、白檀が花柳病の薬に用ひられてから一向有難味がなくなつたやうになるからである。丁子と云へば昔はなまめかしい連想を伴ふ香料であつたのに、そいつに厠の連想が結び着いてはおしまひである。丁子風呂など、云つたつて、誰も漬かる奴がなくなつてしまふ。私は丁子の香を愛するが故に、特に忠告する次第である。

○
學校で、「便所へ行きたい」と云ふことを英語では「アイ・ウォント・トゥー・ウォッシュ・マイ・ハンズ」と云ふのだと教はつたけれども、實際はどうであらうか。私は西洋へ行つたことはないが、支那で天津の英國人のホテルへ泊まつた時、食堂のボーイに「ホエア・イズ・トイレット・ルーム？」と小聲できいたら「W・C？」と大きな聲で聞き返されたのには面食つた。それよりもつと困つたのは、杭州の支那人のホテルで俄かに下痢を催したので、「便所は」と云ふと、ボーイが直ぐに案内してくれたのはよいが、生憎そこには小便所しかないのである。私はハタと當惑した。なせなら「大便所」と云ふ英語を教はつてゐなかつたからである。で、「もう一つの方だ」と云つてみたけれども、ボーイは悟つてくれないのである。外のことなら手眞似でも説明できようが、此奴は眞似をする勇氣がない、そのうちに愈々催して来るし、よく／＼困つた經驗があるので、かう云ふ場合に使ふ英語

を覚えておかうと思ひながら、實は今以て知らないのである。

使用中の厠を間違へて開けて、「あ、誰か這入つてる」と叫ぶことがある、此の場合の「誰か這入つてる」を英語で何と云ふか知つてるですか、——と云ふ質問を、すうつと前に或る席上で近松秋江氏が發したことがある。多分秋江氏は、ホテルか何處かの便所で西洋人の使つた言葉を聞いたのであらう。さう云ふ場合には「サムワン・イン」と云ふですな、——と、そのとき秋江氏は教へてくれたが、爾來二十有餘年に垂んとするけれども、まだ此の英語は實地に應用する機會がない。

濱本浩君が改造社の社員として京都に出張してゐる時分、或る時岡本の私の家を訪ねた歸りに、梅田から京都市の汽車の中で便所に這入つたが、ドアを強く締めた拍子に握りの金具が落ちてしまつたので、今度は開けることが出来なくなつた。怒鳴つても叩いても、進行中の汽車の中では聞きつけてくれる譯がない。仕方がないので、當分は外へ出られないものと覺悟をきめ、落ちた金具を拾ひ上げて、その先でコツ／＼とドアを叩いてゐた。すると乗客の誰かゝ氣がついて車掌に知らせたものらしく、京都へ着く前に開けて貰

ふことが出来たと云ふ。私は此の話を聞いてから、汽車の便所へ這入る時にはドアの開閉を亂暴にせぬやう、特に心を配ることにしてゐる。普通列車であつたら、最寄りの驛へ停まつた時に窓を開けて救ひを求め法もあるが、夜汽車の急行などでかう云ふ災難に遇ふと、何時間立ち往生をさせられるか分らないからである。

旅のいろく

三六六

たしか獨逸人であつたと思ふが、或る旅行家の外國人の話に、日本で一番西洋かぶれのしてゐない地方、風俗習慣建築等に古い日本の美しいものが最も多く保存されてゐる地方は、北陸の某々方面であるといふ。さうしてその外國人は、日本へ來るとその地方へ旅することを樂しみにしてゐるのだが、それが何處であるかと云ふことを成るべく人に知らせないやうにしてゐる。彼は著述家であるけれども、決して著書の中にその地の名を擧げない。と云ふのは、一遍その土地が世間へ知れると、都會の客が我もくくと押しかけるやうになり、地元でもいろく／＼な宣傳や設備をやり出す結果、本來の特色が失はれてしまふことを恐れるからである。食通などにもよく此の外國人と同じやうな心がけの人があつて、うまいもの屋を發見してもなか／＼友達に教へない。甚だ意地悪のやうだけれども、さう云ふ家は小體にチャム／＼と商賣をしてゐるうちがよいので、繁昌し出すと、直きに増築などをして外觀が立派になる代りに、材料を落したり、料理の手を抜いたり、サーヴィスがぞん

ざいになつたりする。だから誰にも教へないで、こつそり自分だけ食べに行く方が、いつ迄も樂しむことが出來て、その家をスポイルすることがない。實は私も、旅行に關する限り右の外國人の心がけを學んでゐる一人であつて、自分の氣に入つた土地とか旅館とかは、餘程懇意な友達にでも尋ねられる場合の外は、めつたに人に吹聴をせず、文章などに書くことは禁物にしてゐる。これは寔に矛盾した話で、たま／＼泊りあはせた宿が大そう居心地がよかつたり、待遇も親切なら宿泊料も低廉であつたりしながら、その割に繁昌してゐる様子もなく、世間に知れてゐないのを見ると、お禮心に大いに宣傳してやりたくないので人情であつて、自分の如き文筆を業とする者が、故意にそれを隠してゐたのでは、折角の心づくしが何の甲斐もないことになり、好意を仇で返すやうなものであるから、内心甚だ濟まなく思ふ時もあるが、それでも私は此の方針を曲げないことにしてゐるのである。

○
一例を擧げると、關西地方の某縣に某と云ふ町がある。そこは昔から螢の名所とされてゐた所であるが、近頃は宣傳が上手になつて、毎年初夏の季節になると、京阪の新聞紙へ上手な方法で廣告する。それに釣られて螢狩りに出かける都人士が少くないが、さて行つて見ると、螢などは一匹も飛んでゐないのである。あまり話が違ふから、町の人や旅館の女中などを掴まへて聞くと、まだ一週程早すぎるとか、十日程先とか、半月程とか、いろい

ろなことを云ふ。だが實際は既に螢の季節であるから、あさへすれば飛んでゐない筈はないのであるが、ほんたうを云ふともうその町には螢がなくなつたのである。土地の古老の話では、昔は名所であつたから澤山ゐたに違ひないが、近年遊覧客が殖え、旅館などが競うて大厦高樓を建て、町が繁昌するに従つて、年々少くなつて行つた。なせかと云ふのに螢は賑かな場所を嫌ふ。殊に電燈の光を何よりも嫌ふのであるが、生憎とその旅館の列んでゐるあたりは特別に電燈が多い。玄關や廊下等は勿論のこと、庭先から川のほとり、附近の山の麓の方まで無數に引いてある。まるで螢を追つ拂ふための設備のやうで、かう明るくては、いくら飛んで來たくても來られないし、又飛んで來たにしたところが、全く光を奪はれてしまつて、人の眼に見える筈もない。實に心なき業だけれども、土地の人達にしてみれば、成るべく多くの遊覧客を吸収しようとして宣傳する、宣傳すれば繁昌するから従つて旅館の数が殖える、殖えれば互に競争になるところから行人の眼を惹かうとして明煌々たる電燈を點せざるを得ない。斯くの如くにして、あたら可惜名所が有名無實になつてしまふ。で、滑稽なことには、廣告に欺されてやつて來た客の非難を免れるために、餘所で捕へて來た螢をほんの申譯ほど庭へ放すのである。それから又、滋賀縣下のMと云ふ所も、源氏螢とか云ふ粒の大きい螢の産地として名高く、これも近年盛んに宣傳してゐる。私は行つたことはないが、此の方は、毎年宮内省へ螢を献上するくらゐで、確かに澤山ゐることはゐるさうだけれども、その代り捕へることを禁じてあつて、犯すと科料に處せら

れると云ふから、結局螢狩を楽しむことが出來ない點では、前者と何等選ぶところはないのである。

○

瀬戸内海の、廣島縣だか愛媛縣だかに屬する部分に某と云ふ島がある。そこへ行くには、中國もしくは四國の港から、小蒸汽船に乗るのであつて、別府通ひなどの大きな船は寄らなから、京大阪の人たちはめつたに行かない。旅館が二三軒あることはあるが、いづれも小規模で、階下の店で雜貨や食料品などを商つてゐたり、運送屋を本業にしてゐると云つた調子のもものばかりであつて、旅籠賃も滅法安い。瀬戸内海の好きな私は、或る時或る事で偶然その島へ立ち寄り、次の船を待つ間一軒の宿屋で休息をしたことがあつたが、二人連れで、朝の七時から午後の四時まで二階の一室を占領し、その間に晝飯を食ひ、風呂をわざ／＼立て、貰つて、なんと勘定が僅かに二圓、一人一圓にしか付かないのである。と云つても、決して座敷が不潔であつたり、食物が氣味が悪かつたりするのではない。島であるから、魚は兎に角新しい。それに四國は蒲鉾のうまい所で、何處へ行つても蒲鉾さへたべてゐれば大丈夫であるが、その島でも伊豫で出來るのを賣つてゐる。私は風呂から上つたあとで、一寸晝寝を試みたが、寢道具の氣持のよいに感心した。大概の宿屋のは、外側にばかり絹や紬を使つて、中に古綿を詰めてある。だから見たところが綺麗なかはり

に、着ると重いのが普通である。然るにその宿屋のは、反對に外が木綿で中の綿が新しい、冬であつたから上に二枚かけて寝たが、此奴は嘸重からうと思つて載せてみるとさうでないので、始めて綿の上等なことが分つたのである。萬事がさう云ふ流儀であるのが氣に入つて、此の島に海水浴の出来る所がありますか、あれば家族づれで来てみたいかと云ふと、へえ、毎年神戸の西洋人の夫婦の人が、子達をつれて來られます、いつも此の二階を全部借り切つて、十日程滞在されますと云ふ。だん／＼聞くと、此處から一町程の海岸に、別に設備はしてないけれども、實に理想的な海水浴場があるのださうである。二階は廊下の右と左に一と間づゝ座敷があるだけだから、借り切つたと云つても知れたものだが、御滞在なら一日一人二圓でお泊め申しますと云ふ。そこで私は、その神戸の西洋人が矢張前掲の獨逸人と同じ理由で、誰にも知らせずに、自分達だけで此の島へ避暑に來る様子を、ひそかに想像したのである。今日、有名な海水浴場で水のキレイな所と云ふのは殆どない。元來はキレイな海であつても、大勢の人が泳ぐために汚く濁つてしまふのであるが、此の島の海水は透き徹るやうに清冽であると云ふから、それだけでも氣持がよからうと思ふ。又神戸から來るのに、全然汽車へ乗る必要のないのが、夏は非常に有り難い譯だが、その上その船賃が汽車賃に比べてべら棒に安いのである。そうして濱は閑靜であるから、着物を脱ぎ捨て、置いても盜まれる氣遣ひはなし、裸を見られる心配もない。尤も海へ漬かる以外に何の娛樂もなかつたら退屈であるが、御承知の如く夏の内海は池のやうに穏かであるから、

舟遊びが自由に出來、小蒸氣に乗つて附近の島々や四國中國の海港を訪れると云ふ樂しみもある。旁々、その神戸の西洋人は素晴らしい避暑地を發見し、こつそり享樂してゐるのであつて、雲仙だとか、青島だとか、輕井澤だとかへ、暑い思ひをして出かけて行つて、高い宿賃を拂ふよりは、ずつと頭が好いのである。

○
近頃の私は、電車や汽車の音響が完全に聞えない場所へ行つて、せめて一日だけでもゆつくり寝ころんだり考へたりしてみたいと云ふ要求を、しば／＼感ずる。さうしてそのために旅行慾が起るのであるが、さう云ふ條件に當てはまる場所も追ひ／＼無くなつて行くことと思ふ。試みに地圖をひろげてみても分る通り、狭くて細長い國土の上へ縦横に鐵道網が敷き廻されて、それが年々、血管の先が幾すぢにも岐れて行く様に隅々へまで伸びて行つて、寸土をも餘さない状態であつてみれば、汽笛の音の聞えない山間幽谷の範圍と云ふものは次第にちぢめられるばかりである。そこへ持つて來て、鐵道省、觀光局、ツーリスト・ビュウローあたりの宣傳機關が抜け目なく客を誘引するから、名所と云ふ名所が皆その土地の特色を失ひ、都會の延長になつて行く。私は山登りは嫌ひであるから日本アルプスの繁昌する様子を見たことはないが、元來山によさと云ふものは、人界を超越した雄大な感じ、人間に依つて汚されざる清い空氣を呼吸する點にあるのではないか。古人の萬化に瞑

合すると云ひ、天地の悠久を悟ると云ひ、神仙合一の境に遊ぶと云ふのが、山登りの趣味なのではないか。もしさうであるなら、今日の信越地方のやうに宣傳されてしまつたのは、山岳としての意義を失ふ譯である。昔、小島烏水氏などが始めてあの地方の雪窟の美を説いた時分には、富士山は誰も彼も行く俗悪な山であるからと云ふので、あの方面を開拓することが勧められたのであつたが、今ではあの地方の方が、富士山以上に俗悪であるかも知れない。小屋と云へば濟むものをヒユツテと云つたり、東京市中にでもあるやうな「何々荘」などと云ふ旅館が出来たりすることから想像しても、人界を超越するどころではなくて、最も人間臭い場所、田舎でありながら都會文化の尖端を行く土地柄になつてゐるらしい。それ故ほんたうに山の靈氣に觸れようとする人々、昔の大峰の行者のやうな、敬虔な心を以て山登りを志す人々は、成るべく世間に知られてゐない山岳地帯を物色するより仕方がないが、さうするのにはどうするかと云へば、先づ地圖をひろげてみて鐵道の網の目の比較的粗い部分に眼を付け、その範圍内にある山や谷を求め、勿論そんな所にある山は名山でもないから、峰の高さに於いて、谷の深さに於いて、展望の雄大さ、風光の秀麗さに於いて、アルプス地方の山々には及ぶべくもないであらうが、山高きが故に貴からず、人間臭や都會臭のないのを以て貴しとすれば、さう云ふ凡山凡水の方が却つて山らしい趣があり、俗塵にまみれた心や腸を洗つてくれるかも知れない。で、此のことは山の場合に限らないので、たとへば先に云つた螢の名所、櫻や梅の名所、温泉、海水浴場等、

すべて天下に著聞してゐる一流の土地は皆多少とも荒らされてしまつてゐるものとあきらかめをつけて、二流三流の場所を漁つて歩く方が、遙かに旅行や遊覽の目的に添ふのである。

さう云ふ譯で、しみじみとした佗びしい旅の味を楽しむ者には、宣傳機關の發達はむしろ邪魔になるのであるが、時に依つてはこれがために便利なこともないではない。と云ふのは、いつたい近頃は海よりも山の方が流行る、昔は暑いと云つては海、寒いと云つては海、胸の病があると云つては海へ行つたものだけども、昨今は、夏は山登り、冬はスキー、肺病患者にも紫外光線など、云つて、とかく山が持て囃される。私なんぞはつい眼と鼻の甲子園のスタンドをさへ覗いたことがないくらいで、スポーツのことには一向疎いのであるが、冬になると各地のスキー場の積雪の量が日々沿線の各驛に貼り出されるし、ラヂオでも放送されると云ふ有様を見てはどうしてあんなことにそんな大騒ぎをする値打ちがあるのかと、訝しまざるを得ないのである。が、あんな風に放送局や鐵道省までが力瘤を入れて提灯持ちをするところから、冬の休みに何處へ行かうかと迷つてゐる人達が、皆雪の積つた山の方へ浚つて行かれる。つまり、當節の宣傳は騒々しいお客をひと纏めにして一つの地方へ掃き寄せてくれる働きがある。先達も和氣律次郎君の話に、近來紀州の白濱が大々的の宣傳をやり出した結果、別府がすっかりさびれてしまつて弱つてゐると云ふこと

であつたが、もと／＼われ／＼は、新し物好きの、一時のお調子に乗り易い國民であるから、或る一箇所が鐘や太鼓でチャン／＼囃し立てると、どつとその方へ寄り集まつて、餘所の土地は皆お留守になつてしまふ。そこで、そのコツを呑み込んで、宣傳の裏を搔くやうにする、一方へ人が集まつた隙にその反對の方面へ行く、と云ふ風に心がけると、面白い旅をすることがある。何處そこはつきり指摘するのは趣意に反するから云はないが、大體に於いて、瀬戸内海の沿岸や島々などは、さう云ふ意味で閑却されてゐる地方ではないか。冬あの邊へ行つてみると、實にほか／＼して暖かい。阪神地方も暖かいけれども、あの邊は又ひとしほ暖かく、一月の末には早やちらほらと梅が咲き初めるし、蓬を摘んで草餅を作つたりなどしてゐる。そのくせ、避寒の客たちは白濱や別府や熱海などへ集まつてしまつてゐるから、何處の宿屋もひっそり閑として、寔に悠々たるものである。私は花見が大好きで春はどうしても絢爛たる花盛りの景色を見ないと、春の氣分をたんのうしないのであるが、これにも矢張今のコツで行く。如才のない鐵道省では、毎年山々の雪が融けてスキーが駄目になつた時分からぼつ／＼花の宣傳を始め、四月中は花見列車を出すのは勿論、次の日曜には何處が見頃とか何處が七分咲きとか一々揭示をしてくれるので、靜かな花見をしたい者は、さう云ふ場所を避けて廻ればよいことになる。それと云ふのが、何も花を見るのには名所の花に限つたことはないものであつて、見事に咲いた唯一本の櫻があれば、その木蔭に幔幕を張り、重詰めを開いて、心のどこかに楽しむことが出来るから

である。さうしてさう云ふ心がけになれば汽車や電車の御厄介にならずとも、たとへば私が住んでゐる此の精道村の裏山あたりの誰も氣が付かない谷あひや臺地などに、却つて恰好な花と場所とを見出すことがあるからである。

尙又、これだけは大阪地方の讀者諸君にそつとお知らせしたいのであるが、私は實は、桃の花の咲く時分、關西線の汽車に乗つて春の大和路を眺めることを楽しみの一つに數へてゐるのである。御承知の通り、あの方面を走つてゐる電車は花見頃には孰れの線も超満員で無理な人數を收容し、無理なスピードを出すせゐか、毎度間違ひを起すのであるが、さう云ふ時、試みに湊町を出て、先年地じりのあつた何とか云ふ村のトンネルを通り、柏原、王寺、法隆寺、大和小泉、郡山等の小驛を経て奈良へ行く汽車に乗つてみ給へ。大軌で四十分で行くところを、此の線の普通列車だと一時間と十二三分はかゝるのであるが、急行に乗つては意味がないので、御丁寧の一つ一つ停まつて行く汽車がよいのである。乗つてみて先づ驚くのは、電車の方はあんなに雑踏してゐるのに、汽車は殆んどがら空きで、一臺に數へる程しか乗つてゐない。三等でも大概さうだが、二等に乗れば間違ひなしである。ところで、そのゆつくりした座席に足を投げ出して、ガタンと停まつては又ガタンと動き出す悠長な車に揺られながら、霞にけふる大和平野の森や、丘や、田園や、村落や、堂塔

などの、武陵桃源風なけしきを窓外に送り迎へてゐると、いつの間にか全く時間と云ふものを忘れてしまふ。いつ奈良へ着くか、今何處を走つてゐるか、次は何の驛であるか、等を繰り返し、窓の外にはいつ迄も霞む平野が續きながら、日の暮れる時がないやうな氣がする。私は殊に、春雨の降る日の午後此の汽車に乗ることを好むのであるが、さう云ふ時は體がだるく慵^{もつ}くて、ついうと／＼と睡くなるまゝに居睡つてゐると、をり／＼ガタンと動き出す拍子に眼を覺まされる、すると窓ガラスが水蒸氣で曇つてゐて、外の平野には猫の毛のやうな細かい雨の脚が霞よりも暖かさうに濛々と立ち罩め、遠くの方の塔や森を包んでゐる。さうして奈良へ着くまでの一時間あまりと云ふものが、無限にのどかに感ぜられる。もしも時間に餘裕があれば櫻井線を迂廻して、高田、畝傍、香久山のあたりを通り、櫻井、三輪、丹波市、櫛本、帶解等の諸驛を経て奈良へ出て見給へ。大和めぐりなどと云つて、忙しい思ひをして方々を見て歩くよりも、結局此の汽車の中の數時間、而も無限の悠久を感ずる數時間の氣分が第一等であり、眞に千金にも換へ難い味があることを悟るであらう。然るに、ほんの僅かな時間と賃金の差を惜しんで、あれだけの人が電車へばかり殺到するのが、私には不思議でならないのである。スピトドアップと云ふことが時代の流行になつてゐるので、知らず識らず一般の民衆が時間に對する忍耐力を失ひ、じつと一つの物事に氣を落ち着けて浸りきることが出来なくなつてゐるのであらうか。さうであ

るならさう云ふ落ち着きを取り返すのも一つの精神修養だと思つて、一遍あの汽車へ乗つてみることをおすゝめしたい。

○

私は東京から大阪へ歸るのに、しば／＼夜の十一時二十分に東京驛を發車する三十七列車を利用する。此れは急行でなくて二等寢臺を連結してゐる唯一の大阪行列車であるが、今迄私は、間際になつて寢臺を申し込んでも賣れ切れてゐた例がない。それが下段を買ふのだけれども、春の休みだの年末だのどんなに混雜する時でも必ず買へる。大概な日は乗つてからでも間に合ふらしい。東海道線の寢臺車でこんなガラ／＼してゐるのは此の列車だけに見る光景であらうが、どう云ふ譯でさうなのかと云ふと、急行でないからなのである。此の列車は前記の時刻に東京を發して翌日の午前十一時四十五分に大阪へ着くから、所要時間が十二時間と二十分、普通急行に比べて一時間とは餘計にかゝつてゐないのである。現にその列車の直ぐ前が出る七列車、下關行急行と云ふ奴は午後十一時に東京を立つて、大阪着が翌日の午前十時三十四分、即ち十一時間三十四分を費してゐるので、大した違ひはないのだけれども、此の方は相當に繁昌する。これは一つには急行と云ふ名に欺かれてゐるのであり、急行以外に寢臺車を附けた列車があることを知らないせゐにも依るであらうが、矢張停車驛が多くて、ガタン／＼停まつて行くのを辛氣臭がるのが、第一の理由

旅のいろ／＼

なのであらう。尤も、乗つたら直ぐと寢臺へもぐり込んでしまへば、明くる朝の七八時頃までは何も知らない譯であり、京都から先はノンストップになるのであるから、辛氣臭いのは、大府邊から京都まで、時間にして三時間半程のところ、その間に急行列車より六つだけ多く停まるに過ぎない。今時の世智辛い人が、それんばかりの辛抱が嫌さに急行券を買ふと云ふのは馬鹿々々しいやうな話だけれども、しかしさう云ふ性急が多いお蔭での汽車が空いてゐることを思へば、一概に笑ふ譯には行かない。但し、普通列車では停まつたり動き出したりする度毎に眼をさまして寢付かれないと云ふ抗議もあるから、さう云ふ人には此の汽車はおすゝめ出来ない。だが又反對に、寢臺車のやうに動揺しないと寢られない癖がついてしまつて、我が家の寢臺の下へモーターを据ゑ付けたと云ふ極端な人もゐるのである。私はそれ程でもないけれども、元來非常に寢つきのよいたちであるから、汽車でも實によく睡る。上りの夜行ではいつも箱根の山を知らず、どうかすると横濱まで寢てしまつて、ボーイに二三度起されなければ起きないことがあり、現に去年の暮以來三回も上京してゐながら、先日燕で歸阪する時まで丹那トンネルを見たことがなかつた。そんな調子であるからして、私にはその三十七列車が寢に都合がよいのであつて、ゆつくり寢られるばかりでなく、明くる朝眼をさましてからが、又大變に工合がよい。私は大概午前八時ごろ、名古屋あたりで起きるのであるが、さう云ふガタ／＼列車の二等室などへ新たに乘つて來る客は殆んどない。而も寢臺車であるから、横に長い席を完全に一人で占領して

足腰を投げ出し、寢足りなければ又もう一度寢直すことも出来る。それに、此のあたり、——大垣、關ヶ原、柏原、醒ヶ井のあたりから米原へ出て、琵琶湖の沿岸を大津に至る風光は、もう幾度か見馴れてゐながらいつ見ても見飽きがしないのである。一體、これは私一人の感想かも知れないが、東海道を下つて來て、汽車の窓から見たところでは、名古屋までは家の建て方や自然の風物に東京の匂ひがするけれども、名古屋を越すとそれが全く跡を絶つて、はつきり關西の勢力圏内へ這入つたことを感ずる。で、寢臺車の中で一と夜ぐつすりと熟睡した後、ぱつと眼を覺ますともう窓の外がすっかり關西の景色になつてゐる、その朝の氣持ちが何とも云へない。私が東京へ出かけて行くのはどうせロクな用事でないせゐるもあらうが、滯京中の慌しい、埃ッぽい生活の連鎖が、此れで截然と切斷される。私は寢臺を片付けて貰つてからいつももう一遍寢直さうと思ふのであるが、關ヶ原邊の柿の木の多い村落の風情や、農家の白壁などが見え出して來ると、ついその方に見惚れて寢ることを忘れてしまふ。否、實を云ふと、なつかしい大阪の新聞を幾日振かで讀まうと思つて、名古屋の驛でボーイに買はせて置くのであるが、それさへ讀むことを放擲して、窓枠にしがみ着くのである。汽車は大垣を發してから、醒ヶ井まで通過して、米原で停まり、彦根で停まり、能登川で停まり、近江八幡で停まり、草津で停まり、大津で停まる。しかし私は決して辛氣臭くもなく、退屈もしない。燕なんかだと此の邊を非常な速さで走つてしまふのが惜しい氣がするが、此の汽車だと、關ヶ原を通る時もゆつくりと走るし、彦根

の城の天守を始め、安土、佐和山あたりの地勢の分るのも嬉しい。子供などを連れて乗るにも、せめて此のくらゐな緩さでないと、沿道の史蹟を説明するのに困難である。それで私は思ふのであるが、短時間に出來るだけ遠く走りをするスピード旅行の逆を行つて、狭い範圍を出來るだけ長くかゝつて見て廻る旅のしかたを、少し獎勵してみたらどうか。さう云ふ風にして歩くと、今迄平氣で通り過ぎてゐた土地に、意外な興味を見出すことがある。全然徒歩にする譯にも行くまいが、僅かな所を億劫がつて自動車を飛ばす癖が一番悪い。あれでは旅情と云ふものが皆無になるし、何處を通つても何も印象に残りはしない。

○

ついでながら、汽車に乗つて毎々不愉快を感じるのは、お客の公德心の缺乏である。これはいろいろの人が注意もし、提唱もしてゐる、殊に大朝の天聲人語子は最もしばしば警告を發してゐるやうであるが、成る程大阪人は此の點に於いて東京人よりも慥にだらしが無い。私は近頃何事にも大阪の方を最眞にするが、こればかりは東京人に劣る。現に大阪人自身が、地方を旅行中汽車や何かで大阪の人に行き遇ふと嫌な氣がする、と云ふ。なせなら、家族同伴で二等室に陣取りながら、廣い場席を傍若無人に占領したり、行儀の悪い恰好で飲み食ひしたり、無遠慮な聲でしゃべつたり、蜜柑の皮や折詰の残骸をそこらぢゆうに散らしたり、見ず知らずの人に話しかけたり、と云つた風な作法をする種族がある。

思ふと、それが必ず大阪人である。外の人には分らないでも、大阪人同士だと直ぐに分る。あの、お花見時の大軌電車や京阪電車で見かけるやうな亂暴狼藉を、他國へ來てまで平氣でやつてゐるのであるが、地元の郊外電車では皆がやるのだから仕方がないけれども、旅先でやられると、大阪人の缺點が露骨に眼に立つて、同郷人でありながら、つくづく愛憎がつきると云ふ。しかし東京人と雖も大阪人を嗤ふ資格があるのではない。蓋しわれわれの公德心の缺乏は、遠く封建時代の生活様式に胚胎してゐる由來するところが久しくもあり、又我が國の淳風美俗と結び着いてゐる一面もあるから、大いに酌量して然るべき事情もあるし、旁々完全に矯正することは容易でなからうが、それにしても汽車の中などの様子を見ると、亞細亞の盟主とか三大強國の一つとか云つてゐる一等國民も、からきし成つてゐない。三等客より二等客の方が尙ひどいと云ふ説もあるが、少くとも教養のあるべき人士が一般大衆と同じ無作法を演ずるとしたら、人に與へる不愉快さは同日の談でない。たとへば、實にちよつとした事だけれども、食堂へ行く時、便所へ行く時等に、通り道のドアをキチンと締めて行く者が無い。冬など、ほんの僅かな隙間があつても寒い空氣がスウ／＼這入つて來るのだし、まして便所の傍であると臭い風が襲つて來るのは分りきつてゐることなのに、後ろ手でボタンと締めたきり、振り返つても見ずに行つてしまふから、あとが大概一二寸はあいてゐるので、誰かがもう一遍締め直さなければならぬ。出入口の近所に席を占めた者は災難で、何回も此の役をやらされる。自分ばかりがやらされるの

旅のいろ／＼

は業腹だからと思つても、放つて置けば結局自分が寒い風や臭い風を真先に浴びることになるので、どうしても手を出してしまふ。誰しもかう云ふ忌ま／＼しい目に遇つてゐる筈でありながら、自分が通行する時は平氣で他人に迷惑を與へる。最も腹が立つのは、食堂車の歸りに咬へ楊枝か何かでゾロ／＼つながつて通る場合、一番後の者が締めて行かない、まだ來るだらうと云ふつもりで、開けつ放しで行つてしまふ。その外、汽車の便所は用の度毎にちやんと水を流すやうな設備がしてあり、注意書きまでしてあるのだが、それを實行してゐる者は百人に一人もあるまい。いや、それどころか、洗面所で顔を洗つて、汚れた水を流して行かない。必ず後へ行つた者が前の人の使つた水を流さなければならぬ。これらは便所で臀を拭かないのと同じやうなもので、公德などとむづかしく云ふ迄もなく、常識で考へたら分ることなんだが、誰も訝しまず、耻ぢもしないのは、實に不思議な文明國民と云はざるを得ない。勿論日本人の此の悪い癖は汽車の中に限つたことではないが、しかし汽車が一番ひどく、外の場所だと禮儀を守る人までが、忽ち平素の嗜みを忘れてしまふのは重ね／＼不思議千萬である。

○

冬旅行をして困るのは、汽車、汽船、ホテル、旅館、電車、自動車等で、暖房の設備があるものとならないものがあり、且その温度がまち／＼であるために、風邪を引き易いことであ

る。かよわい婦人や子供などを連れてゐる時は、それで特に心配をする。尤も、ビルディングの冷房装置でもヤラレることがあるのだから、かう云ふ風な便利が生んだ不便の現象は、都會の日常生活にもしば／＼起ることだけれども、旅行の際は、一日のうちに甚だ頻繁に温度の變化に遭遇し、且その變化が全く不意討ちに來ることがある。それで思ひ出したのは、或る年の冬、夜の十二時に高濱から別府航路の船に乗つたら、二つ三つ空いてゐた船室の中で「此處が一番暖かにしてございますから」と、ボーイが案内してくれた部屋と云ふのが、ステイムを一杯に出し切つて、とても熱くしてあるのである。それでも寝てしまへば濟むと思つて、なるだけ薄着をして寢臺へ這入つたけれども、時がたつ程カッカツと上氣せて、まるで蒸風呂にゐるやうなのである。よんどころなく下着類を皆脱いで素肌に浴衣一枚になり、毛布を残らず剥いでしまつたが、まだ汗が湧いて出る。お蔭で私は一と晩ちゆう寝返りを打つて悶えつゞけた。一體、船のキャビンは狭くもあるし、風通しも悪いし、火の氣の近い所であるから、ヒーターがなくても結構凌げるくらゐであるのに、それをあんなに熱くして客を優遇した積りであるのなら、常識を疑はざるを得ない。さうかと思ふと、これは五百噸にも足らぬ小蒸汽であるからキャビンは附いてゐなかつたが、或る時内海の島から島へ渡らうとして或る船へ乗り、入れ込みの廣間へ這入つてみると、むうツと嘔き氣を催すやうに熱く、ぼた／＼玉の汗が落ちて來る。で、歸る時には又もう一と茹で茹でられる覺悟をしてゐると、今度の船は乗客が少いのでステイムを儉約

したのであらう、大きな部屋に消えかゝつた炭團の入れてある火鉢が一つしか置いてない。おまけにこれは三方が窓と来てゐるから、隙間洩る風の寒さと云つたらないのである。かう云ふ風に熱かつたり寒かつたりが激しくては、いくら用心してゐる者でも風邪を引いてしまふのであるが、概して寒過ぎるよりも熱過ぎるために困ることの方が多い。汽車などでも、東海道線の急行に乗つたら、とてもステイムが熱くしてある。夜はさうでもないけれども、日中、天氣の好い時は、窓ガラスを透して来る太陽の熱だけでも充分であり、且あれだけの人間のいきれもあるのだから、あれをもう少し調節する譯には行かないのであらうか。私は上氣せ性であるから人一倍それを感じるものであらうが、今日の大多數の日本人が暖房設備のない家屋に住んでゐることを、考へて貰ひたいのである。私はあの熱さを思ふと、冬は晝間の汽車で東海道を往復する氣になれない。就中、名古屋から静岡、沼津ぐらゐ迄の間は、午後の日光が強くさし込んで来る上に、ちやうど最も退屈する時間にも當るので、全く熱さに茹だつてしまひ、新聞雑誌を読む氣力も、外の景色を眺める興味もなく、唯もう居睡りばかりが出る。それも春風駘蕩たる氣分の居睡りではなくて、眼が覺めてみると體ぢゆうが脂汗でべと／＼し、節々が痛み、口の中がパサ／＼に渴いてゐて、却つて疲勞を覺えるやうな種類の睡りなのである。その外、あのために咽喉を痛めたり、頭痛を感じたり、酔つたりする者は随分少くないであらう。さう云へば、西洋人は馬鹿馬鹿しく熱い室内で事務を取つたり談笑したりしてゐるのに毎々驚かされるのであるが、

事に依ると日本の鐵道省には、日本人よりも西洋人に迎合しようとした明治時代の植民地根性が未だに残存してゐるのでもあらうか。

若い時分には洋式のホテルも悪くないけれども、年を取るといゝな點で日本宿屋がなつかしくなる。私なども、ひとしきりホテルのない地方へは旅をしなかつた程であつたのが、今はその反對に、多少の不便を忍んでも日本風を選ぶやうになつた。いや、その不便を忍ぶところに云ひ知れぬ旅情を覺えるのであるから、あまり行き届き過ぎた、都會風に氣の利き過ぎた待遇も、却つてどうかと思ふのである。それで私は、知らぬ土地へ行つて泊まる時は、人に尋ねたり案内記を讀んだりして、旅館の名前を二つ三つ調べて置いてから、先づそれらの家の前を一遍ずつと素通りしてみる。驛から自動車で飛ばす時にも決して横付けにはさせないで、二三軒の宿屋の前を走らして、店の構へを見てから後にきめることにしてゐる。夕方、目的地に着いて、どんな宿屋が自分を待つてゐるであらうかと思ひながら、淡い郷愁と、好奇心と、疲勞と、空腹とを覺えつゝ、彼方此方に灯のともりかけた田舎の町をうろ／＼とさまよひ廻る氣分、——まだ何處へ宿るともきまらずに、とある四つ辻に低徊したり橋の上に立ち止まつたりしてゐる時の心持ち、——青年時代に放浪生活をした私は、さう云ふ感傷的な夕暮に今もあこがれを持つてゐて、それが私を旅に赴

かせる一つの魅惑なものであるが、さてさう云ふ風な場合に、どう云ふ構へをした宿屋に最も足が向くかと云へば、あまり現代風なものよりも幾分か時勢後れのもの、黙阿彌の世話物や長谷川伸君の股旅物に出て来るやうな、一口に云へば「旅館」でなくて「旅籠屋」と云つた風情のものに、餘計惹き付けられるのである。然るに近頃は、土地での舊い暖簾を誇る一流の宿屋が、次第に旅籠屋から旅館に轉化しつつある。彼等は皆、父祖の代から受け継いだ昔ながらの店の構へはそのまゝにして置いて、離れた所へ「別館」と稱するものを建てるが、あれは私の好みに合はない。矢張軒の深い、間口の長い店が街道に面してゐて、土間へ這入ると上り框の正面に幅の廣い階段があり、二階の欄干からは町の人通りが見おろせると云つた風の——それもなるべくなら堂々たる構への、たとへば古市の油屋、琴平のとらやのやうなのがよいが、時にはうらぶれた寒驛の、停車場前などにある旅人宿も、ちよつと一と晩ぐらゐであつたら泊まつてみたくないこともない。さうして座敷の木口なども、新しいよりは黒光りのしてゐる方が、何かしみじみとした落ち着きがあつて、その町の歴史や傳説を想ひ起すやすくなる。尤もさう云ふ宿屋だと、何かの設備が舊式であるから、いろ／＼の不自由に堪へる覺悟が必要なのは云ふ迄もない。先づ暖房などはないものとあきらめる。どんなに寒い最中でも、炬燵か、圍爐裏か、湯たんぼ以上のものは望めない。便所も水洗式など、云ふ譯には行かぬ。料理なども、二の膳つきで、さまざまな色どりは並ぶけれども、味はまづいのが普通で、上方語の所謂「もみない」ものと

思はねばならない。たゞ、時代のついた床柱や、書院や縁側の障子の組み方や、欄間や欄干の彫刻や、前栽の苔や燈籠や植ゑ込みや、萬事におほまかな感じのする座敷の居心地が御馳走なのである。さうして、さう云ふ宿屋に限つて、外のことには氣が利かないが、床飾りなどには念を入れて、掛け軸や生け花に人知れず心を配つたりしてゐる。以前私がしばしば出かけた或る山陰の都會の宿屋では、近年その町に出來た新式の旅館に押されてしまつて繁昌しないらしいのであるが、前に電報を打つてから行くと、床の間の花が生けかへてゐる。それが、投げ入れのぞんざいではなくて、立派な薄端に、丹念に枝をためて天地人の位を取つたお流儀の生け方なのである。で、女中にきいてみると主人が未生流の心得があるので、自分で生けるのだと云ふことであつたが、いかにも、流行らなくなつた田舎の旅館の亭主などの手すさびとしてふさはしくもあり、何はなくともその端正な花のお蔭で、客あしらの丁寧な、律義なと云ふ感じを與へる。それから、卓しよくとか、衣衿えしんとか、脇息とか、煙草盆とか、火鉢とか、硯箱とか云つた類に、今出來の品でない、がつしりとした大手なものを使つてゐるのもさう云ふ家に多いやうである。と云つても、近頃の東京あたりの料理屋のやうに、それらの品物の骨董的價値を誇らうと云ふ氣があるのではなく、先祖の代から使ひふるした品であつて今の趣味には合はないながらも、まだ使へるから間に合はせてゐると云ふだけである。その代りそんな宿屋では、留守に來客があつたことを告げなかつたり、用を頼んでも手間がかゝつたり、朝は早くから雨戸を開けてしま

はれたり、いろ／＼不都合な目に遭ふので、まあ忍耐力を養成するため、氣を長く持つ練習のためと心得て泊まらねばならない。私はなるべく、冬はさう云ふ宿屋へは行かないことにしてゐると云ふのは、大して寒がりではないけれども、何も辛抱だと思つて泊つてゐるうちに結局風邪を引くやうなことが多いからである。

日本宿屋へ泊まつて味氣なく思ふことの一つは、座敷の出入りに女中が襖を開け放しにする。これはさつきの汽車のドアの場合と同じく、日本人の悪い癖で、日常一般の家庭に於いても屢々見られることなのであるが、しかし宿屋は知らぬ人同士が部屋を接してゐるのであるから、もう少しかう云ふ神経が鋭敏であつて欲しいのに、次の間まで這入つて来て座敷の客に物を云ふ時、廊下との境界の襖を締める女中はめつたにない。それはまだいゝが出て行く時にも大概明け放しである。膳やお銚子を何度にも運ぶ時などはその度毎に開け立てするのが面倒なのであらうけれども、さうかと云つて、臺所まで行き通ひする間、開けておく、と云ふ法はない。第一次の間には衣類だの携帯品だのが置いてあるのに、廊下から見えては無用心であるのみならず、冬は此のために一層寒い思ひをするので、つくづく腹が立つことがある。それと云ふのが、もと／＼ストーヴのない部屋だから中々暖めにくいのであるが、炭をついだり炬燵を入れて貰つたりして辛くも凌ぎをつけてゐると、

女中が這入つて来たお蔭で一遍に又身ぶるひが出る。それもその筈、廊下から次の間を経て座敷へ通る迄に二枚の襖があるところを、一つも締めて来ないのである。冬の宿屋へ泊まつたら殆んど十中の八九までかう云ふ憂き目を見るのであるが、そのくらゐなことはなせ不斷から教へ込んでおかないのかと、私はいつも不審に思ふ。それから、もう一つ不審に思ふことは、汽車汽船の連絡の都合とか、遊覽の道順とか、その他土地の案内について質問しても、ハキ／＼と答へられる女中が一人もゐない、何を尋ねても、「私では分りませんから番頭さんに聞いて参ります」と云ふ。成る程、間違つた答へをするよりは聞いて来るのに越したことはないやうなもの、此方は別にむづかしいことを尋ねるのではなく、何處そこ迄は何里ぐらゐあるかとか、自動車でなら何分か、つて賃金はいくら程とか、その土地に育つて小學校を出た者なら誰でも知つてゐさうなことを、給仕に坐つてゐてくれる時外に話もないものだから聞くのであるが、決してすらく／＼と答へてくれた例たれしがない。「さあ」と、口の中で何か曖昧なことを云つて、下を向きながらニヤ／＼笑ふ。こんな場合、たとひ風呂の三助でも、相手が男だともう少し要領を得られるのであるが、女は元來地理や歴史の興味に疎く、自分の生れた土地についても特に教へて貰はない限りは進んで知らうともしないのであらう。それともう一つは、宿の女中には案外渡り者が多くて土地の人間が少いと云ふ證據でもあらう。だが何にしても教育の普及してゐる今日、そんな簡単な質問に答へられないと云ふこと自體が不都合であるから、これは是非とも宿の主人なり番頭なり